

佐知遺跡高原地点

市道佐知白木線拡幅・新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

中津市教育委員会

例 言

1. 本書は中津市教育委員会が平成 23～24 年度に行った、中津市大字三光佐知に所在する市道佐知白木線市道拡幅・新設工事に伴う佐知遺跡高原地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査は試掘調査は平成 23 年 11 月 15・16 日に浦井直幸（中津市教育委員会文化財係員）が行ない、本調査は平成 23 年 12 月 25 日～平成 24 年 4 月 14 日に浦井・萩幸二（同嘱託）が実施した。
3. 現場で用いた座標は世界測地系による。
4. 遺構の実測写真撮影は萩が行ない、遺跡の空中写真は東亜航空技研株式会社に委託した。
5. 遺構図の下図作成・トレース、石器・土錘の実測・トレース・観察表作成・写真撮影は萩が行い、土器と石皿の実測・トレース・写真撮影、土器観察表の作成は株式会社木崎工業に委託した。
6. 本書の執筆・編集は萩が当り、土器の事実記載・第 4 章 1 は村上久和が行った。
7. 挿図における遺構の略号は、以下のとおりである。
SH＝竪穴住居址 SK＝土坑 SD＝溝状遺構 SP＝柱穴
8. 遺構番号は第 1～第 4 調査区で通し番号を、第 5・第 6 調査区で別に通し番号を振っている。

目 次

第1章 はじめに…………… 1	3. 第3調査区…………… 38
1. 調査にいたる経過…………… 1	4. 第4調査区…………… 41
2. 調査期間…………… 1	5. 第5調査区…………… 45
3. 調査組織…………… 1	6. 第6調査区…………… 61
第2章 遺跡の立地と環境…………… 3	第4章 まとめ…………… 78
1. 地理的環境…………… 3	1. 出土土器の様相について…………… 78
2. 歴史的環境…………… 3	2. 出土土器について…………… 79
第3章 調査の成果…………… 7	3. 遺構について…………… 80
1. 第1調査区…………… 7	写真図版編…………… 83
2. 第2調査区…………… 36	

図 版 目 次

第1図 遺跡の位置図…………… 2	第26図 第6号土坑出土土器 (1/3) …… 29
第2図 中津平野の地形面分類図 (千田昇 1991) 3	第27図 第8号土坑平・断面図 (1/30) …… 31
第3図 周辺の遺跡分布 (1/30,000) …… 5	第28図 第8号土坑出土土器 (1/3) …… 29
第4図 市道佐知白木線拡幅・新設工事予定地… 8	第29図 第9号土坑平・断面図 (1/20) …… 32
第5図 発掘調査地 (1/625) …… 9	第30図 第17号土坑平・断面図 (1/30) …… 32
第6図 第1調査区・第2調査区遺構配置図…11～13	第31図 第1号土坑平・断面図 (1/20) …… 32
第7図 第1調査区・第3調査区遺構配置図…14～16	第32図 第1号土坑出土土器 (1/3) …… 33
第8図 第1号住居址平・断面図 (1/20) …… 7	第33図 第2号土坑平・断面図 (1/20) …… 33
第9図 第2号住居址平・断面図 (1/40) …… 17	第34図 第5号土坑平・断面図 (1/20) …… 34
第10図 第2号住居址出土土器 (1/3) …… 19	第35図 第76号柱穴平・断面図 (1/20) …… 34
第11図 第3号住居址平・断面図 (1/40) …… 20	第36図 第1調査区出土の他の遺物① …… 35
第12図 第3号住居址出土土器 (1/4) …… 22	第37図 第1調査区出土の他の遺物② (2/3) …… 36
第13図 第3号住居址出土土器① (2/3) …… 23	第38図 第5号住居址平・断面図 (1/40) …… 36
第14図 第3号住居址出土土器②…………… 24	第39図 第6号住居址平・断面図 (1/40) …… 37
第15図 第4号住居址平・断面図 (1/40) …… 25	第40図 第6号住居址出土土器 (1/3) …… 37
第16図 第4号住居址出土土器 (1/3) …… 25	第41図 第5・6号溝状遺構平・断面図 (1/40) …… 37
第17図 第1号溝状遺構平・断面図 (1/40) …… 26	第42図 第12号土坑平・断面図 (1/20) …… 38
第18図 第2号溝状遺構平・断面図 (1/40) …… 26	第43図 第2調査区出土の他の遺物 (1/3) …… 38
第19図 第3号溝状遺構平・断面図 (1/40) …… 27	第44図 第15号土坑平・断面図 (1/40) …… 38
第20図 第4号溝状遺構平・断面図 (1/40) …… 27	第45図 第18号土坑平・断面図 (1/20) …… 39
第21図 第3号土坑平・断面図 (1/20) …… 28	第46図 第3調査区出土の他の遺物…………… 39
第22図 第3号土坑出土土器 (1/4) …… 28	第47図 第4調査区遺構配置図 (1/100) …… 40
第23図 第4号土坑平・断面図 (1/20) …… 29	第48図 第7号土坑平・断面図 (1/20) …… 41
第24図 第4号土坑出土土器 (1/4) …… 30	第49図 第13号住居址平・断面図 (1/20) …… 41
第25図 第6号土坑平・断面図 (1/20) …… 31	第50図 第14号土坑平・断面図 (1/20) …… 42

第51図	第14号土坑出土土器 (1/4) ……………	42	第71図	第2号土坑平・断面図 (1/40) ……………	57
第52図	第7号溝状遺構平・断面図 (1/40) ……………	43	第72図	第2号土坑出土遺物 (1/3) ……………	58
第53図	第7号溝状遺構出土遺物 ……………	44	第73図	第5調査区出土の他の土器 (1/3) ……………	59
第54図	第4調査区出土の他の遺物……………	45	第74図	第5調査区出土の他の石器……………	60
第55図	第5調査区遺構配置図 (1/250) ……………	46	第75図	第6調査区遺構配置図 (1/250) ……………	62
第56図	第1号烟跡平・断面図 (1/50) ……………	47	第76図	第1号溝状遺構平・断面図 (1/40) ……………	61
第57図	第1号烟跡出土遺物 ……………	48	第77図	第26号土坑平・断面図 (1/20) ……………	63
第58図	第30号土坑平・断面図 (1/20) ……………	49	第78図	第26号土坑出土土器 (1/3) ……………	63
第59図	第33号土坑平・断面図 (1/20) ……………	49	第79図	第10号土坑平・断面図 (1/40) ……………	64
第60図	第4号土坑平・断面図 (1/10) ……………	50	第80図	第11号土坑平・断面図 (1/40) ……………	65
第61図	第4号土坑出土土器 (1/3) ……………	51	第81図	第12号土坑平・断面図 (1/40) ……………	66
第62図	第4号土坑出土石器 ……………	52	第82図	第12号土坑出土石器 (1/3) ……………	64
第63図	第5号土坑平・断面図 (1/20) ……………	53	第83図	第14号土坑平・断面図 (1/40) ……………	65
第64図	第5号土坑出土遺物……………	54	第84図	第14号土坑出土遺物……………	67
第65図	第6号土坑平・断面図 (1/20) ……………	55	第85図	第9号土坑平・断面図 (1/20) ……………	67
第66図	第6号土坑出土遺物 (1/3) ……………	55	第86図	第19号土坑平・断面図 (1/20) ……………	68
第67図	第31号土坑平・断面図 (1/20) ……………	55	第87図	第19号土坑出土石器 (1/2) ……………	68
第68図	第31号出土土器 (1/3) ……………	56	第88図	第20号土坑平・断面図 (1/40) ……………	69
第69図	第32号土坑平・断面図 (1/20) ……………	56	第89図	第6調査区出土の他の遺物……………	70
第70図	第32号土坑出土土器 (1/3) ……………	57			

写真図版

写真図版1 (第1調査区) ……………	85
1. 第1号住居址完掘状況東から 2. 第1号住居址西壁東から 3. 第4号住居址生活面南から	
4. 第4号住居址東西ベルト南から 5. 第4号住居址南北ベルト南半東から	
6. 第4号住居址南北ベルト北半東から	
写真図版2 (第1調査区第2号住居址) ……………	86
1. 検出状況南から 2. 東西ベルト北から 3. 南北ベルト南半東から 4. 南北ベルト北半東から	
5. 生活面南から 6. 遺物出土状況南から	
写真図版3 (第1調査区第3号住居址) ……………	87
1. 生活面東から 2. 東西ベルト東半北から 3. 東西ベルト西半北から 4. 南北ベルト南半西から	
5. 南北ベルト北半西から 6. 遺物出土状況西から	
写真図版4 (第1調査区) ……………	88
1. 第3号土坑検出状況西から 2. 第3号土坑東西ベルト北から 3. 第3号土坑南北ベルト西から	
4. 第3号土坑遺物出土状況西から 5. 第4号土坑遺物出土状況東から 6. 第4号土坑検出状況東から	
7. 第4号土坑完掘状況西から 8. 第4号土坑半截状況北から	
写真図版5 (第1調査区貯蔵穴) ……………	89
1. 第6号土坑完掘状況・東壁西から 2. 第8号土坑半截東から 3. 第8号土坑完掘状況西から	

4. 第9号土坑半截東から	5. 第9号土坑完掘状況東から	6. 第17号土坑半截西から	
7. 第17号土坑完掘状況西から			
写真図版6 (第1調査区)			90
1. 第1号土坑完掘状況西から	2. 第2号土坑半截状況	3. 第5号土坑半截西から	
4. 第5号土坑完掘状況西から	5. 第76号柱穴礫出土状況東から	6. 第1号溝状遺構東壁西から	
7. 第1号溝状遺構完掘状況西から			
写真図版7 (第1調査区第1b～第4号溝状遺構)			91
1. 第1b号溝状遺構完掘状況西から	2. 第2号溝状遺構完掘状況南西から	3. 第3号溝状遺構完掘状況西から	
4. 第2号溝状遺構西壁東から	5. 第3号溝状遺構東壁西から	6. 第4号溝状遺構a・b境土層南西から	
7. 第4号溝状遺構b・c境土層北東から	8. 第4号溝状遺構完掘状況南西から		
写真図版8 (第2・第3調査区)			92
1. 第5号住居址生活面東から	2. 第6号住居址生活面東から	3. 第6号住居址西壁東から	
4. 第5・6号溝状遺構完掘状況西から	5. 第151号柱穴遺物出土状況東から		
6. 第15号土坑完掘状況・西壁東から (第3調査区)			
写真図版9 (第4調査区)			93
1. 第7号住居址生活面南から	2. 第7号溝状遺構完掘状況西から	3. 第13号土坑完掘状況北から	
4. 第7号溝状遺構西壁東から	5. 第13号土坑半截西から		
写真図版10 (第4調査区第14号土坑)			94
1. 半截東から	2. 完掘状況西から		
写真図版11 (第5調査区)			95
1. 第1号畑跡検出状況東から	2. 第1号畑跡西壁東から	3. 第1号畑跡完掘状況東から	
4. 第30号土坑完掘状況北から	5. 第30号土坑半截北から	6. 第33号土坑半截西から	
7. 第33号土坑完掘状況北東から			
写真図版12 (第5調査区)			96
1. 第4号土坑検出状況西から	2. 第4号土坑半截北から	3. 第4号土坑完掘状況東から	
4. 第5号土坑半截西から	5. 第5号土坑完掘状況東から	6. 第6号土坑半截東から	
7. 第6号土坑完掘状況東から	8. 第31号土坑遺物出土状況北から	9. 第31号土坑中央ベルト南から	
10. 第31号土坑完掘状況北から			
写真図版13 (第5調査区)			97
1. 第32号土坑完掘状況東から	2. 第32号土坑半截東から	3. 第2号土坑完掘状況東から	
4. 第2号土坑半截西から			
写真図版14 (第6調査区)			98
1. 第1号溝状遺構完掘状況東から	2. 第1号溝状遺構a・b境土層西から	3. 第1号溝状遺構東壁西から	
4. 第26号土坑遺物出土状況南から	5. 第26号土坑完掘状況南から	6. 第9号土坑完掘状況・西壁東から	
写真図版15 (第6調査区)			99
1. 第19号土坑完掘状況東から	2. 第19号土坑半截南から	3. 第20号土坑完掘状況西から	
4. 第20号土坑半截西から	5. 第10号土坑完掘状況西から	6. 第10号土坑中央ベルト西から	
7. 第11号土坑完掘状況東から	8. 第11号土坑西壁東から	9. 第11号土坑北壁南から	
写真図版16 (第6調査区)			100
1. 第12号土坑完掘状況北から	2. 第12号土坑中央ベルト南から	3. 第14号土坑完掘状況東から	

4. 第14号土坑西壁東から	5. 第15号土坑完掘状況西から	5. 第15号土坑中央ベルト西から	
写真図版 17 (第1調査区)	第10図 第2号住居址出土土器1~8		101
写真図版 18 (第1調査区)	第12図 第3号住居址出土土器1~12		102
写真図版 19 (第1調査区)	第13図 第3号住居址出土石器①1~3 第14図 第3号住居址出土石器②1・2 第28図 第8号土坑出土土器 第22図 第3号土坑出土土器 第24図 第4号土坑出土土器 第26図 第6号土坑出土土器 第16図 第4号住居址出土土器 第32図 第1号土坑出土土器1・2		103
写真図版 20 (第1調査区)	第36図 第1調査区出土の他の遺物①2~4 本遺跡出土の土錘 第37図 第1調査区出土の他の遺物② 第2調査区 第40図 第6号住居址出土土器 第43図 第2調査区出土の他の遺物 第3調査区 第46図 第3調査区出土の他の遺物		104
写真図版 21 (第4調査区)	第51図 第14号土坑出土土器 第53図 第7号溝状遺構出土遺物1~3 第54図 第4調査区出土の他の遺物1・2・5・6 第57図 第1号畑跡出土遺物1~6		105
写真図版 22 (第5調査区)	第57図 第1号畑跡出土遺物7~9 第61図 第4号土坑出土土器1~7		106
写真図版 23 (第5調査区)	第62図 第4号土坑出土石器1~3 第64図 第5号土坑出土遺物1~3 第67図 第31号土坑出土土器1・2 第69図 第32号土坑出土土器1・2		107
写真図版 24 (第5調査区)	第71図 第2号土坑出土遺物1~8 第72図 第5調査区出土の他の土器1~4・6・7		108
写真図版 25 (第5号調査区)	第72図 第5調査区出土の他の土器5 第73図 第5調査区出土の他の石器1~5 第81図 第12号土坑出土石器 第77図 第26号土坑出土土器1~3 第83図 第14号土坑出土遺物1・2・4・5		109
写真図版 26 (第6調査区)	第88図 第6調査区出土の他の遺物1~9 第86図 第19号土坑出土石器		110

表 目 次

第1a表 土器観察表	71	第4表 調査区ごとの器種別石材組成表	76
第1b表 土器観察表	72	第5表 器種別石材組成表	77
第1c表 土器観察表	73	第6表 弥生時代前期後半前後の遺構の種類	81
第1d表 土器観察表	74	第7表 弥生時代中期末~後期初頭の遺構の種類	81
第2表 土錘観察表	75	第8表 弥生時代終末~古墳時代初頭の遺構の種類	81
第3表 出土石器観察表	75		

第1章 はじめに

1. 調査にいたる経過

三光佐知47番地他地内における市道拡幅工事が計画され、当該地が佐知遺跡の東端に当るので、平成23年11月に確認調査を実施したところ堅穴住居・土坑・柱穴などが検出され、高原地区として本調査が行なわれることとなった。

2. 調査期間

確認調査 平成23年11月15・16日
本調査 平成23年12月15日～平成24年4月14日
整理作業 平成25年8月1日～平成26年2月28日

3. 調査組織

平成23年度

調査主体 中津市教育委員会
調査責任者 北山 一彦 (中津市教育委員会教育長)
調査事務 藤原 義郎 (同 文化振興課長)
田中布由彦 (同 文化財係長)
平田 由美 (同 文化財係員)
担 当 浦井 直幸 (同 文化財係員)
萩 幸二 (同 嘱託)
発掘作業員 青木木 池田奈緒子 石塔美代子 植山加奈枝 衛藤京子 江藤由美
太田博泰 奥中廣雪 河原田実男 坂本志織 佐藤洋史 瀬口礼子
高田早苗 竹折正二 田島律子 田中政江 寺本利子 中尾亜紀
野田秀幸 原ひとみ 藤野初音 宮津しのぶ 榎本智美 山本高亮

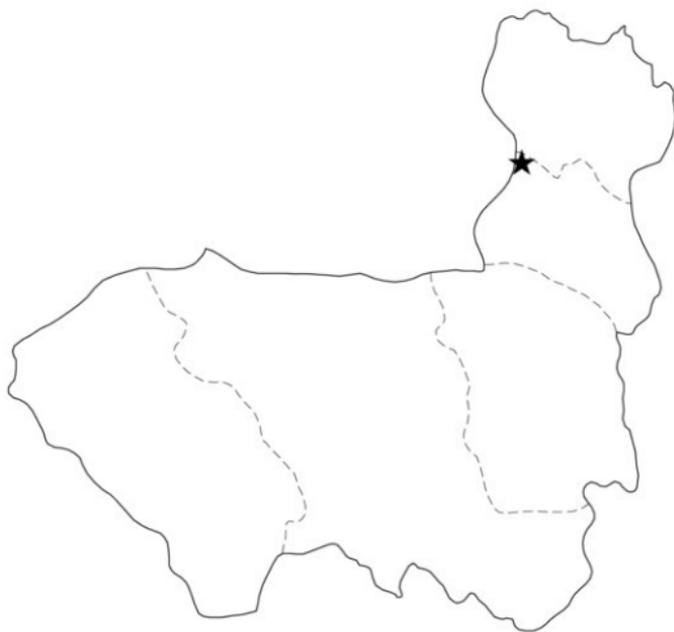
平成24年度

調査主体 中津市教育委員会
調査責任者 廣畑 功 (中津市教育委員会教育長)
調査事務 藤原 義郎 (同 文化振興課長)
田中布由彦 (同 文化振興課参事)
高崎 章子 (同 文化財係長)
平田 由美 (同 文化財係員)
担 当 浦井 直幸 (同 文化財係員)
萩 幸二 (同 嘱託)

平成25年度

調査主体 中津市教育委員会
調査責任者 廣畑 功 (中津市教育委員会教育長)

調査事務	川西 州作 (同	文化財課長)
	高崎 章子 (同	文化財係長)
	平田 由美 (同	文化財係員)
担 当	浦井 直幸 (同	文化財係員)
	荻 幸二 (同	嘱託)

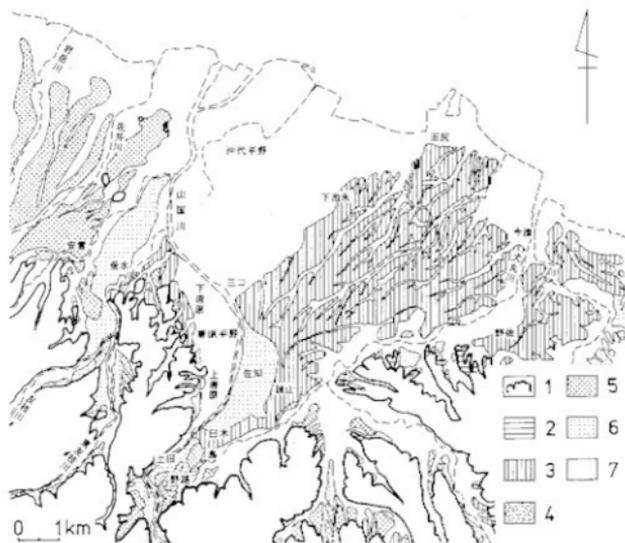


第1図 遺跡の位置図

第2章 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

本遺跡は、大分県中津市大字三光佐知 47～59 番に所在する。筑紫山地の東端に近い英彦山に連なる山地を英彦山に源を発する山国川が山国町で北流し、山地から土田辺りで中津扇状地を経て、三口から中津平野を流れてから周防灘に降ってゆく。本遺跡は山国川が扇状地に入った東岸の扇状地上でも標高 25～28m のやや低位の、河岸段丘で形成された垂水面上に立地する。確認調査の結果から、黄褐色ロームを基盤層とし、その上面にクロボクが乗っており、遺構はクロボク層面に形成されている。



第2図 中津平野の地形面分類図 (千田昇 1991)

1. 山地・丘陵地 2. 高位段丘面 3. 中津面 4. 阿蘇火砕流堆積扇 5. 安曇面
6. 垂水面 7. 沖積面

2. 歴史的環境

本遺跡周辺では旧石器時代の活動は乏しく、法垣遺跡で縄文時代のものに混じって、流紋岩製の三稜尖頭器やナイフ形石器が検出されているのみで、旧中津市内でも諸田遺跡で剥片尖頭器、伊藤田田中遺跡で針尾系黒曜石製の今峠型ナイフ形石器、定留赤松遺跡で流紋岩製の石核が単発的に出土しているのみである。

縄文時代に入ると、先ず早期では勘助野地、清水郎西、黒水の3遺跡が挙げられる。勘助野地遺跡では、早～前期の土坑が検出され、石鏃や土器片が出土しており、清水郎西遺跡では早期の集石遺構・土坑が検出され、黒水では早期末～前期の陥し穴が検出され、石鏃が出土している。また勘助野地遺跡では、早期～前期に至る土坑から磨製石斧・石鏃が出土している。続いては後～晩期の以下の遺跡が認められる。大分県教委調査の佐知遺跡では、後期の竪穴住居と石鏃・盤状土偶などが検出され、隣接する佐知久保郷遺跡でも、後期の竪穴住居に伴って石鏃・扁平打製石斧が出土している。

積遺跡では後期の竪穴住居・溝状遺構・陥し穴に伴い、分銅形土偶が出土している。ボウガキ遺跡では後期～晩期の竪穴住居・土壇墓・土坑から石鐮・石錐・石錘・扁平打製石斧・磨製石斧などが出土し、貝塚と考えられる貝層が検出されている。更に、法垣遺跡——以前は大坪遺跡という名称であったが、変更された——では、後～晩期の竪穴住居・掘立柱建物跡・陥し穴などから石鐮・石錐・扁平打製石斧・磨製石斧などが出土している。加米東遺跡では、自然流路から晩期の土器片や石鐮・扁平打製石斧などが検出された。

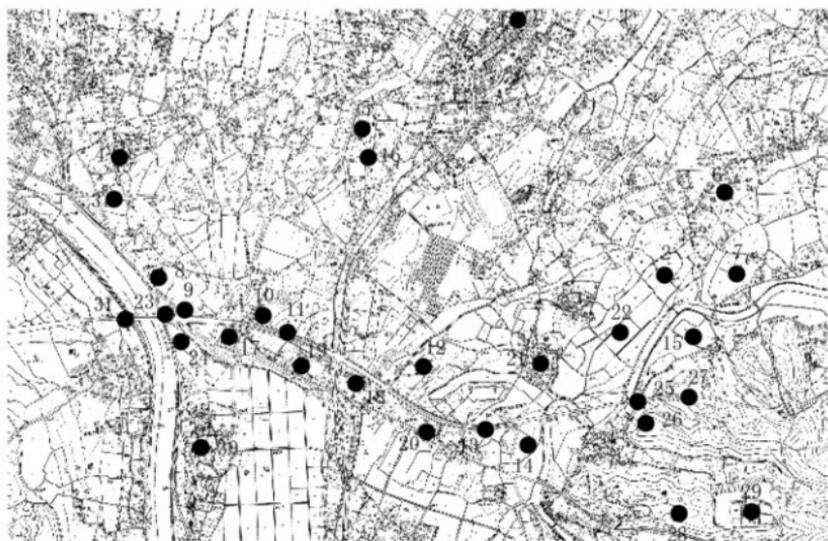
弥生時代では、以下の遺跡群が調査されている。前期では、六畝町遺跡で竪穴遺構が検出され、削器が出土しており、大池南遺跡では竪穴遺構が見つかった。また、上ノ原平原遺跡では前期～中期に至る竪穴住居・溝状遺構・土坑から石鐮・打製石斧・磨製石斧・石包丁などが出土している。佐知遺跡も同様に、前期～中期に及ぶ集落で、細形銅剣切先・朝鮮無紋土器が出土している。そして、中期の遺跡も多く認められる。佐知久保知遺跡では、竪穴住居が検出され、石鐮・打製石斧・磨製石斧・石包丁などが出土している。倉迫平遺跡では貯蔵穴が検出され、森山遺跡は竪穴住居が見られる集落跡である。清次郎原遺跡は溝状遺構・土坑などが検出され、法垣遺跡では土器片が出土した。福島遺跡・ボウガキ遺跡では、竪穴住居・溝状遺構・土坑から、石鐮・打製石斧・勾玉などが出土した。後期では少なく、犬丸川流域遺跡第4地点で竪穴住居が検出されている。

古墳時代に入ると、前期では成恒笹原遺跡から300点以上の手捏ね土器が出土した祭祀遺跡が認められ、犬丸川流域遺跡第5地点では溝状遺構が検出された。中期では、塚旗塚古墳群が存在し、助助野地遺跡で方形墓・土壇墓・土坑が検出され、埴輪が出土している。また、佐知遺跡では中期末のカマドを持つ竪穴住居が検出され、カマド祭祀の一括資料・朝鮮製銅鈴が出土している。犬丸川流域遺跡第4地点でも竪穴住居・掘立柱建物跡、柵列・溝状遺構を持つ集落が見つかった。後期では、まず、倉迫二ツ塚古墳、倉迫平1号墳、上ノ原稲荷塚古墳、原遺跡などの群集墳や上ノ原横穴墓群で横穴墓・石蓋土壇墓も検出されており、また、佐知久保畑・法垣（大坪）・原遺跡、犬丸川流域遺跡第3・4地点では竪穴住居・掘立柱建物跡を持つ集落が見つかった。更に、犬丸川流域遺跡第5地点では溝状遺構が検出され、犬丸川流域遺跡縫原地区では須恵器や瓦が、三口遺跡広畑地点では須恵器・土師器片が出土した。

古代では、以下の遺跡群が認められる。瑞雲寺遺跡・相原廃寺では古代～中世に至る寺院跡が、森山・助助野地遺跡では火葬墓が検出された。法垣（大坪）遺跡では掘立柱建物跡・土壇墓が見つかった。福島遺跡・犬丸川流域遺跡平田地区では溝状遺構・土坑から須恵器片が、三口遺跡広畑地区では掘立柱建物跡から須恵器片が出土した。また、長者屋敷官衙遺跡では、古代の下毛郡衙正倉と考えられる遺構群が検出されている。

中世になると、まず、八並城跡に代表される戦国期の城跡が散見される。更に、以下の集落関係遺跡が認められる。法垣（大坪）・原・佐知遺跡では土壇墓が検出され、権現島遺跡では溝状遺構から磁器・瓦質土器片が出土している。犬丸川流域遺跡長善寺地点では土坑・石列から土師器片・輪羽口が出土している。

近世では、成恒遺跡では近世墓群が、中原・加米居屋敷遺跡では近世集落が検出されているが、より北の中津城近くでは城下町遺跡に多くの近世集落が調査されている。



1. 中原遺跡 2. 大悟法地区条里跡 3. 三口遺跡 4. 相原廃寺 5. 八並城跡 6. 福島遺跡
7. ボウガキ遺跡 8. 警旗邸古墳群 9. 勘助野地遺跡 10. 六畝町遺跡 11. 大池南遺跡 12. 清水郎西遺跡
13. 黒水遺跡 14. 法垣(大坪遺跡) 15. 大丸川流域遺跡 16. 長者屋敷官衙遺跡 17. 上ノ原平原遺跡
18. 清次郎原遺跡 19. 上ノ原稲荷塚遺跡 20. 槇遺跡 21. 加来居屋敷遺跡 22. 加来東遺跡
23. 上ノ原横穴墓群 24. 佐知久保畑遺跡 25. 権現島遺跡 26. 北平横穴墓群 27. 森山遺跡 28. 倉迫平遺跡
29. 倉迫二ツ塚古墳 30. 佐知遺跡 31. 郷ノ原遺跡

第3図 周辺の遺跡分布 (1/30,000)

【参考文献】

- | | | |
|--------------|------|--|
| 千田 昇 | 1991 | 「Ⅳ. 考察 1. 中津平野の地形」『上ノ原横穴墓群Ⅱ』 大分教育委員会 |
| 大分県教育委員会 | 1989 | 『上ノ原横穴墓群Ⅰ』 |
| 大分県委員会 | 1989 | 『佐知遺跡』 |
| 大分県教育委員会 | 1991 | 『上ノ原横穴墓群Ⅱ』 |
| 大分県教育委員会 | 1995 | 『森山遺跡』 |
| 大分県教育委員会 | 1988 | 『勘助野地遺跡 六畝町遺跡 大池南遺跡 清水郎原西遺跡 黒水遺跡 大坪遺跡 権現島遺跡』 |
| 大分県教育委員会 | 2000 | 『上ノ原平原遺跡』 |
| 大分県教育委員会 | 2002 | 『清次郎原遺跡 上ノ原稲荷塚古墳』 |
| 大分県教育委員会 | 2003 | 『槇遺跡』 |
| 大分県埋蔵文化財センター | 2006 | 『上ノ原横穴墓群』 |
| 大分県埋蔵文化財センター | 2008 | 『黒水遺跡拝香地区』 |
| 三光村教育委員会 | 1992 | 『三光地区遺跡群調査概報Ⅰ 倉迫二ツ塚古墳 諫山遺跡 倉迫平古墳 佐知久保畑遺跡』 |
| 三光村教育委員会 | 1992 | 『第2章 4. 佐知久保畑遺跡』『三光地区遺跡群調査概報Ⅱ 諫山遺跡 B地区 外園遺跡 美濃尾遺跡 佐知久保畑遺跡』 |

- 三光村教育委員会 1994 『森山遺跡』
- 三光村教育委員会 1995 『三光地区遺跡群調査概報Ⅳ』
- 三光村教育委員会 1995 『三光村の遺跡 三光村文化財調査報告書（第2集） 倉迫ニツ塚古墳
倉迫平古墳』
- 三光村教育委員会 2001 『三光村の遺跡 三光村文化財調査報告書（第3集）』
- 三光村教育委員会 2003 『三光村の遺跡 三光村文化財調査報告書（第4集） 瑞雲遺跡 成恒笹原遺跡』
- 三光村教育委員会 2004 『三光村の遺跡 三光村文化財調査報告書（第5集） 佐知久保畑遺跡』
- 中津市教育委員会 1984 『幣旗邸古墳』
- 中津市教育委員会・三保の文化財を守る会 1992 『ボウガキ遺跡』
- 中津市教育委員会 1992 『藩校進脩館跡 相原庵寺Ⅳ 中原遺跡』
- 中津市教育委員会 1993 『原遺跡』
- 中津市教育委員会 1994 『第2章 棒垣遺跡』『棒垣遺跡 ホヤ池窟跡』
- 中津市教育委員会 1995 『幣旗邸古墳Ⅰ号墳』
- 中津市教育委員会 1996 『第3章 福島遺跡東入垣地区』『沖代地区条里跡 福島遺跡東入垣地区』
- 中津市教育委員会 1997 『第3章 福島遺跡東入垣地区』『沖代地区条里跡（Ⅱ） 福島遺跡東入垣地区（Ⅱ）』
- 中津市教育委員会 1997 『犬丸川流域遺跡群』
- 中津市教育委員会 1998 『上ノ原平原A遺跡』
- 中津市教育委員会 1998 『第2章 福島遺跡入垣地区（Ⅲ）』『福島遺跡入垣地区（Ⅲ） 定留遺跡向地区』
- 中津市教育委員会 1999 『福島遺跡（Ⅳ） 東入垣地区 定留遺跡八反ガソウ地区』
- 中津市教育委員会 2001 『長者屋敷遺跡』
- 中津市教育委員会 2001 『大悟法地区条里跡池ノ下地区 福島遺跡入垣地区 長者屋敷遺跡』
- 中津市教育委員会 2002 『第3章 大悟法地区条里跡堀田地区』『沖代地区条里跡原田地区 大悟法地区
条里跡堀田地区 中津城本丸西石垣』
- 中津市教育委員会 2005 『ボウガキ遺跡・福島遺跡棒垣地区 福島遺跡西入垣地区』
- 中津市教育委員会 2007 『第5章 長者屋敷遺跡』『沖代地区条里跡長畑地区・橋爪地区桜木地区
加米加米原地区 田尻新貝地区 長者屋敷遺跡 中津城（Ⅶ）』
- 中津市教育委員会 2008 『犬丸川流域遺跡 縫原地区・平田地区・長善寺地区』
- 中津市教育委員会 2009 『長者屋敷遺跡』
- 中津市教育委員会 2010 『加米居屋敷遺跡』
- 中津市教育委員会 2010 『第4章 長者屋敷官衙遺跡』『下宮永カマタ地区 中津城下町遺跡竹下
義兵衛屋敷跡 長者屋敷官衙遺跡 第6次調査』
- 中津市教育委員会 2012 『八並城跡』
- 中津市教育委員会 2013 『加米東遺跡』

第3章 調査の成果

確認調査の成果によって、市道佐知臼木線拡幅・新設工事予定地（第4図）に佐知遺跡の範囲内に遺跡の存在が確認され、そのうち北部と南部の2か所を発掘調査地とし、南部は現状の道路と水田の畦畔を挟んで、第1～第4調査区、北部は畦畔を挟んで第5・第6調査区を設定した（第5図）。

1. 第1調査区（第6・第7図）

南部の調査区のうち、現況道路の西側の畑であった部分を第1調査区とし、南端は急激な傾斜地であり、第1～第9までのグリッドを設定した。北端は急激な傾斜地であり、圃場整備時に大きく埋め立てられて平坦地とされていたため、調査地の北側は実質的にその地点までである。

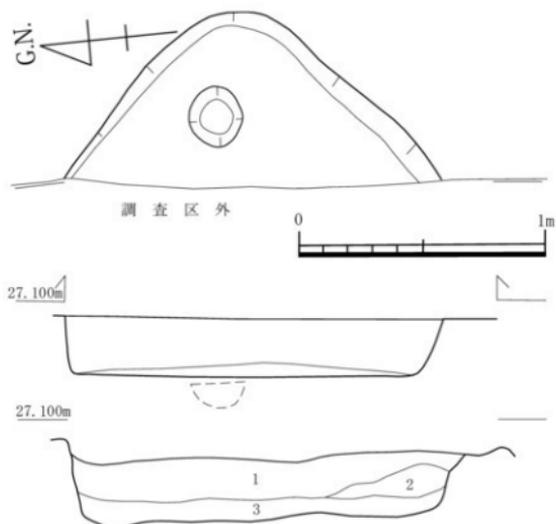
4軒の竪穴住居址、4条の溝状遺構、6基の土壇や祭祀土坑、多くの柱穴群が検出されている。

①竪穴住居址

弥生時代から古墳時代の住居址が検出されている。

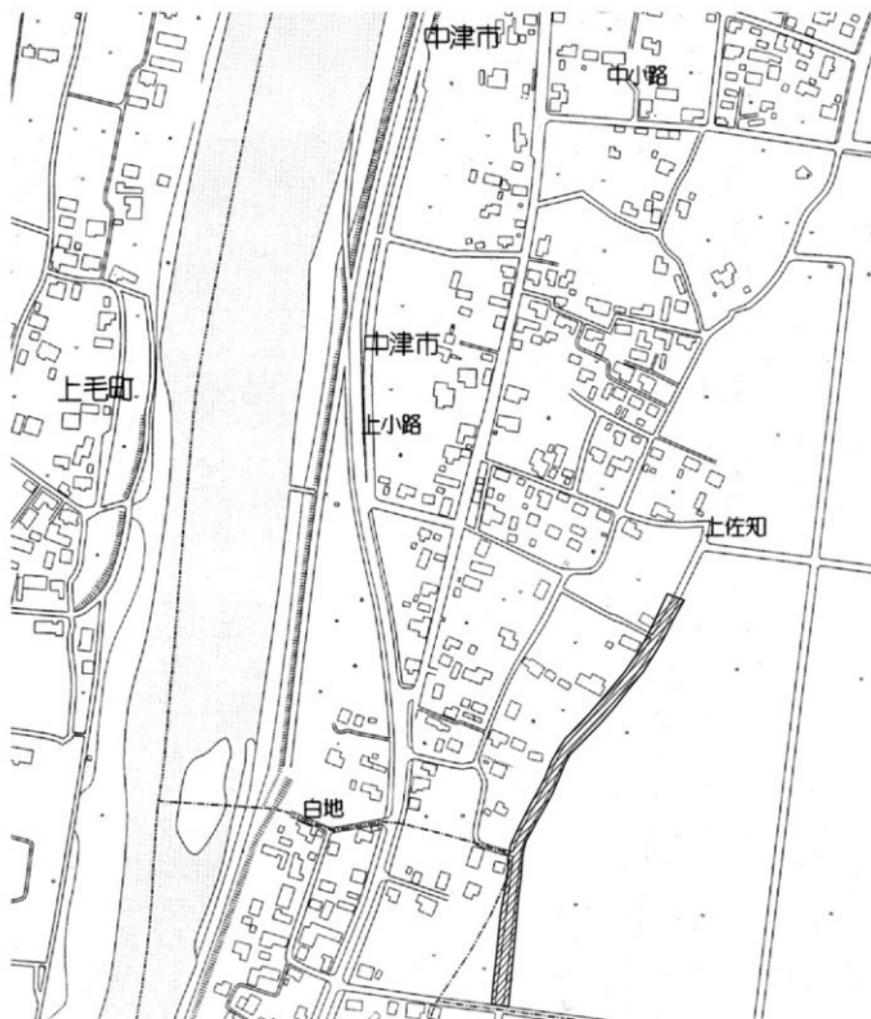
第1号住居址（第8図）

調査区南よりの3グリッドに位置し、住居跡の角部分のみが検出されている。深さ約0.4mを測る。柱穴が1本検出されているが浅く、主柱穴か判然としない。所属時期も不明である。



1. 黒褐色土：黄褐色土粒子を多く、炭化物を若干含む。しまりやや甘く、粘性ややあり。
2. 黒褐色土：黄褐色土粒子を若干含む。しまりよく、粘性ややあり。
3. 黄褐色土：黒褐色土粒子を非常に多く含む。しまりよく、粘性余りなし。

第8図 第1号住居址平・断面図（1/20）

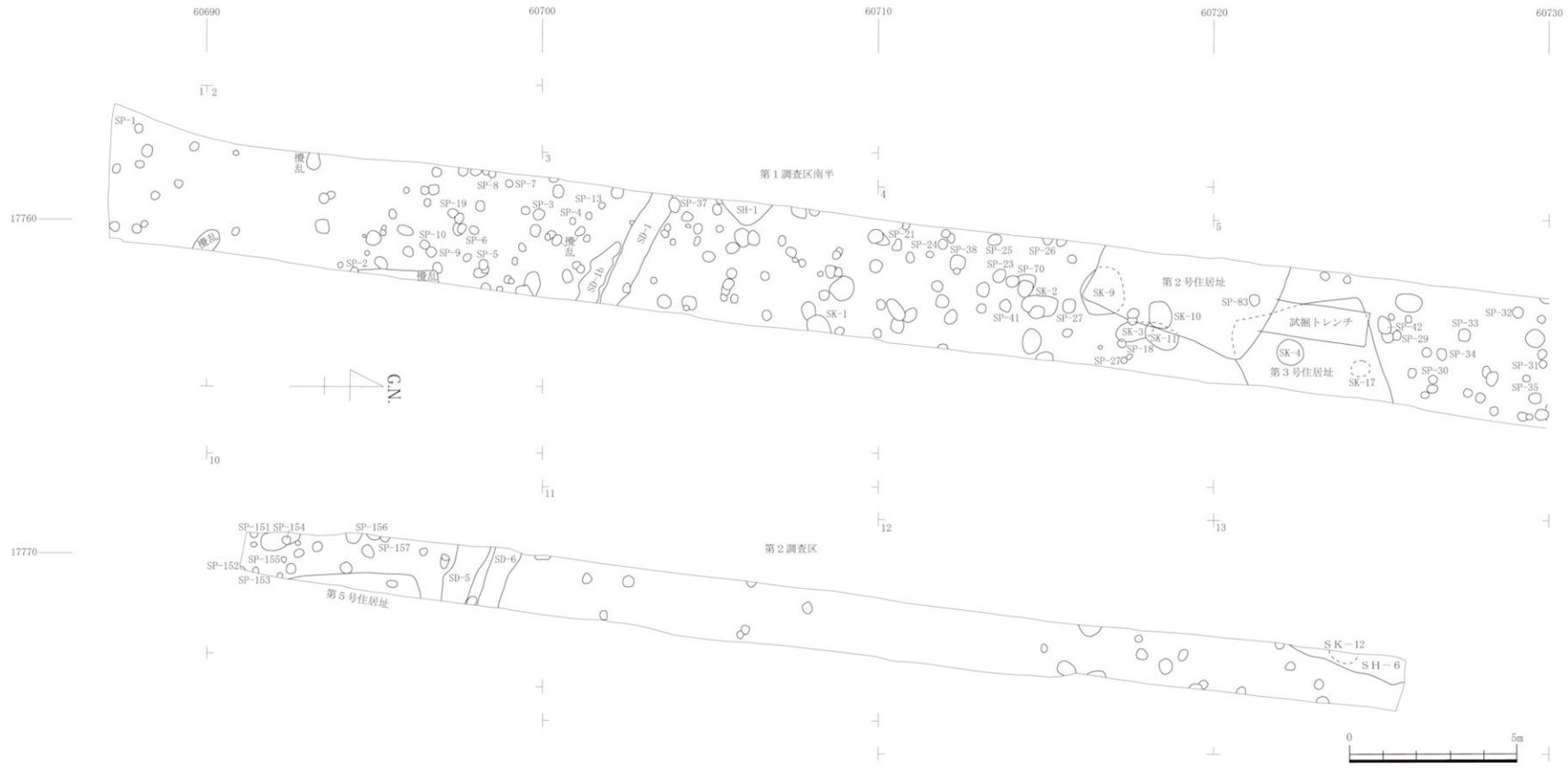


▨ 工事予定地

第4図 市道佐知白木線拡幅・新設工事予定地 (1/4,000)



第5図 発掘調査地 (1/625)



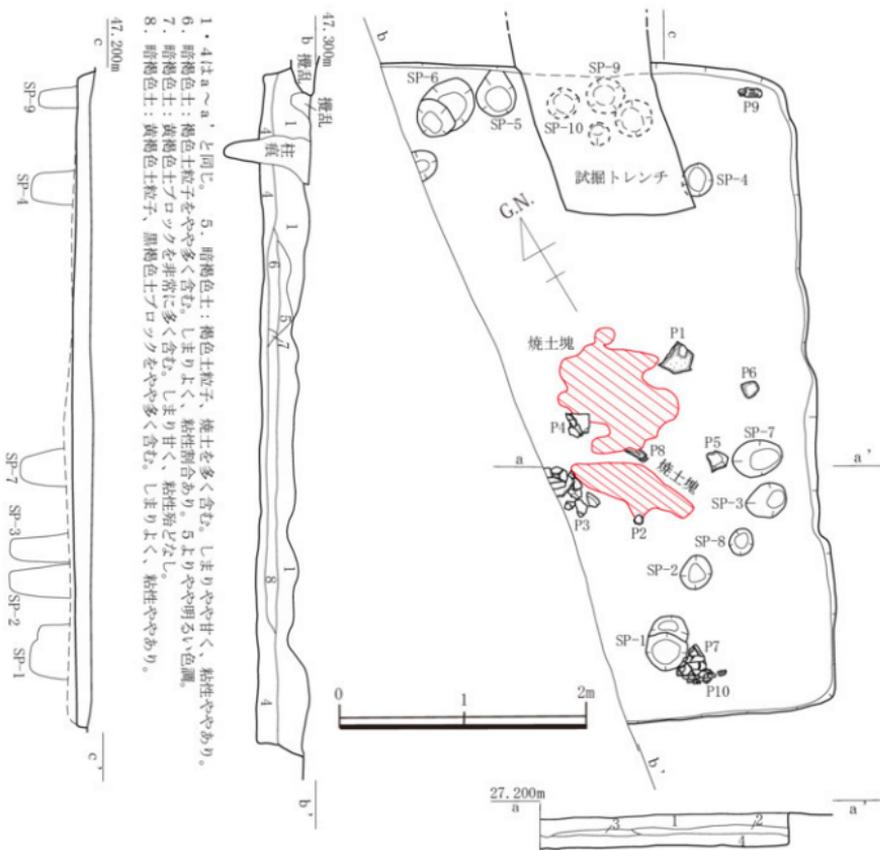
第6図 第1調査区南半・第2調査区遺構配置図(1/100)



第7図 第1調査区北半・第3調査区遺構配置図(1/100)

第2号住居址（第9図）

調査区中央西端に近い4・5グリッド境界付近に位置し、半ば程度が検出されている。出土遺物から古墳時代の住居跡で、弥生時代の住居跡である第3号住居址の南西端と第2号土坑を切っており、試掘トレンチによって北端を切られている。方形を呈するものと考えられ、唯一完全な東壁は幅約5.0m、深さ約0.45mを有する。位置的に、SP2とSP4が主柱穴を形成すると考えられ、また西壁の奥に傾



1. 4はa~a'と同じ。5. 暗褐色土：褐色土粒子、焼土を多く含む。しまりやや甘く、粘性ややあり。
 6. 暗褐色土：褐色土粒子をやや多く含む。しまりよく、粘性割合あり。5よりやや明るい色調。
 7. 暗褐色土：黄褐色土ブロックを非常に多く含む。しまり甘く、粘性殆どなし。
 8. 暗褐色土：黄褐色土粒子、黒褐色土ブロックをやや多く含む。しまりよく、粘性ややあり。

1. 暗褐色土：黄褐色土粒子をやや多く、焼土・炭化物を若干含む。しまりやや甘く、粘性余りなし。
 2. 褐色土：黄褐色土ブロック、炭化物、焼土を若干含む。しまりよく、粘性余りなし。
 3. 暗赤褐色土：焼土を非常に多く、炭化物を若干含む。しまりやや甘く、粘性ややあり。
 4. 黄褐色土：暗褐色土ブロック・粒子を非常に多く含む。しまり非常によく、粘性割合あり。貼床。

第9図 第2号住居址平・断面図（1/40）

跡が認められ、その近辺には掻き出されたと推測される焼土塊が認められた。出土遺物から古墳時代初頭前後の所産だと考えられる。

・出土土器（第10図）

1・2は前期後半前後の弥生土器の甕である。1は胴部上半～口縁部片である。形態は胴部が内湾気味に延び口縁部に続き口縁部はゆるやかに短く外反する。外面は指押さえ後ヨコナデ、その他の内面はナデ後ヘラミガキ、外面は縦ハケ目である。二次被熱のためか胴部下半が剥離している。2は胴部上半～口縁部片である。形態は胴部が内湾気味に延び口縁部に続き口縁部は逆し字状に外反する。口唇部下端に刻目凸帯が、胴部状上半4条の沈線とその下に原体の刺突を巡らす。調整は内面はナデ後ヘラミガキ、外面は縦ハケ目である。

3は弥生土器の壺の口縁部片である。口唇部外面は、沈線を巡らす。調整は内外面とも丁寧なヘラミガキで、内面には貝殻疔痕による重弧文が外面には赤色顔料を塗布した精製の土器である。時期は1・2と同様で、1～3は混入品だろう。

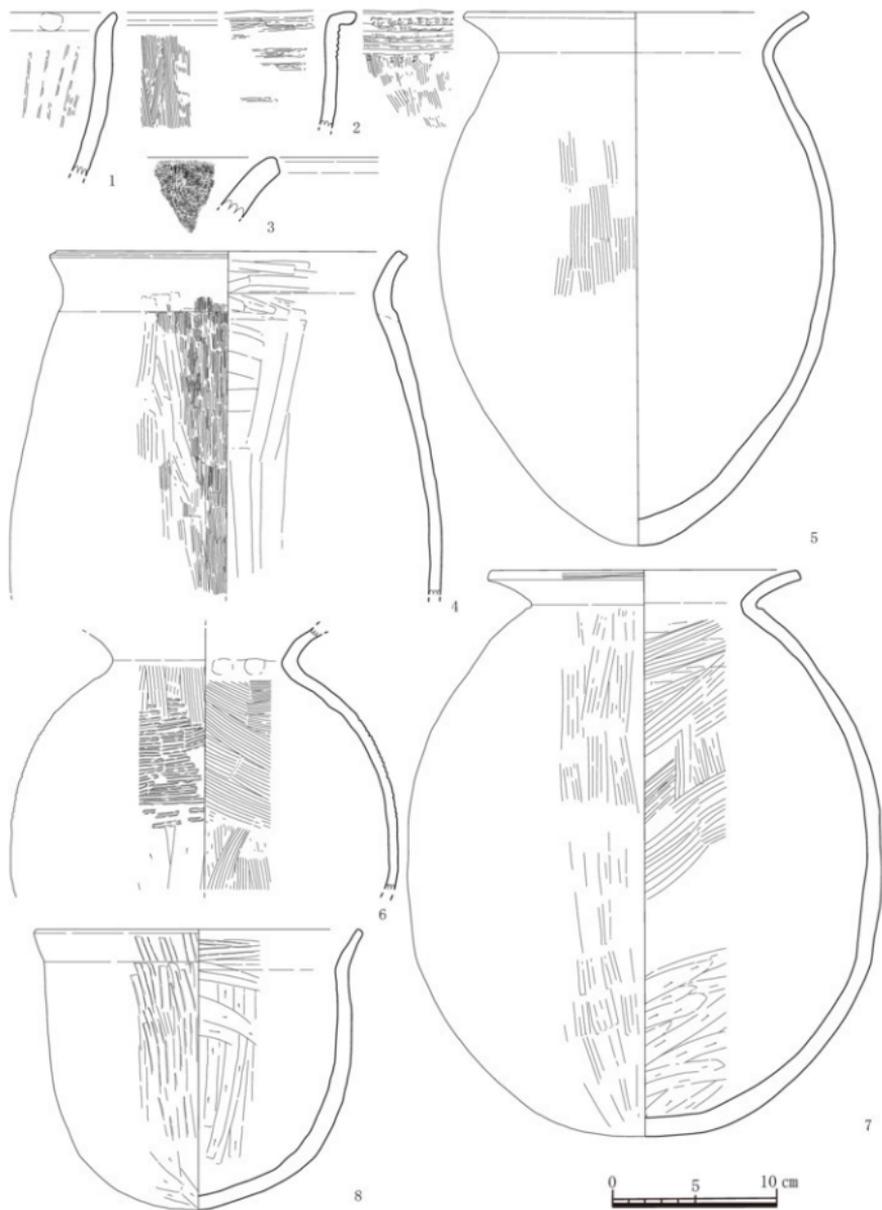
4～6は古墳時代初頭前後の土師器の甕である。4は口縁～胴部上半で、胴部下半と底部は欠損する。胴部下半～頸部にかけてはほとんど内湾せず口縁部とつづく。口縁部は、ゆるく外反し、口縁端部は方形を呈し、口唇部に部分的に沈線を施している。胴部最大径はほぼ中央にあり、形態は長胴甕である。調整は内面が胴部中央～口縁部にかけて工具によるナデ、口唇部から頸部外面はヨコナデ、胴部上半～下半までハケ目と工具によるナデが行なわれている。5は在地系で、底部が尖底ぎみの丸底である。胴部はゆるく内湾しながら口縁へと続く。口縁部は「く」の字にゆるく外反して屈曲し、端部は方形を呈す。調整は、内面・底部～頸部にかけてはナデ、口縁部は内・外面ヨコナデ、外面胴部はハケ目後ナデを施している。6は、口縁部上端と胴部下半～底部は欠損する。口縁部～胴部中央にかけて1/4が残存する。胴部は復元最大径がほぼ中央にある。やや内湾しながら口縁部に続く。口縁部はつよく外反する。調整は内面が、胴部中央から上半にかけては指押さえ後ハケ目、頸部付近は指押さえ後ナデを行なっている。口縁部内外面はヨコナデ、外面は、頸部～胴部上半は縦方向のハケ目、上半～中央付近は横方向のタタキ、中央から下半にかけては、縦方向のヘラケズリを行なっている。

7は土師器の壺のほぼ完形品である。底部はややレンズ状の丸底で胴部下半～上半にかけて大きく内湾しながら立ち上がる。口縁部は、直線的に「く」字状に外側へ開き端部は方形を呈している。調整は、外面底部～胴部上半にかけては荒いハケ目、口縁部内外面はヨコナデ、内面底部～胴部下半はヘラケズリ、中央はナデ、その上は工具ナデ後荒いハケ目を施している。時期は、底部・口縁部の形状から古墳時代初頭前後である。

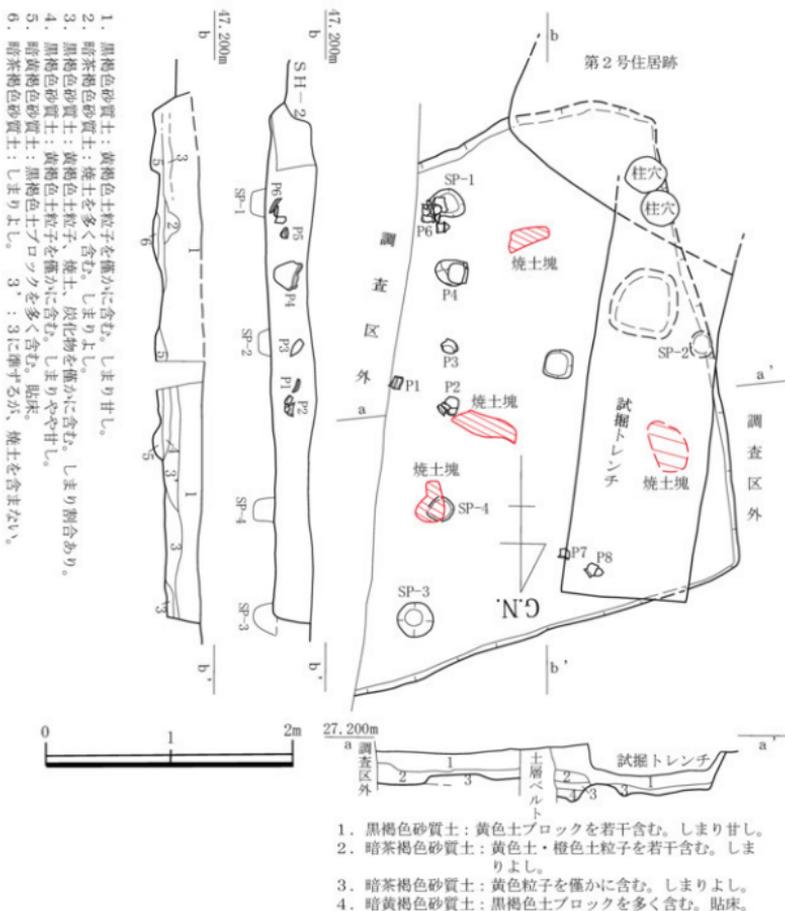
8は、やや厚手の完形鉢である。底部は丸底で胴部下半はゆるく内湾しながら上半に続く、上半はほぼ直線的にのび口縁部へと続く。口縁部はゆるく外反し端部は丸みを帯びた方形を呈する。調整は、内面が底部から胴部上半は縦方向のヘラケズリ、横方向のタタキ後ナデ調整である。外面が底部～胴部下面が不定方向ヘラケズリ、下面～口縁部は縦方向のタタキ目、口縁端部はナデである。時期は弥生時代終末～古墳時代初頭のものである。

第3号住居址（第11図）

第2住居址の北隣の5グリッドに位置し、半ば程度が検出されている。出土遺物から弥生時代の住居址で、第2号住居址・第4号土坑・試掘トレンチに切られており、第17号土坑を切っている。方形を呈すると考えられ、唯一完全な西壁は約3.8m、深さ約0.8mを測る。4本の柱穴が認められたが、いずれが主柱穴を成すか判然とせず、焼土塊が3か所見つかったが、炉跡は検出されなかった。出土



第10图 第2号住居址出土土器 (1/3)



第11図 第3号住居址平・断面図(1/40)

遺物から弥生時代中期末～後期初頭前後と考えられる。

・出土土器(第12図)

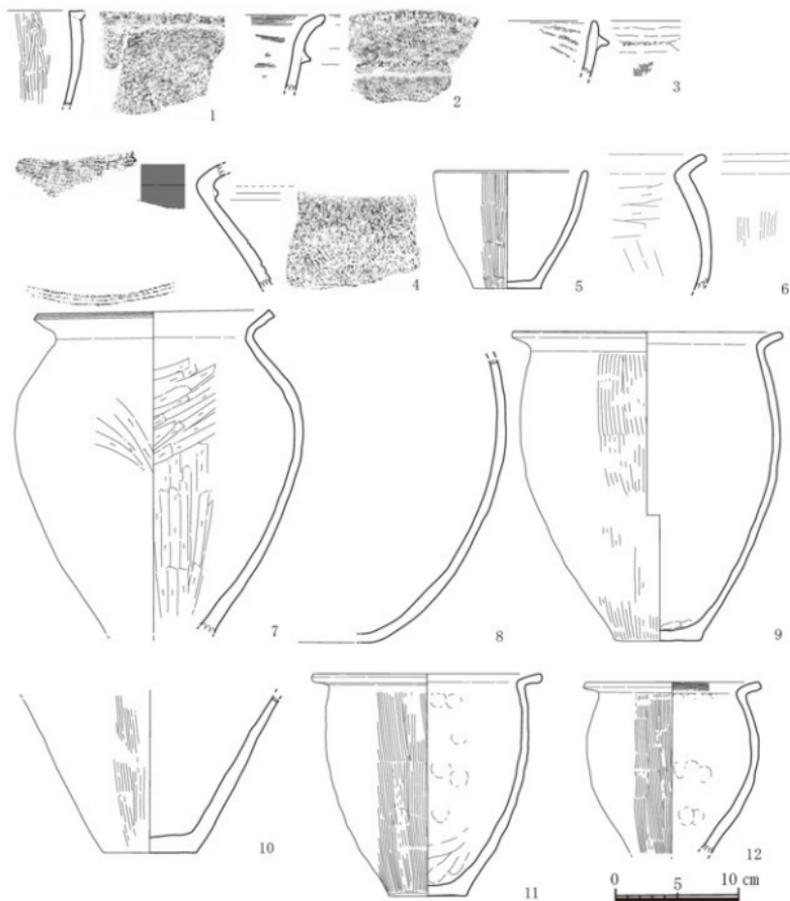
主な遺物は全て弥生土器である。1～3は前期後半前後の甕である。1は胴部上半～口縁部片で、形態は胴部が内湾気味に延び口縁部に続き口縁部は断面三角に張り出す。口唇部外面に刻目が施されている。調整は内面はナデ後ヘラミガキ、外面は縦ハケ目である。2は胴部上半～口縁部片である。形態は胴部がほぼ直線的に延び口縁部に続き口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部は丸い面をなす。胴部上面に断面三角の凸帯巡らす。外面の口縁部下端と凸帯部に刻み目を巡らす。調整は口縁部内・外面はヨコナデ、その他の内面はナデ後ヘラミガキ、外面は凸帯上面は縦ハケ目後横ナデ下面是縦方

向のハケ目である。板付Ⅱb式と下城式土器が合体したものであろうか。3は胴部上半～口縁部片である。胴部上半～口縁部にかけてはやや内湾気味で、口縁端部を丸く取める。胴部上半にやや長めの刻目凸帯を貼りつけている。調整は内面がナデ後ヘラミガキ、外面が凸帯より上がヨコナデ、下がハケ目である。時期は、別府湾岸を中心に分布するいわゆる下城式土器である。

4・6は壺である。4は頸部下半～胴部上半片である。頸部と胴部の境には断面三角の凸帯を巡らす。調整は内面口縁部がハケ目調整、胴部が丁寧なナデ調整で、内面口縁部には細かいヘラによる6条の沈線後、鋸歯文を描いている。その下面の胴部上半に幅2cm前後に赤色顔料を帯状に塗布している。外面はハケ目調整後細いヘラにより有軸羽状文を施している精製の土器である。弥生時代前期後半前後である。6は胴部上半部～口縁部にかけてで、口縁端部は丸く方形に取めている。調整は内面が胴部～口縁部下面にかけて不定ヘラケズリ後ナデ、口縁部内外面および胴部上半はヨコナデ、外面胴部下方はハケ目を施している。時期は底部が欠損しているので明瞭でないが弥生時代中期末～後期初頭であろうか。

5は、全体の1/3が残存する鉢である。底部は薄い平底で、胴部はやや内湾しながら外方口縁部へと続く。口縁部直線で端部は丸く取めている。調整は、内底部がユビ押え後ナデ、胴部から口縁部にかけてはナデ調整である。時期は弥生時代中期末～後期初頭前後である。

7～12は甕である。7は底部は欠損し全体の2/3が残っている。胴部は長胴で大きく内湾しながら口縁部へと続く。胴部最大径は、中央より上半にある。口縁部は緩やかに「く」状に外反し端部は方形を呈し、その面に2条の凹線を巡らしているのが特徴である。調整は、内面胴部下半から中央にかけては縦(上)方向のヘラケズリ、中央より頸部付近は斜め上方向のヘラケズリが施されている。頸部付近から口縁部内外面にかけてはヨコナデである。胴部上半はあまり明瞭でないがヘラケズリ後ミガキを下半は二次的な被熱をうけており、外面下部の調整は不明瞭である。時期は、吉備地方の凹線土器の影響を受けており、平行関係を考えると弥生時代中期末～後期初頭のものであろう。8は後期～終末の胴部から底部の一部である。9は2/3が残存し、底部は薄い平底で胴部下半～頸部にかけてはゆるく内湾しながら立ち上がる。口縁部は「く」の字状に屈曲し端部は面をなしている。調整は内面は指押さえ後ナデ、口縁部はヨコナデ、胴部は荒いハケを施している。二次焼成のため外面胴部は剥離し、赤変している。内外面とも環状にスガが付着している。時期は弥生時代中期末～後期初頭であろうか。10は胴部上半部～口縁部片である。形態は胴部がやや内湾し口縁部は屈曲しない。端部は方形に取める。口縁直下外面に刻目凸帯を巡らす。調整は内面指押さえ後ナデ、外面指押さえ後ハケ目を施している。時期は弥生時代前期後半前後である。11は残存率2/5で、形態は底部が薄い平底で胴部下半から口縁部にかけてはゆるく内湾しながら立ち上がる。口縁部は逆し字状に屈曲し端部は丸く取めている。調整は、内面は指押さえ後ナデ底部付近は指削りふうに調整する。口縁部がヨコナデ、外面は口唇部がヨコナデ、胴部は指押さえ後やや荒いハケを施している。内外面ともスガが付着する。時期は弥生時代中期末～後期初頭であろうか。12は底部が欠損しており、形態は胴部下半から口縁部にかけては内湾しながら立ち上がる。口縁部はやや「く」の字状になる逆し字状に屈曲する。調整は内面は指押さえ後ナデ、口縁部がハケ目、外面は口唇部から胴部上半がヨコナデ、下半が指押さえ後ナデ縦ハケを施している。内外面ともスガが付着している。時期は弥生時代中期末～後期初頭であろうか。



第12図 第3号住居址出土土器 (1/4)

・出土石器 (第13・14図)

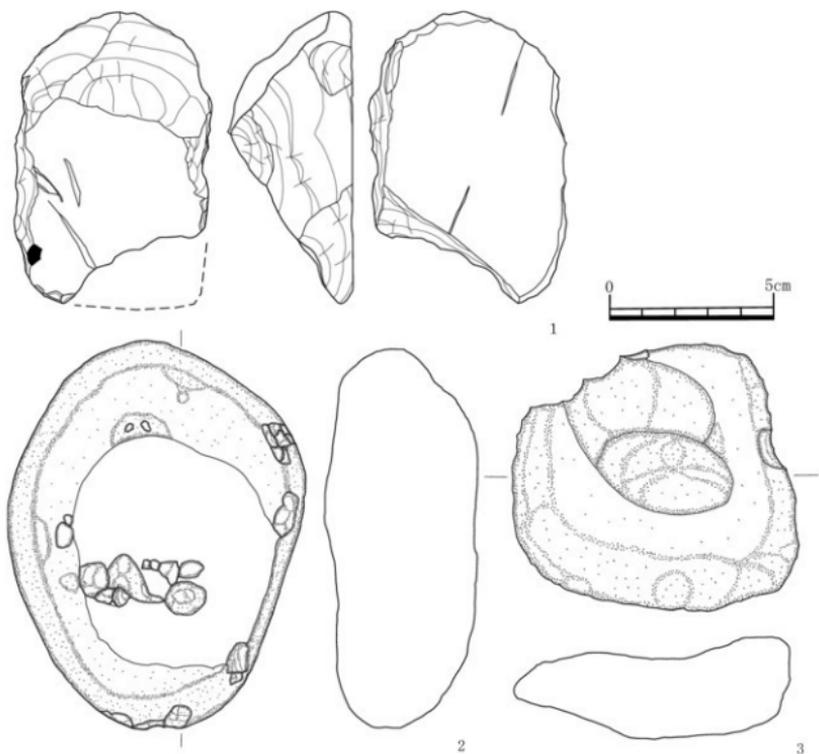
1は軽石製の砥石である。礫の側縁を打ち欠いて整形し、表・裏面を機能面としており、両面に若干の擦痕が観察される。左側面・下端を欠損している。

2・3は台石である。2は角閃石安山岩製で、平面が隅円の台形に近い円礫を用い、表面の中央部に圧擦による変色した円形に近い滑らかな面が生じ、その中心に敲打による潰れ痕が認められ、潰れ痕は周縁部にも若干見られる。3は凝灰岩製で、平面隅丸方形でやや分厚い自然礫を用い、表面中央から左上にかけ圧擦によりやや変色した浅い窪みがある。左上側縁を若干欠損している。

4・5は角閃石安山岩製の石皿である。4は、周辺部に整形のためのはつきりが認められ、表・裏面の中央部に使用による磨耗が見られる。5は、周辺部に若干の敲打痕が見られ、表・裏面に使用によ

る潰れ痕が認められる。

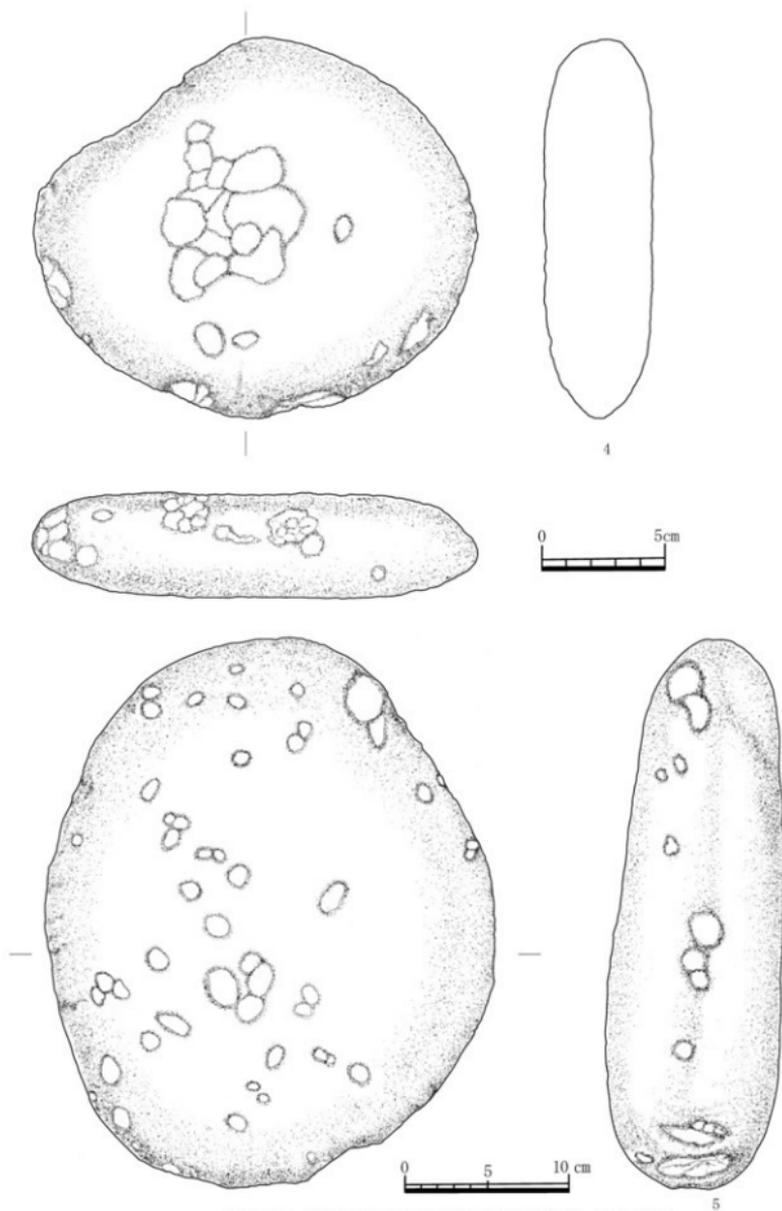
他に、石皿が1点、磨石が2点、台石が2点出土している。



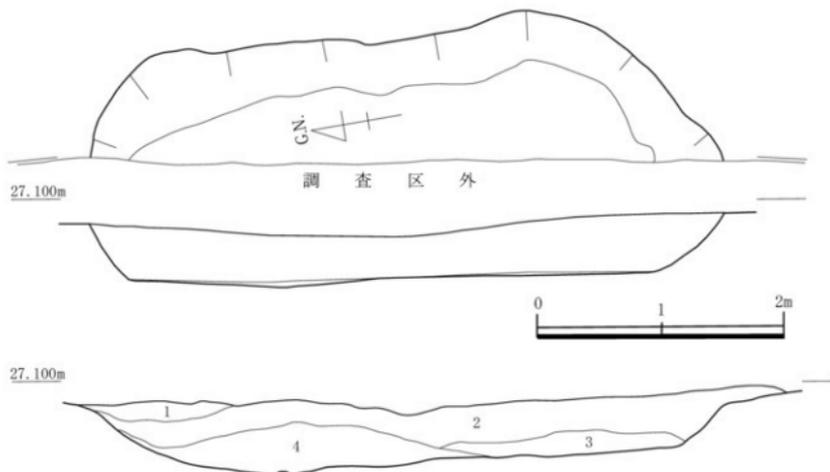
第13図 第3号住居址出土石器①(2/3)

第4号住居址 (第15図)

調査区北端に近い7グリッドに位置するが、柱穴も検出されておらず、立ち上がりの形状が他の住居跡のように垂直でなく、住居跡かどうか判然としない。深さ約0.6mを測る。第12号土坑を切っている。出土遺物から弥生時代前期だと考えられる。



第 14 図 第 3 号住居址出土石器②(4 は 1/2, 5 は 1/3)

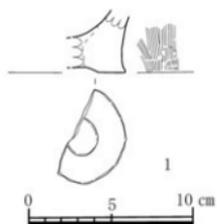


1. 黒褐色砂質土:黄色土ブロックを若干、暗茶褐色土ブロックを帯状に含む。しまりよし。
 2. 黒褐色砂質土:黄色土ブロックを僅かに含む。しまりやや甘し。 3. 黒褐色砂質土:しまりよし。

第15図 第4号住居址平・断面図 (1/40)

・出土土器 (第16図)

1は甕形土器の底部片である。若干上げ底で底部との厚みは2.5cmと厚い。この甕の特徴は底部に円盤充填をしていることである。調整は、底部外面はハケ目、底面内面はナデが認められる。時期は弥生時代前期後半前後である。



第16図 第4号住居址
出土土器 (1/3)

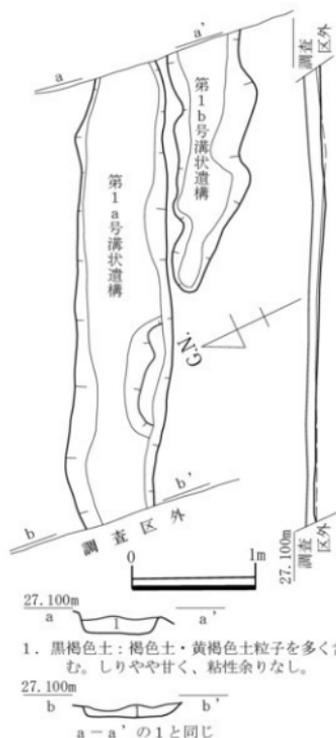
②溝状遺構

第1号溝状遺構 (第17図)

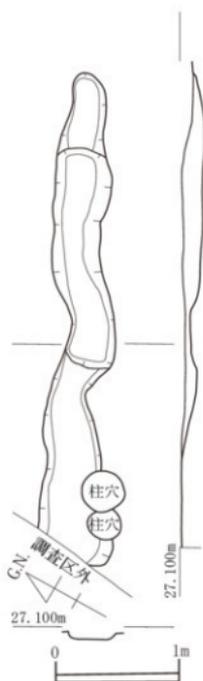
調査区中央より南よりの3グリッド中央に位置し、第1号・第1b号が平行するように西北西-東南東方向を示す。第1号は調査区内で長さ約3.65m、最大幅約8.0m、最大深約13cmを測り、第1b号は、西北西端で途切れているが、長さ約2.0m、最大幅約0.65m、最大深約6cmを測る。底面の標高差は殆ど認められず、水流方向は判然としなない。判別できる遺物が出土していないため、造成された時期は判然としなない。

第2号溝状遺構 (第18図)

調査区中央に近い6グリッドに位置し、北東-南西方向を示すが、北東方面は調査区東端付近で途切れている。調査区内で約3.9m、最大幅約0.6m、最大深約0.2mを測る。底面の標高差が約0.2mを有し、南西から北東方面の水流が推定される。本遺構も判別できる遺物が出土していないため、造成の時期は不明である。



第17図 第1号溝状遺構平・断面図 (1/40)



第18図 第2号溝状遺構平・断面図 (1/40)

第3号溝状遺構 (第19図)

調査区北端に近い7グリッド北端に位置し、西北西-東南東方向を示すが、やや弧状を呈する。調査区内で長さ約3.7m、最大幅約1.05m、深さ約0.25mを測る。底面の標高差が約12cmを測り、東南東から西南西方向の水流が推測される。本遺構も判別できる遺物が出土していないため、造成の時期は不明である。

第4号溝状遺構 (第20図)

調査区北端に近い8グリッドほぼ全域に位置し、南南西-北北東方向と、圃場整備前の自然地形の落ち込みに近い方向を示す。南南西端は調査区西端付近で途切れているが、調査区内で長さ約4.9m、最大幅約0.4m、最大深約16cmを測る。底面の標高差は殆ど認められず、水流方向は判然としなない。また、判別できる遺物が検出されていないため、造成時期は不明である。

③墓壇ないしは祭祀土坑

第3号土坑 (第21図)



1. 黒褐色砂質土：黄褐色土ブロックを若干含む。しまりやや甘い。

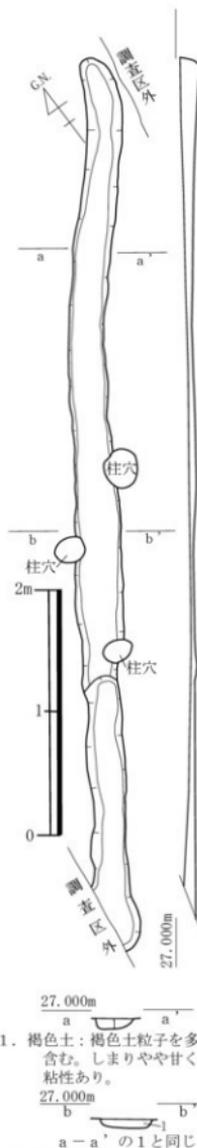


1. 暗褐色砂質土：土器を若干含む。しまりよし。

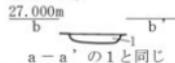
2. 黒褐色砂質土：土器を若干含む。しまりよし。

3. 暗褐色砂質土：黄褐色土ブロックを若干含む。しまりよし。

第19図 第3号溝状遺構平・断面図 (1/40)



1. 褐色土：褐色土粒子を多く含む。しまりやや甘く、粘性あり。



a-a' の1と同じ

第20図 第4号溝状遺構平・断面図 (1/40)

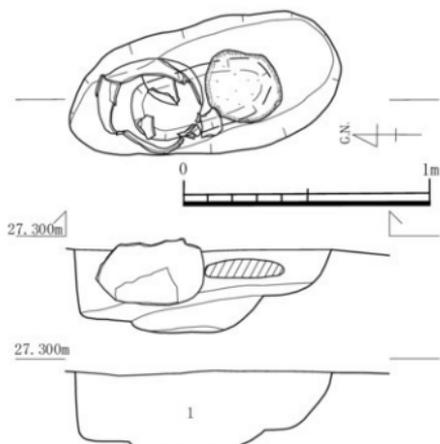
調査区中央に近い4グリッドに位置し、西端及び北端をそれぞれ、第2号住居址と第11号土坑に切られている。長軸は北北西-南南東方向を示し、長径約2.25m、短径約1.1mの楕円形を呈し、深さ約0.7mを測る。覆土は単一層で、中央上辺に、横断しに置かれ、上端が削平によって若干失われているが弥生土器の完形に近い甕が1個体と、径約0.65mの不整形の自然礫が埋納されている。中央下辺はやや深くなった空閑部を有し、墓壇であった可能性が高い。出土遺物から弥生時代中期末～後期初頭の所産と考えられる。

・出土土器 (第22図)

全体の3/4が残る壺形土器。形態は底部はやや薄い平底で胴部はやや長胴気味に丸く頸部へと続く。胴部最大径はほぼ中央にあり、頸部外面に断面三角形の凸帯を巡らし口縁部に続く。口縁部下方は直線的に立ち上がり上方は大きく開く。口唇部内面はつまみ上げており、外面は面をなす。そこに3条の凹線文を巡らしている。調整は内面は頸部～口唇部外面にかけてはナデ後横方向のミガキ、胴部は上面が横方向のヘラミガキ、下面が縦方向のヘラミガキを施す。内面は、頸部～口縁部にかけては指押しえ後ナデが行われている。下半は器壁が荒れているため調整は不明。時期は弥生時代中期末～後期初頭であろうか。

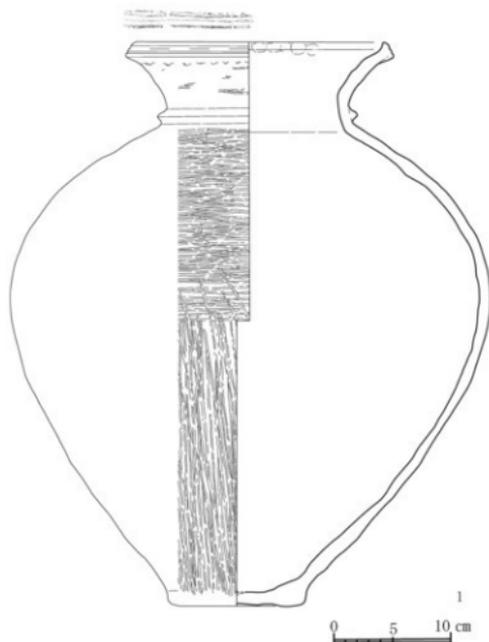
第4号土坑 (第23図)

調査区中央に近い5グリッドに位置し、第3号住居址を切っている。直径約1.55mの円形プランを呈し、上辺は削平を受けているが、現存で深さ約0.7mを測る。中央上辺に逆位の弥生土器の壺が埋納されており、胴部より下半は削平により失われて



1. 暗褐色土：褐色土粒子をやや多く含む。しまりよく、粘性割合あり。

第21図 第3号土坑平・断面図 (1/20)

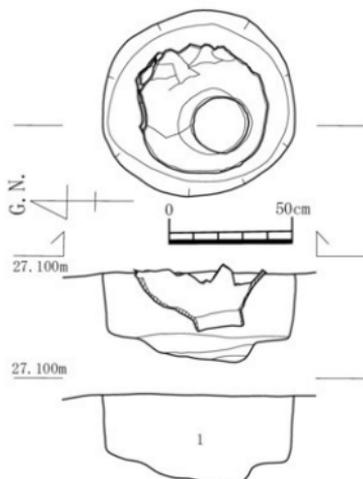


第22図 第3号土坑出土土器 (1/4)

いるが、完形に近い状態であったと推測される。出土遺物から弥生中期末～後期初頭の所産か。

・出土土器（第24図）

弥生土器の壺の胴部上半～口縁部。胴部はほぼ球形を呈し頸部へと続く。胴部と頸部との間に断面三角の凸帯が二条巡らしている。胴部はやや内湾しながら長く立ち上がり、口縁部へと続く。口縁部内側はやや鋤先状に肥厚しながら立ち上がり長い平坦面をなしている。口縁平坦部中央に円形浮文がほぼ対角状に4個付けられている。口縁端部は方形を呈している。調整は、内面胴部が指押さえ後ナデ、口縁部内外面がヨコナデ、外面が突帯以外の所が細かな縦ハケ、突帯部は、ヨコハケである。口縁部外面に黒班と火禿が見られ、胴部には接合痕も見られる。時期は、底部の形状が分からないがプロポジションは大分市大在浜遺跡第II地点出土の土器と酷似し、中期末～後期初頭の持ち込み土器の可能性が高い。



1. 黒褐色土：黄褐色土ブロックをやや多く含む。しまりよく、粘性あり。

第23図 第4号土坑平・断面図（1/20）

④貯蔵穴

第6号土坑（第25図）

調査区の北端に近い8グリッド中央東端に位置し、半ば以上が検出されたと考えられる。一辺約1.5mの方形に近い形状を呈していたと推察され、深さ約0.75mを測る。断面は長方形を示し、第8・9号土坑と異なるが、大きさや深さから貯蔵穴ではないかと推察される。出土遺物から、弥生時代前期後半前後の所産だろう。

・出土土器（第26図）

弥生土器の壺の胴部上半部分かと思われる。調整は内外面ともナデ仕上げで、外面に二枚貝による縦・横2条の区画内に鋸歯文圧痕が施文されている。時期は弥生時代前期後半前後である。



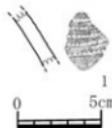
第26図 第6号土坑
出土土器（1/3）

第8号土坑（第27図）

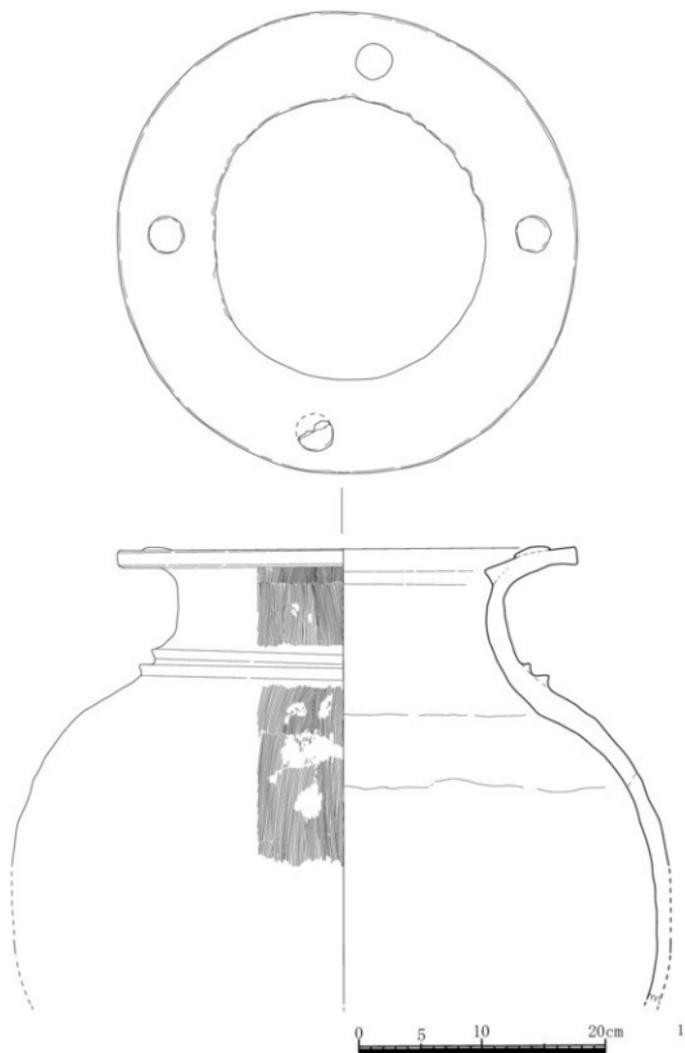
調査区中央より北よりの7グリッドに位置し、第4号住居址の底面から検出された。平面プランは、上端で径約1.2m、底面で径約1.5mのほぼ円形を呈し、断面は台形に近い形状を示す。現状で深さ約0.4mを測る。出土遺物から、弥生時代前期後半前後であろう。

・出土土器（第28図）

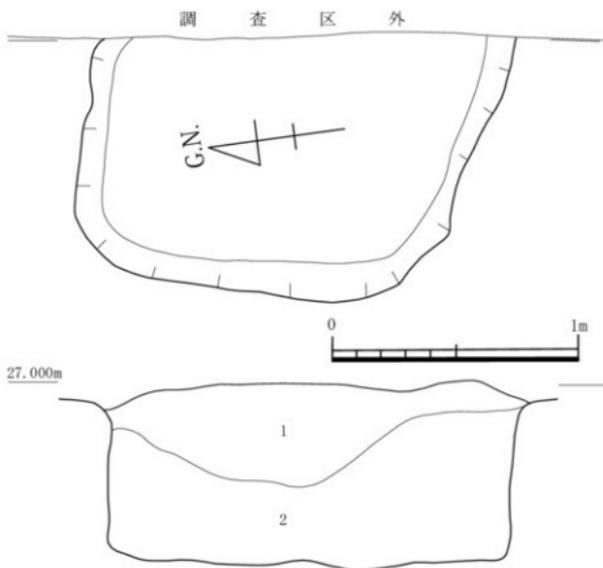
弥生土器壺の肩部片。調整は内外面ともナデ仕上げで、外面には二枚貝による5条の圧痕文様が認められる。時期は弥生時代前期後半前後である。



第28図 第8号土坑
出土土器（1/3）



第 24 图 第 4 号土坑出土土器 (1/4)

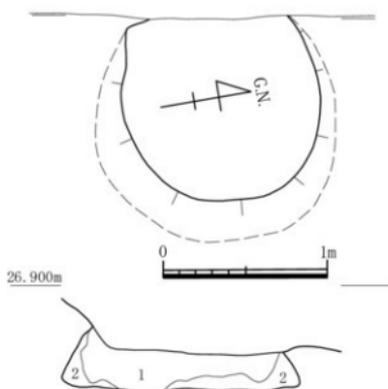


1. 黒褐色砂質土：茶褐色土粒子を僅かに含む。しまりよし。
2. 暗茶褐色砂質土：黄褐色土粒子を僅かに含む。しまりよし。

第 25 図 第 6 号土坑平・断面図 (1/20)

第 9 号土坑 (第 29 図)

調査区中央に近い 4 グリッド中央に位置し、大半を第 2 号住居址に削平されている。平面プランは不整形円形を呈し、直径は上端が約 1.5m だが、底面は約 1.7m で一回り大きくなっており、断面形は台形に近い形状を示す。深さは約 0.55m を測る。時期は第 6・8 号土坑同様に弥生時代前期後半前後か。

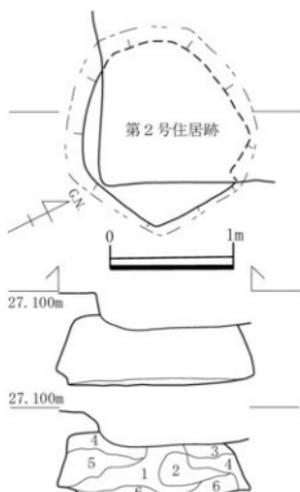


1. 黒褐色砂質土：黄褐色土粒子を僅かに含む。しまりよし。
2. 暗茶褐色砂質土：黄褐色土粒子を若干含む。しまりよし。

第 27 図 第 8 号土坑平・断面図 (1/30)

第 17 号土坑 (第 30 図)

調査区中央に近い 5 グリッド中央に位置し、第 3 号住居址の床面から検出された。上端で径約 0.6m、底面で径約 1.25m の不整形円形を呈し、深さ約 0.6m が残存する。断面は台形状を示す。時期はやはり弥生時代前期後半前後か。



1. 黒褐色砂質土：黄褐色土ブロックを多く含む。しまりよし。
2. 暗茶褐色砂質土：黄褐色土ブロックを僅かに含む。しまりよし。
3. 黄褐色砂質土：黒褐色土粒子を僅かに含む。しまりよし。
4. 暗黄褐色砂質土：黒色土ブロックを多く含む。
5. 黄褐色砂質土：黒色土粒子を若干含む。しまりよし。
6. 黒褐色砂質土：しまりよし。

第29図 第9号土坑平・断面図 (1/40)

⑤一般的な土坑

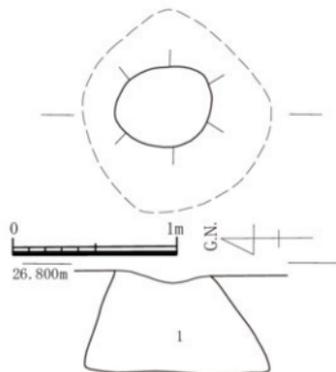
第1号土坑 (第31図)

調査区中央より南よりの3グリッド北東辺に位置し、調査区内で半ばほどが検出され、東側に延びる。長辺は判然としないが、短辺は約0.65mの長方形に近い形状を呈していたと推測され、深さ0.2mを測る。土坑中央に土器片・木炭がやや多く検出された。出土遺物から弥生時代前期後半前後の所産であろう。

・出土土器 (第32図)

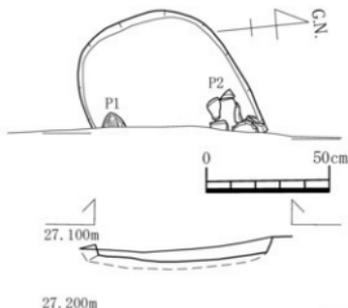
1は、広口壺の底部～口縁部にかけてである。口縁端部は欠損する。底部はやや厚めの平底で、胴部は、緩やかに膨らみ最大径は上半にある。頭部でやや屈曲するがゆるやかに口縁部へと広がる。調整は内・外面ともに非常に細かなヘラミガキ調整である。時期は弥生時代前期後半前後であろうが、このような細かなヘラミガキが残るのは本地域の特徴であろうか。

2は甕形土器片である。小片であるため口径等は不明である。形態は胴部下半から口縁部にかけて



1. 灰褐色砂：黄灰色砂をやや多く含む。しまり非常によし。

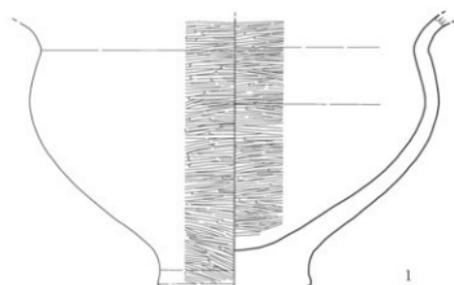
第30図 第17号土坑平・断面図 (1/30)



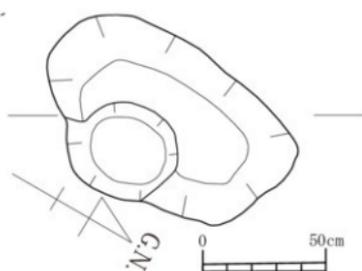
1. 黒褐色土：褐色土粒子を僅かに含む。しまりやや甘く、粘性割合あり。

第31図 第1号土坑平・断面図 (1/20)

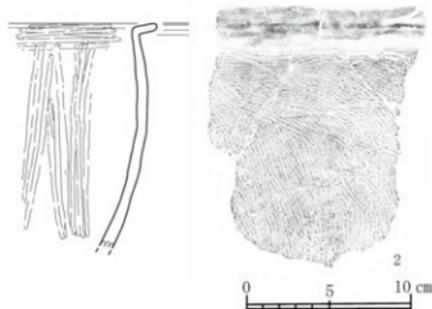
は内湾しながら立ち上がる。口縁部は逆L字状に屈曲する。調整は内面は胴部が縦方向のヘラミガキ口縁部は横方向のヘラミガキ、口唇部をヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケ目調整を行っている。時期は弥生時代中期末～後期初頭であろうか。



第32図 第1号土坑出土土器 (1/3)



27.200m



1. 黒褐色土：黄褐色土粒子、焼土を若干含む。しまりよく、粘性ややあり。
2. 黒褐色土：焼土を若干、黄褐色土粒子を非常に多く含む。しまりよく、粘性余りなし。

第33図 第2号土坑平・断面図 (1/20)

第2号土坑 (第33図)

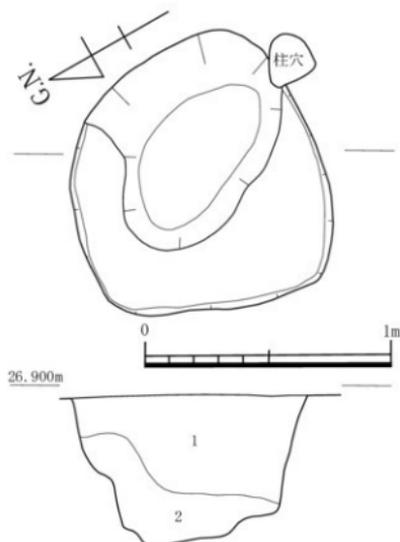
調査区中央やや南よりの4グリッド中央に位置し、長軸がほぼ南北方向を示す。中央に径約0.5mの柱穴状の円形に近いプランがあり、その周辺に長辺約1.1m×短辺約0.65mの長方形の土坑が拡がるが、土層に明確な変化が認められないため、一体の土坑か、長方形のものが柱穴に付属するものだと推察される。深さは、長方形部分が約0.55m、柱穴部分が約0.8mを測る。時期を判別できる遺物は出土していない。

第5号土坑 (第34図)

調査区北端に近い8グリッドに位置し、一辺約1.05mの方形に近い形状を呈する。深さは約0.6mを測り、中央部が若干窪んでいる。時期は判然としない。

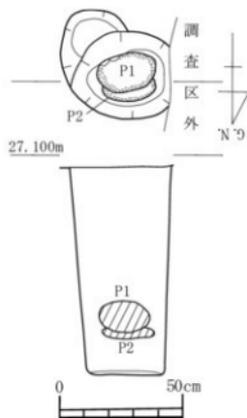
⑥柱穴

ここでは、目立つ遺物や礎石が敷いてあったものだけを採り上げる。



1. 黒褐色土：褐色土ブロックをやや多く、黄褐色土粒子を若干含む。しまりよく、粘性割合あり。
2. 黒褐色土：黄褐色土ブロックを非常に多く含む。しまりやや甘く、粘性あり。

第34図 第5号土坑平・断面図(1/20)



第35図 第76号柱穴平・断面図(1/20)

第76号柱穴(第35図)

調査区中央より北よりの6グリッド北西端に位置し、径約0.8mの円形プランに近い一般的な柱穴である。だが、底面から約0.3m上方に2枚の楕円形の自然礫が置かれていた。時期は判然としなない。

⑦第1調査区出土の他の遺物(第36・37図)

・出土土器

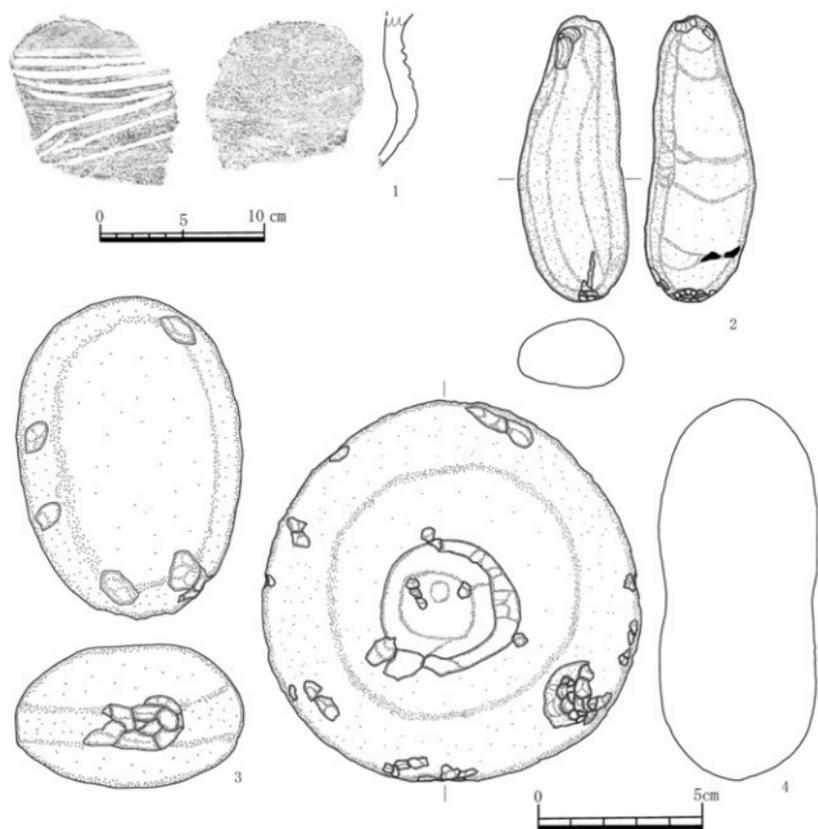
1は、縄文土器の浅鉢である。胴部は内湾し口縁部へと続く。口縁部は直立し端部は欠くがやや外反する。外面には横方向の沈線が8条巡らしている。調整は不明瞭であるが貝による条痕文が内外面とも横方向につけられている。色調は内外面とも淡茶黄を呈す。時期は、縄文時代後期前葉の鐘ヶ崎式土器である。

・出土石器

2・3は角閃石安山岩製の敲石。2は棒状の自然礫を利用し、上下端に敲打による潰れ痕が顕著に認められる。3は、下端と表面のその周辺に敲打による潰れ痕が顕著に認められる。

4は角閃石安山岩製の凹石。平面はほぼ円形の凹盤を用い、表面中央にやや灰色に変色して窪んだ痕跡と若干の敲打による潰れ痕が認められる。潰れ痕は周辺部の何か所にも見られ、また裏面の中央も変色して窪みかけている。

5は安山岩製の礫器。礫面の残る礫片を素材とし、下端に表面から裏面への加工→裏面から表面への加工によって両刃の刃部を形成し、左右側縁と上端に稜上から表面及び側縁に加工を入れて装着ないしは手持ちのための整形を施している。刃部には顕著な仕様痕が、装着部ないしは手持ち部にも若干の装着痕ないしは手擦れ痕が認められる。



第36図 第1調査区出土のその他の遺物①(2/3, 但し1は1/3)

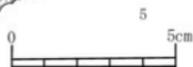
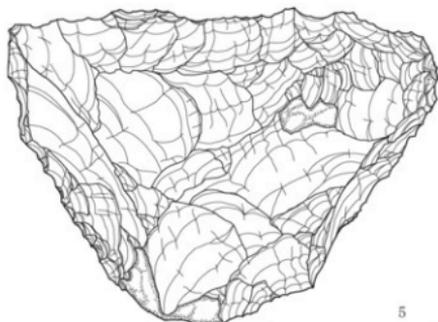
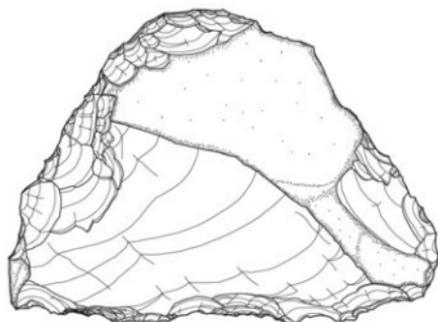
2. 第2調査区 (第6図)

本調査区は、現況の市道を挟んで第1調査区の南東部に位置し、竪穴住居址2軒、溝状遺構2条、土坑や多くの柱穴群が検出された。

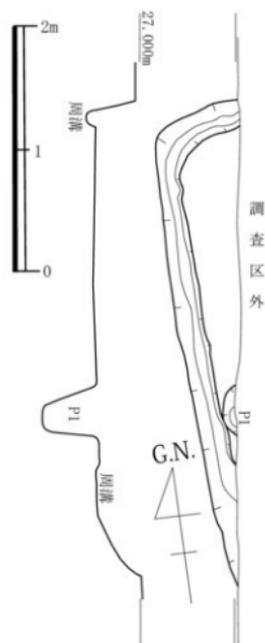
①竪穴住居跡

第5号住居址 (第38図)

調査区南端に近い11グリッド中央東端に位置し、住居跡の西壁の殆どが認められるが、他部位は調査区の東端の外側に延びてゆく。西壁の長さは約3.6m、深さは約0.35mを有する。壁の直下に、幅約0.25m、深さ約8cmの壁溝が認められる。P1は支柱穴の1本だと考えられ、径約0.4m、深さ約0.45mを測る。時期が判別できる遺物は出土していないが、石皿が2点出土している。



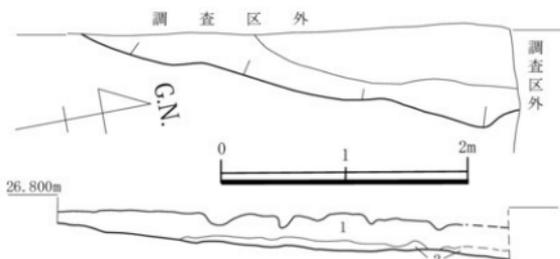
第37図 第1調査区出土のその他の遺物②(2/3)



第38図 第5号住居址平・断面図 (1/40)

第6号住居址 (第39図)

調査区北西端の13グリッドに位置し、第12号土坑を切っている。形状から住居跡だと考えられるが、ごく端の部分のみで柱穴も認められず、実際には住居跡かどうか判然としない。全体形状も判らず、深さは約0.25mを測る。出土遺物からは6世紀代の所産か。



1. 黒褐色砂質土:黄褐色ブロックをやや多く含む。しまりよし。
2. 暗茶褐色砂質土:黄褐色ブロックを多く含む。しまりよし。

第39図 第6号住居址平・断面図 (1/40)

・出土土器 (第40図)

須恵器坏蓋の頂部片。緩く内側へ湾曲する。調整は内面が回転ココナデ、外面は回転ヘラケズリである。時期は、頂部まで回転ヘケズリを行っているので6世紀第2～3四半期のものであろう。

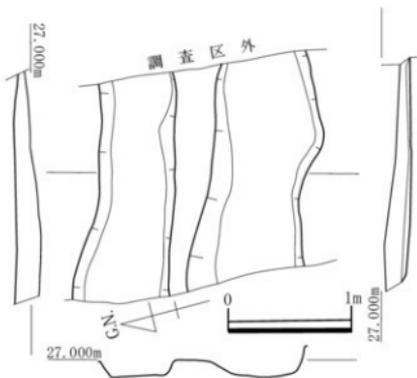


第40図 第6号住居址
出土土器 (1/3)

②溝状遺構

第5・6号溝状遺構 (第41図)

調査区南端に近い11グリッド北端に近いに位置し、両遺構が平行するように、西北西-東南東方向を示す。調査区内で、両遺構とも長さ約1.8m、最大幅は第5号が0.75m、第6号が約9.5mを、最大深は両者とも約0.2mを測る。底面の標高は両遺構とも調査区内では殆ど差がなく、水流の方向は判然としない。第1調査区で検出された第1号溝状遺構と同一の遺構である可能性が高い。所属時期は不明である。



第41図 第5・6号溝状遺構平・断面図 (1/40)

③一般的な土坑

第12号土坑 (第42図)

調査区北端付近の13グリッド西端に位置し、第6号住居址の床面下にほぼ近くが検出され、径約0.9m以上の円形プランを呈していたと考えられる。深さ約0.1mが残存する。



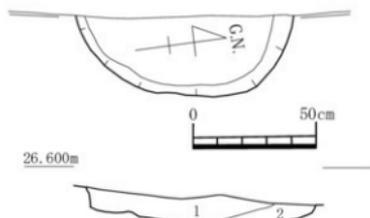
第43図 第2調査区出土の他の遺物 (1/3)

④第2調査区出土の他の遺物

・出土土器 (第43図)

縄文土器の浅鉢の口縁部付近片である。胴部

へ口縁部にかけてはほぼ直線的に立ち上がる。内面縁直下に浅い沈線を施す。外面は横方向沈線を3条巡らし、それを切って縦方向に4条の沈線を引いている。調整は内外面とも状痕を施している。時期は縄文時代後期前葉の鐘ヶ崎式期である。



1. 暗茶褐色砂質土：しまりよし。
2. 黒褐色粘質土：しまりよし。

第42図 第12号土坑平・断面図 (1/20)

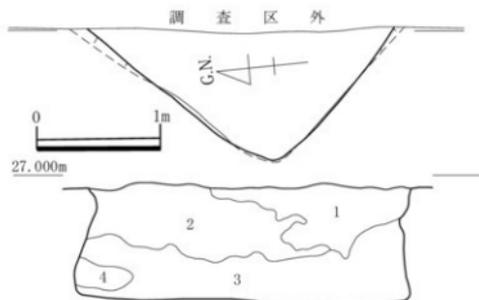
3. 第3調査区 (第7図)

本調査区は、現況の市道を挟み第1調査区の北東部、第2調査区の北側に位置し、貯蔵穴に代表される土坑や柱穴群が検出されている。

①貯蔵穴

第15号土坑 (第44図)

調査区中央より北よりの16グリッド西端に位置し、半ばは検出されていない。方形に近い形状を呈していたと推測され、深さ約0.95mを測り、断面は台形状を示す。時期判別の可能な遺物は出土していないが、第1調査区第6・8号土坑と同様に弥生時代前期後半前後か。



1. 茶褐色砂質土：黄白色土ブロックを多く含む。しまりよし。
2. 暗茶褐色砂質土：黄白色土ブロックを若干含む。しまりよし。
3. 茶褐色砂質土：黄白色土・黒色土ブロックを多く含む。しまりよし。
4. 黒褐色砂質土：しまりよし。

第44図 第15号土坑平・断面図 (1/40)

第18号土坑 (第45図)

調査区北辺に近い17グリッド中央に位置する。上端は一辺約0.95m、底面は一辺約1.25mを有する正方形に近い平面プランを呈するため、断面形は台形に近い形状を示し、深さ約0.85mを測る。時期判別の可能な遺物は出土していないが、やはり弥生時代前期後半前後の所産か。

②第3調査区出土の他の遺物 (第46図)

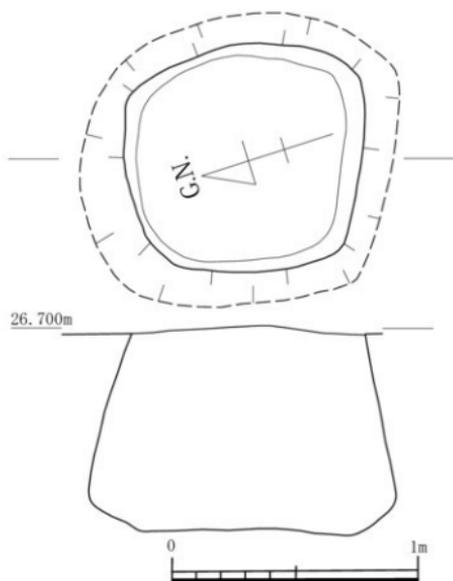
・出土土器

1・2は弥生土器の前期後半前後の甕である。1は甕胴部上半部へ口縁部片。形態は胴部がやや内湾し口縁部は屈曲せずやや外反し、端部は方形に収める。外面口縁下部に凸帯を巡らす。調整は内面縦・

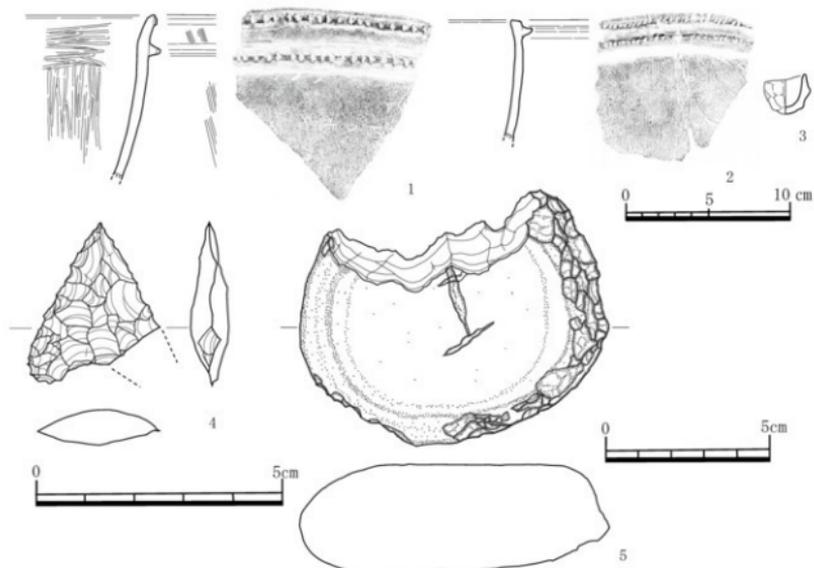
横方向のヘラミガキ、外面ハケ目後一部ナデ消している。口唇部と凸帯部に刻み目を巡らす。2は甕胴部上半部～口縁部片である。胴部がやや内湾し口縁部は屈曲しない。端部は方形に収める。外面口縁直下部に凸帯を巡らす。調整は内面ナデ、外面ハケ目を施している。口唇部と凸帯部に刻み目を巡らしている。3はミニチュア土器である。底部は丸くほぼ垂直に口縁部へ立ち上がる手捏ね土器で、調整は内外面とも指オサエ後ナデである。時期は古墳時代初頭の土師器。

・出土石器

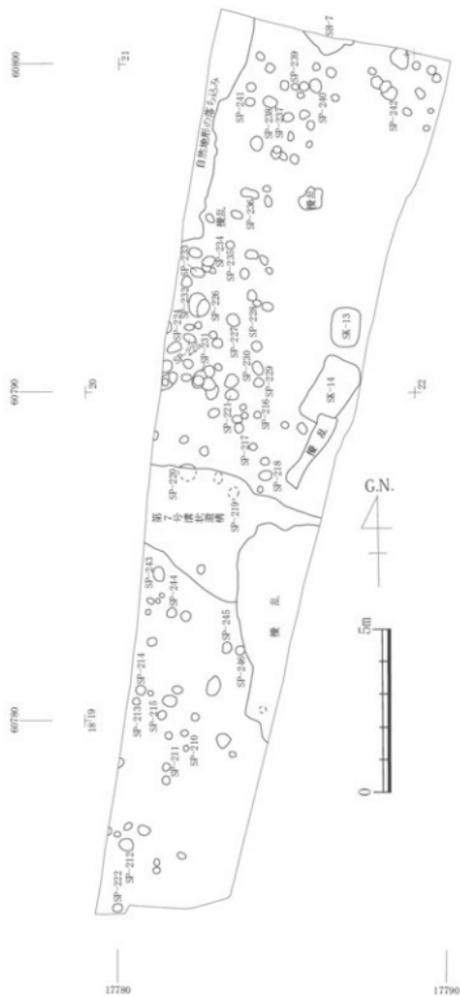
4は姫島産黒曜石製の石鎌。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及ぶが、裏面の尖端付近には素材の面が若干残る。正三角形に近い形状に仕上げられており、基部には浅い抉りが入る。右脚部を欠損している。5は砂岩製の磨石。平坦で楕円形を呈する礫を素材とし、周縁部に潰れ痕が顕著に認



第45図 第18号土坑平・断面図(1/20)



第46図 第3調査区出土の他の遺物(1/3, 但し4は1/1, 5は2/3)



第 47 图 第4調査区遺構配置図 (1/150)

められ、表面には線条痕が若干見られる。恐らく使用後に被熱しており、上端付近を欠損している。

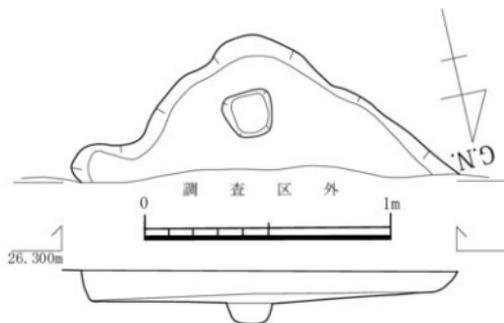
4. 第4調査区 (第47図)

第3調査区の北隣に位置し、現況市道の東側に位置する。1軒の竪穴住居址、1条の溝状遺構、数基の土坑、多数の柱痕が検出されている。

①竪穴住居址

第7号住居址 (第48図)

調査区北端の21グリッド北端に位置し、コーナー部分が検出されただけである。深さ約13cmを測り、深さ約8cmの柱穴を1本有する。時期が判然とする遺物は出土していない。

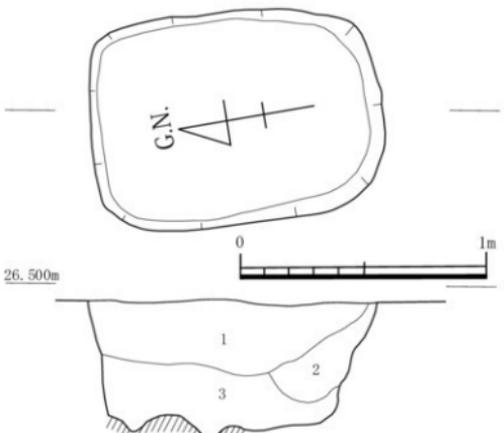


第48図 第7号住居址平・断面図 (1/20)

②墓壇ないしは祭祀遺構

第13号土坑 (第49図)

調査区中央やや北東よりの20グリッド東端に位置する。長辺約1.2m、短辺約0.85mの長方形プランを呈し、深さ約0.6mを測る。時期が判別できる遺物は出土していない。



1. 黒褐色土：黄褐色土粒子を若干含む。しまりよく、粘性余りなし。
2. 暗黄褐色土：黒褐色土・暗黄褐色土粒子を多く含む。しまりよく粘性余りなし。
3. 暗褐色土：暗黄褐色土粒子を多く含む。しまりよく、粘性割合あり。

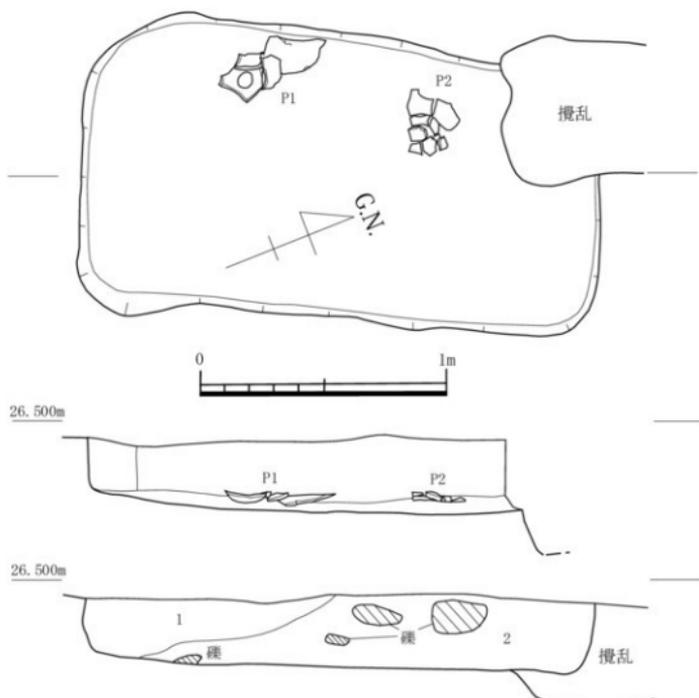
第49図 第13号土坑平・断面図 (1/20)

第14号土坑 (第50図)

調査区中央の東端に近い19・20グリッド境界部に位置し、南東隅を現在の攪乱によって破壊されている。長辺約2.1m、短辺約1.2mの長方形プランを呈し、深さ約0.3mを測る。2か所に亘って土器片群が埋能されており、形状から墓壇と考えられる。

・出土土器 (第51図)

弥生土器の甕で、全体の1/2が残存。形態は底部は平底で胴部は内湾気味に延び、口縁部に続き口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸く取めている。胴部外面上半部に沈線を1条巡らす。調整は内面は口縁部がナデ後ハケ目その他はナデ仕上げ、外面は口縁部上半がナデ、下半から沈線までがヘラミガキ、胴部はハケ目後ナデ、底部は指押さえ後ハケ目後ナデである。二次被熱を受けており器面は荒れている。内面に一部スカが付着する。時期は板付IIb式の新段階で弥生時代前期後半前後である。



26.500m

26.500m

1. 暗褐色土：黄褐色土ブロックをやや多く含む。しまりよく、粘性ややあり。
2. 黒褐色土：大・中礫をやや多く、黄褐色土ブロックを若干含む。しまりよく、粘性余りなし。

第50図 第14号土坑平・断面図 (1/20)

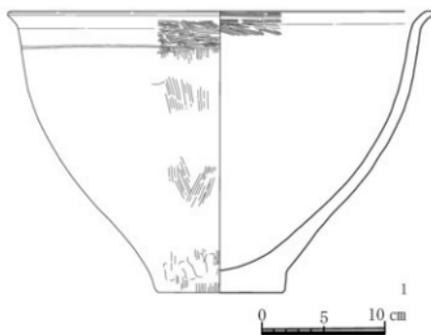
③溝状遺構

第7号溝状遺構 (第52図)

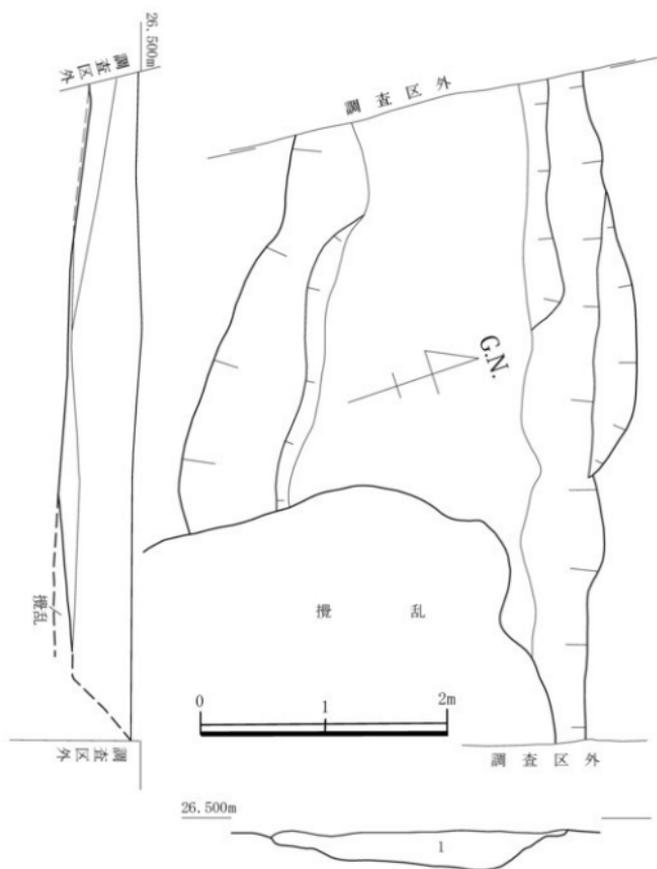
調査区中央に近い19グリッド中央に位置し、西北西-東南東方向を呈する。東端部分を現在の重機によって攪乱されているが、調査区内で長さ約5.3m、最大幅約3.5m、最大深0.6mを測る。底面の標高差が約27cm認められ、西北西から東北東方向への水流が推測される。

・出土土器 (第53図)

1は土師質の鍋で、胴部上半～口縁部。胴部は、斜上方に上がり、口縁端部は丸く収めやや外反させる。調整は、内面胴部がナデ、口縁部内外面がヨコナデ、外面胴部上半がナ



第51図 第14号土坑出土土器 (1/4)



1. 暗褐色土：黄褐色土粒子をやや多く含む。しまりよく、粘性割合あり。

第52図 第7号溝状遺構平・断面図(1/40)

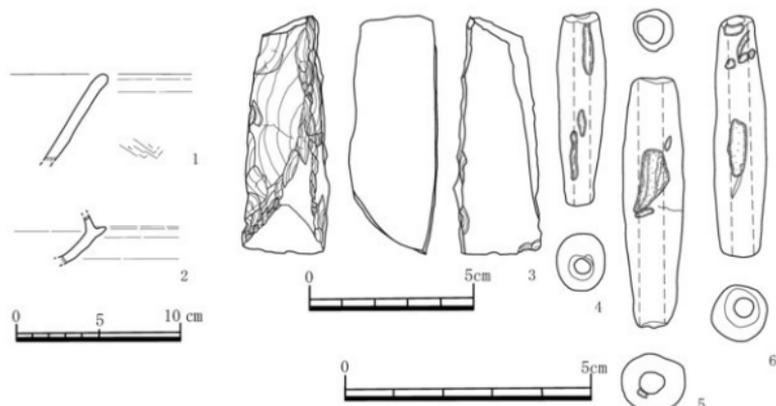
デ、下半にケズリが、口縁直下にタタキ痕が認められる。時期は、14～15世紀のものであろうか。2は6世紀代の須恵器坏身の坏部である。

・出土石器(第53図)

3は安山岩製の磨製石斧。分割礫を素材にしていると考えられる。左右側縁の欠損後、表面の稜上から調整を施して両側縁の整形をし直しており、基部の欠損によってか加工を放棄している。

・出土土錘(第53図)

4は、表面に紐の痕跡跡の浅い窪みが認められる。上端は欠損している。5は、表面に若干の擦痕や剥落が認められる。孔は上端が太く、下端近くで最も細くなるが、下端で拡がり、上端と同じ口径となる。6は、表面の上端から中程にかけて紐擦れの痕が認められる。下端の孔の部分には焼成前の



第53図 第7号溝状遺構出土遺物 (1/3, 但し3は2/3, 4~6は1/1)

研磨が見られる。

④第4調査区出土の他の遺物 (第54図)

・出土土器

土師質の小皿で、残存部は口縁部～底部の一部である。底部は薄い平底で坏部に続く。坏部は短く斜め上方に上がり、端部は丸く取める。調整は内面・外面坏部回転ヨコナデ、底部外面が回転糸口離である。時期は、小皿片単独では決められないが、12世紀後半～13世紀前半のものであろう。

・出土石器

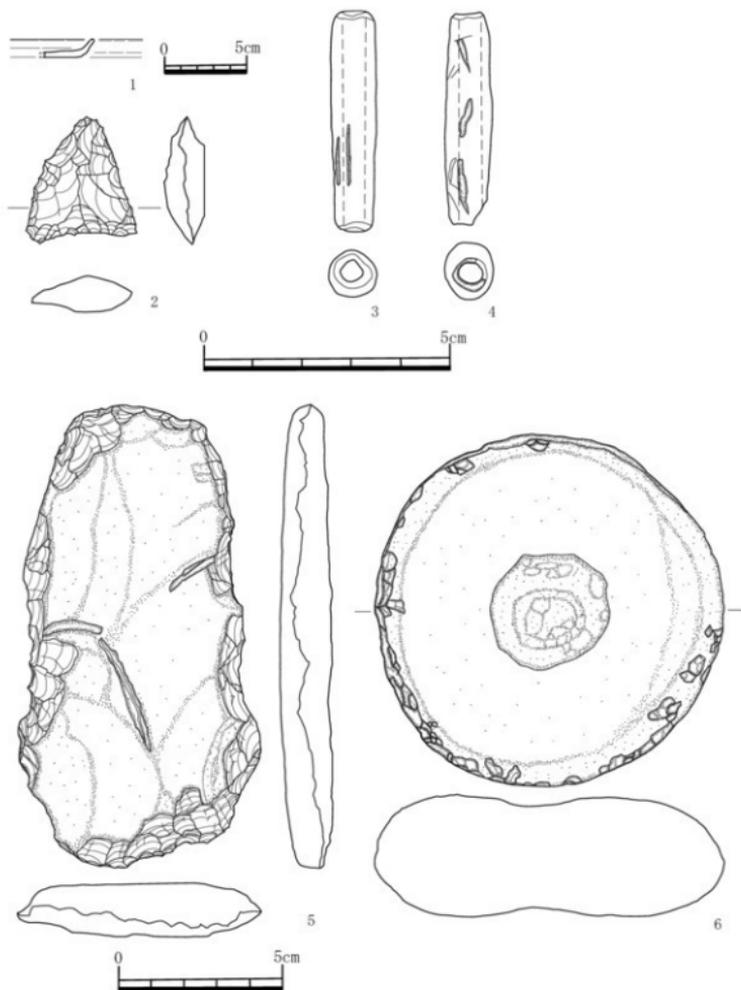
2は姫島産黒曜石製の石鏃未成品。幅広剥片を素材とし、表・裏面ともに周縁部を中心に加工を施して正三角形に近い形状に仕上げようとし、基部には浅い抉りが入れているが、形状は今ひとつで、厚みの除去も不十分で、先端には僅かな欠損が認められる。

5は角閃石安山岩製の扁平打製石斧。表面が全面礫面の薄平な剥片を素材とし、裏面の主要剥離面に大段で平坦な加工を入れて厚みを取り、表・裏面の周縁部に細かく急斜度な調整を施して、整形・刃部形成をしている。刃部の裏面は若干摩滅しており、表・裏面の中央部には若干の明確な擦痕が認められる。

6は砂岩製の凹石。平面が円形に近い自然礫を素材とし、表・裏面の中央部に敲打による浅い窪みが認められる。また、周縁のほぼ全縁に敲打と圧擦による潰れが顕著に生じており、磨石としても使用したと考えられる。

・出土土錘

3は、上下端から中央部まで直径が殆ど変わらず、円柱形に近い形状を呈す。下半に紐の圧痕と考えられる浅い窪みが2本平行して認められる。4は、上端近くから下端近くまで紐の圧痕と考えられる、浅い窪みが断続状に認められる。また、擦痕も多く見られる。上下端は若干欠損している。



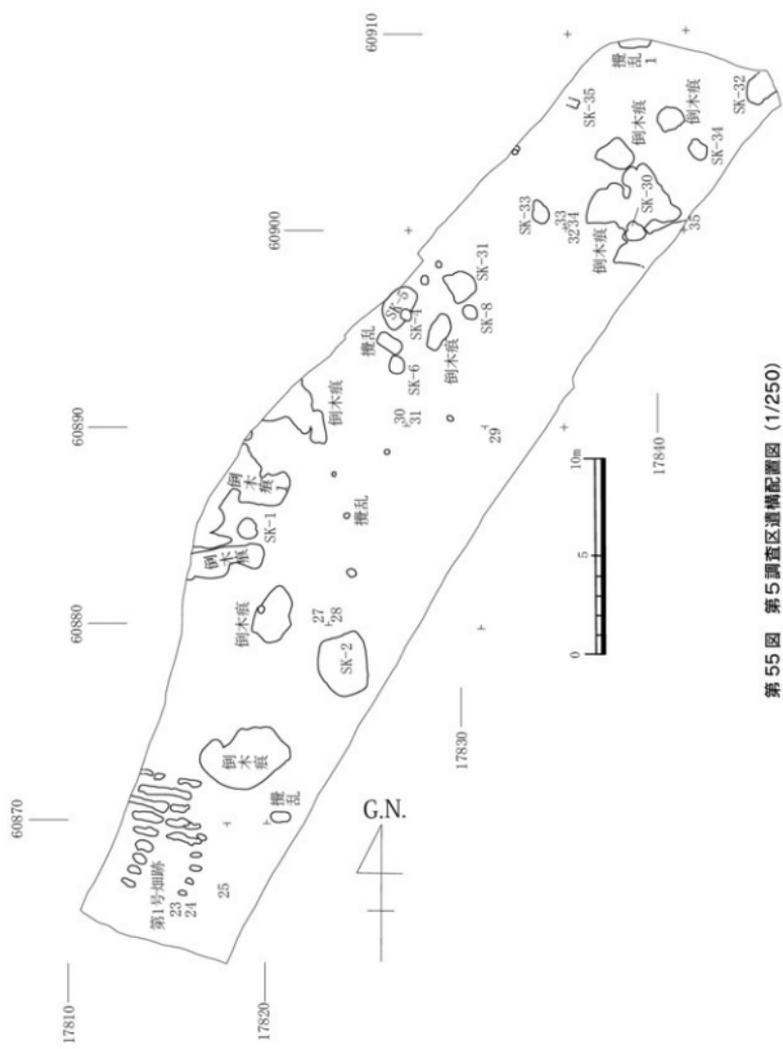
第54図 第4調査区出土の他の遺物 (2/3, 但し 1は 1/3, 2は 1/1)

5. 第5調査区 (第55図)

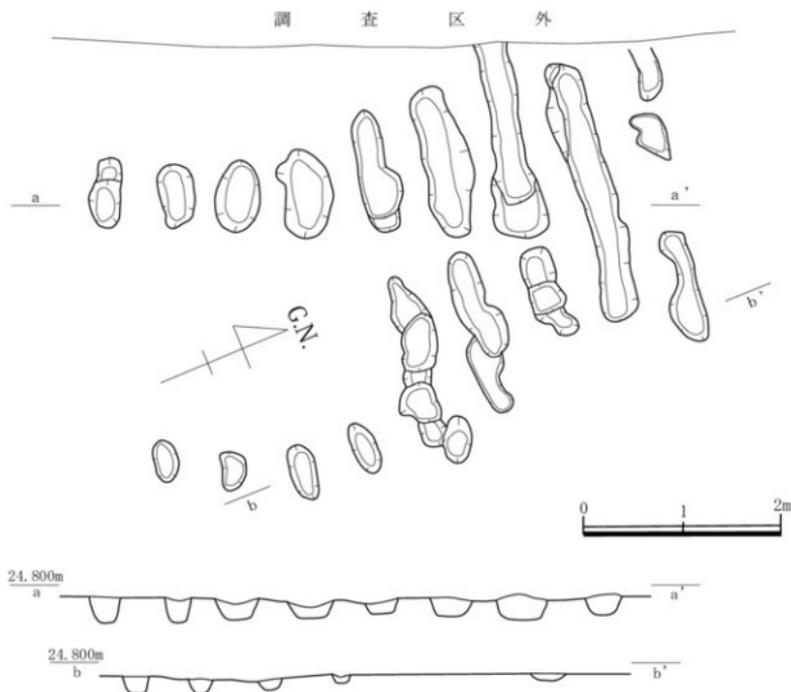
第4調査区からやや隔たった北側に位置し、畑跡が1か所、土坑群・倒木痕群・柱穴群が検出されている。

①畑跡

第1号畑跡 (第56図)



第55图 第5調査区遺構配置図 (1/250)



第 56 図 第 1 号畑跡平・断面図 (1/50)

調査区南西端に近い 23・25 グリッド境界部に位置する。深さ 10～0cm ほどの楕円形あるいは溝状の掘り込みが列状に連なる性格不明の遺構群だが、出土遺物と形状からして、弥生時代前期後半前後の畑の痕ではないかと推察される。

・出土土器 (第 57 図)

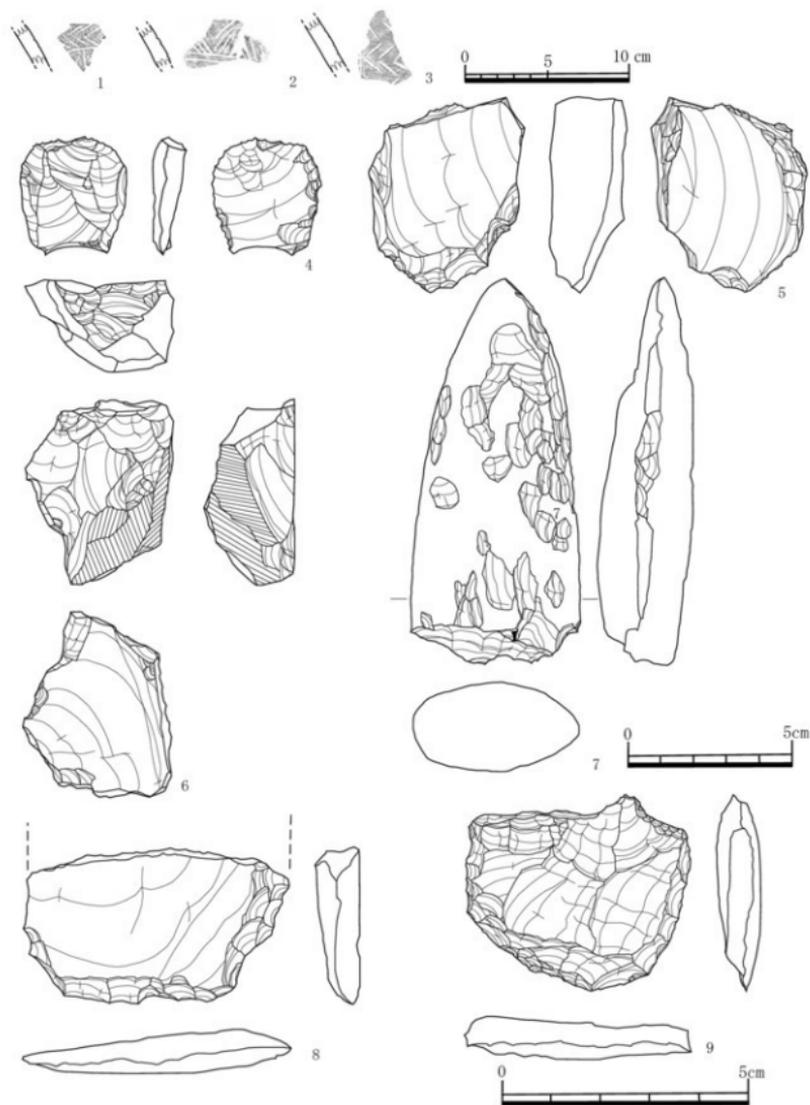
1～3 は弥生時代前期後半前後の弥生土器の壺の胴部片である。1 は調整は内外面ともミガキ仕上げで、外面にはヘラによる区画文と無軸羽状文様が描かれている。2 は胴部上半部。調整は内外面ともナデ仕上げで、外面に二枚貝による横方向に区画横線上に鋸歯文圧痕が施文されている。3 は、調整は内外面ともナデ仕上げで、外面には貝殻圧痕文による無軸羽状文様が描かれている。

・出土石器 (第 57 図)

4 は腰岳系黒曜石製の削器。幅広剥片を素材とし、裏面の右側縁に加工を施して刃部を形成している。刃部には使用痕が認められ、下端は裏面から表面への折れによって欠損している。

5 は姫島産黒曜石製の搔器。分厚い幅広剥片を素材とし、下端に裏面から急斜度な加工を施して刃部を形成している。刃部に若干の使用痕が認められ、下端左端を欠損している。

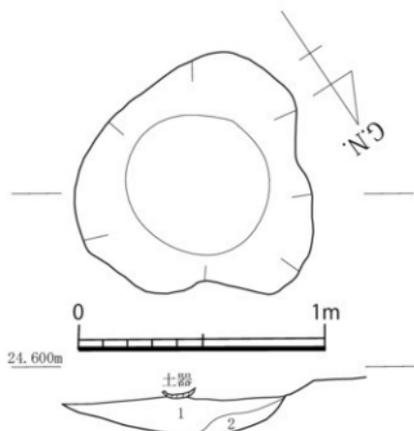
6 は姫島産黒曜石製の石核。右側面を打面、正面中央部を作業面として剥離→上端面を打面、正面上半を最終作業面として剥離している。



第57図 第1号畑跡出土遺物 (1/3, 但し4・5・8・9は1/1, 6・7は2/3)

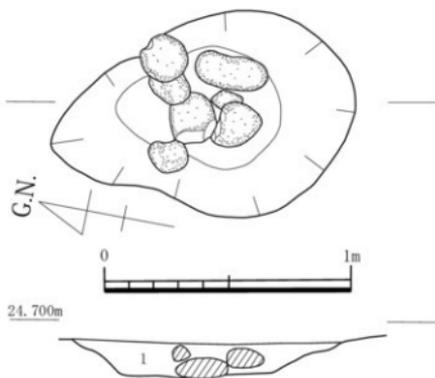
7は蛇紋岩製の磨製石斧。礫ないしは礫片を素材にしていると考えられ、表・裏面の全面に研磨調整がされており、基部は尖端を形成している。表・裏面ともに磨き残しが多く認められ、刃部は裏面から表面への折れによって欠損している。

8・9は緑泥片岩製の扁平打製石斧。8は薄平な剥片を素材とし、裏面では大柄で平坦な加工を施して厚みを取った後、表・裏面の周縁部に急斜度で細かな調整を入れて整形し、片刃の刃部形成を行っている。刃部に若干の使用痕が認められ、刃部付近以外の基部側は表面から裏面への折れによって欠損している。9は薄平な剥片を素材とし、表・裏面に大柄で平坦な加工を入れて厚みを取り、周縁部に表・裏面から小柄で急斜度な調整を施して、整形・刃部形成をしている。刃部には使用痕が顕著に認められ、基部側は半ば維持用を裏面からの折れによって欠損している。



1. 暗褐色土：橙色バミス、黄褐色土ブロックを若干含む。しまりよく、粘性余りなし。
2. 褐色土：橙色バミスをやや多く含む。しまりよく、粘性余りなし。

第58図 第30号土坑平・断面図(1/20)



1. 暗褐色土：橙色バミス、黄褐色土ブロックを若干含む。しまりよく、粘性殆どなし。

第59図 第33号土坑平・断面図(1/20)

②一般的な土坑

第30号土坑(第58図)

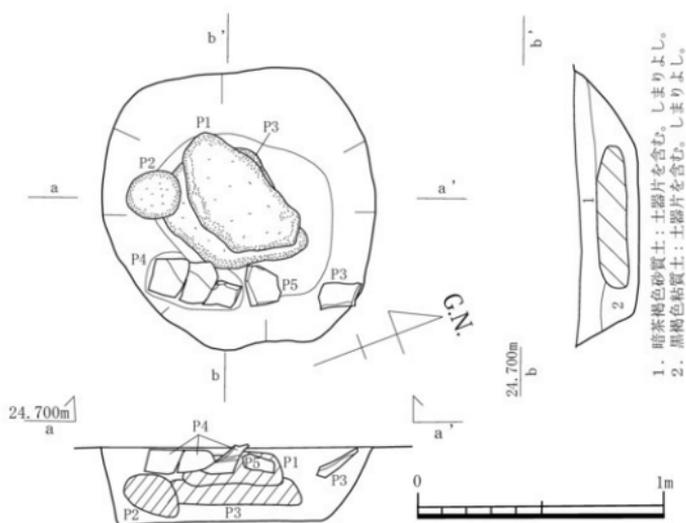
調査区北端に近い32・34グリッド境界部に位置し、倒木痕を切っている。径約1.05mの円形に近い平面プランを呈し、深さ約15cmを測る。時期を判別できる遺物は出土していない。

第33号土坑(第59図)

調査区北端に近い33グリッド南東端に位置する集石土坑である。長径約1.25m、短径約0.85mの楕円形に近い平面プランを呈し、深さ約15cmを測る。遺構中央部に自然礫や打ち欠いた礫7個が埋納されている。時期を判別できる遺物は出土していない。

③墓壇ないしは祭祀遺構

第4号土坑(第60図)

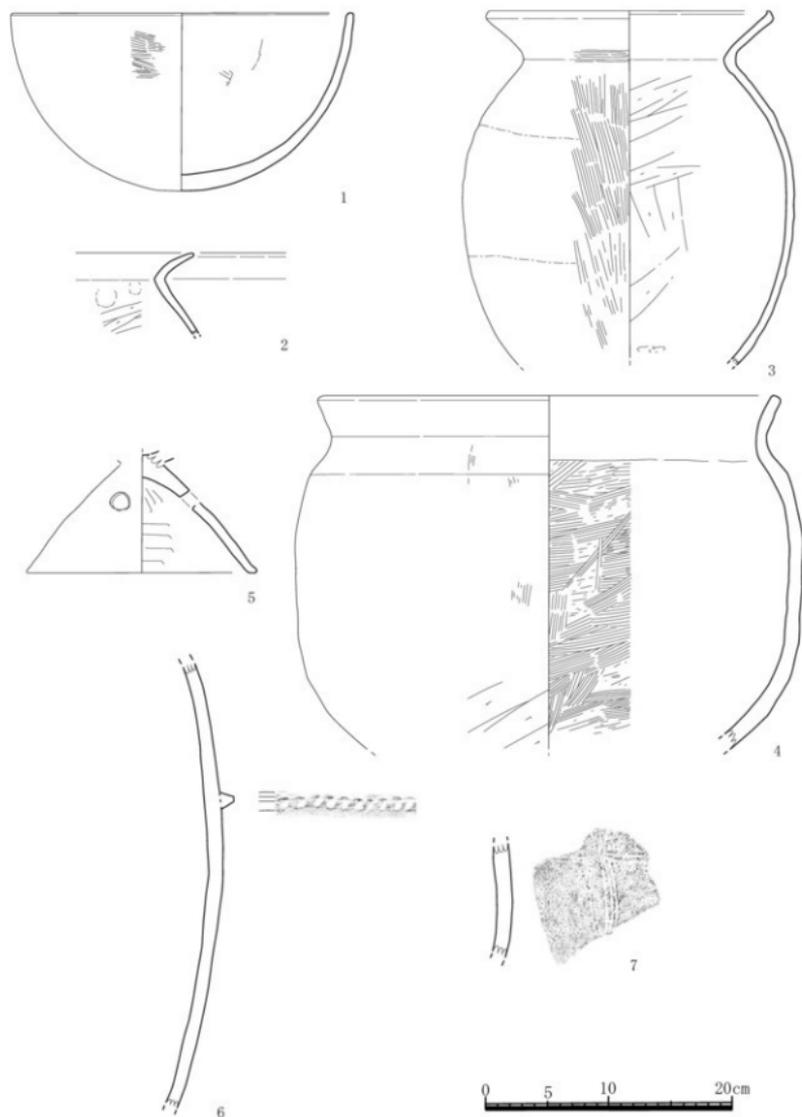


第 60 図 第 4 号土坑平・断面図 (1/10)

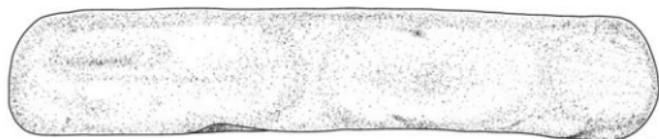
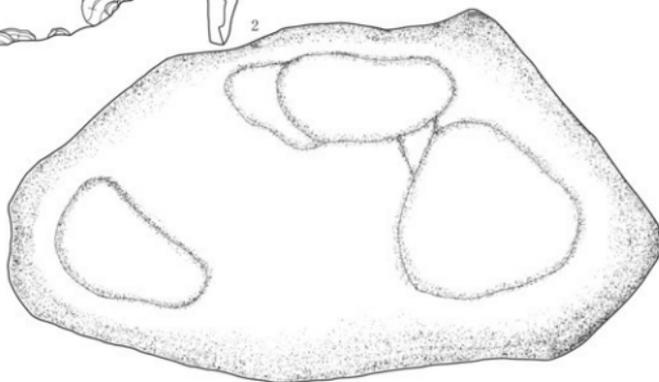
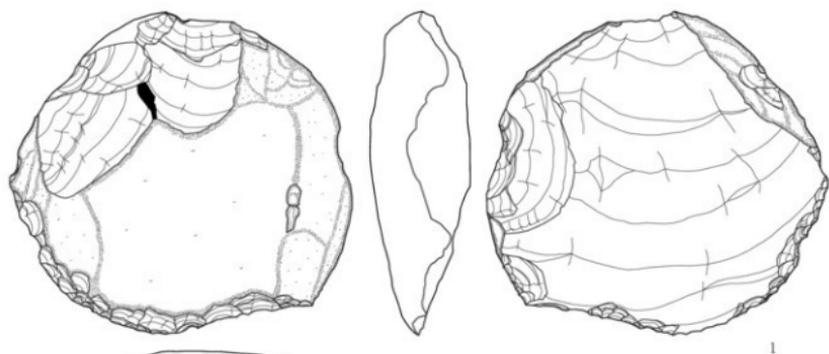
調査区中央よりやや北西よりの 30・31 グリッド境界部に位置し、第 5 号土坑を切っている。一辺約 0.55m の方形に近いプランを呈し、深さ約 15cm を測る。上辺東よりに土器片、中央下辺に自然礫が出土した。出土遺物から古墳時代初頭の所産と考えられる。

・出土土器 (第 61 図)

1～3・5・6 は古墳時代初頭の土師器である。1 は大形塊で、全体の 1/2 が残っている。底部は丸く湾曲しながら外方向に延びる。胴部上半～口縁部にかけてはほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は、丸みを帯びた方形を呈する。調整は、内面が底部～口縁部にかけてはナデであるが、わずかにハケメが残る。外面が底面～胴部中央はナデ、上面～口縁部にかけてはハケメ調整である。口縁端部はナデである。2 は甕口縁～胴部上半の小片である。胴部下半～頸部にかけてはほぼ直線的に口縁部とつづく。口縁部は、「く」字状に強く外反し、口縁端部は丸く取める。調整は内面下半が横方向のヘラケズリ、上半がナデ後指オサエを口縁部内外面はヨコナデを行っている。外面胴部は風化しているため調整不明である。内・外面調整から見て布留式系甕と考えられる。3 は、甕の胴部下半～口縁部。胴部は、大きく内湾して口縁部へとやや長胴で延びている。口縁部は「く」字状に強く開き、内面端部をつまみ上げているのが特徴である。調整は、内底面付近が指押しえ後ナデ、胴部下半～上半はヘラケズリ、頸部付近～口縁部内外面はヨコナデ、外面胴部は、5～6 本単位の櫛状工具で縦方向のハケメを施している。胴部中央付近にスガが付着している。ヘラケズリの範囲が畿内庄内式を口縁部が肥厚していること、外面がハケメであることは畿内布留式を意識しているが、在地の甕である。4 は甕で、全体の 1/5 が残存する。底部は欠損し、胴部下半は内湾しながら胴部中央に続く。胴部中央はほぼ直線的に延びるのが特徴的である。胴部上面は内湾し、底部に後縁を持つ。口縁部は緩やかに外反し、端部は方形を呈している。外面に黒斑があり、内外面ともスガが付着している。時期は弥生時代後期前後である。5 は土師器の小型器台の脚部である。脚部は大きく「ハ」の字状に開き、端部はやや外側に



第 61 图 第 4 号土坑出土土器 (1/3)



第62図 第4号土坑出土石器 (2/3, 但し3は1/3)

3

丸く肥厚し、設置面は平らである。穿孔が脚上部に3ヶ所ある。調整は、内面が工具によるナデ、外面は上面がナデ、下面は調整不明瞭である。6は、壺の胴部下半へ上半片である。胴部は、やや湾曲して内側へ延びている。胴部ほぼ中央にやや大きな刻目凸帯を貼り付けている。調整は、内・外面ともナデである。胴部凸帯の形態から時期を判定した。

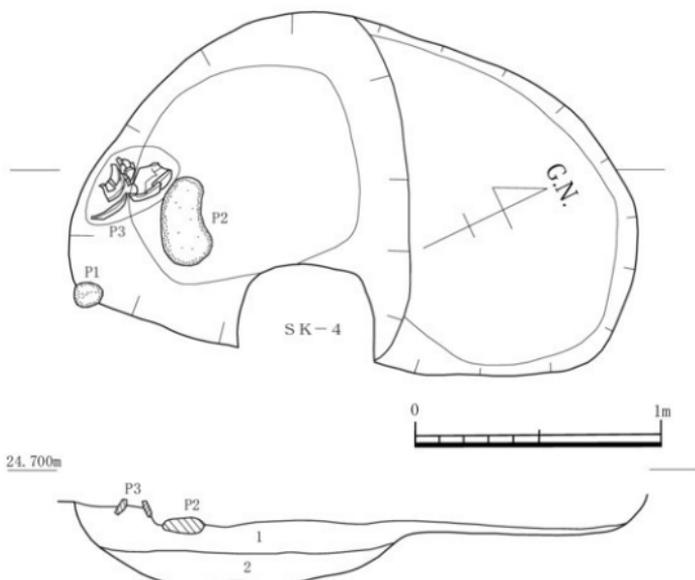
4・7は弥生土器である。4は甕で、全体の1/5が残存する。底部は欠損し、胴部下半は内湾しながら胴部中央に続く。胴部中央はほぼ直線的に延びるのが特徴的である。胴部上面は内湾し、底部に稜線を持つ。口縁部は緩やかに外反し、端部は方形を呈している。外面に黒斑があり、内外面ともススが付着している。時期は弥生時代後期前後である。7は壺の胴部中央部分かと思われる。調整は内外面ともナデ仕上げで、外面にヘラによる十字状の木葉文様が施文されている。時期は弥生時代後期後半前後である。4・7は混入品であろう。

・出土石器 (第62図)

1は安山岩製の礫器。表面に大きな自然面を有する分割礫を素材とし、下端に主に裏面から表面に向けて浅い調整を施して刃部を形成しており、上端部に大柄で浅い加工を入れて手持ち部を作り出している。刃部の表・裏面に使用痕が顕著に認められる。

2は角閃石安山岩製の台石。周縁部の表・裏面に急斜度の加工を施して整形しており、表面の複数の場所に敲打によると考えられる浅い窪みの痕が観察される。上半は、表面から裏面への折れによって欠損している。

3は安山岩製の石皿。表・裏面に使用による顕著な磨耗痕が認められる。



1. 暗褐色土：黒色土ブロック橙色バミスを多く含む。しまり非常によく、粘性殆どなし。
2. 褐色土：橙色バミスを若干、黄褐色土ブロック断を多く含む。しまりよく、粘性あり。

第63図 第5号土坑平・断面図 (1/20)

第5号土坑 (第63図)

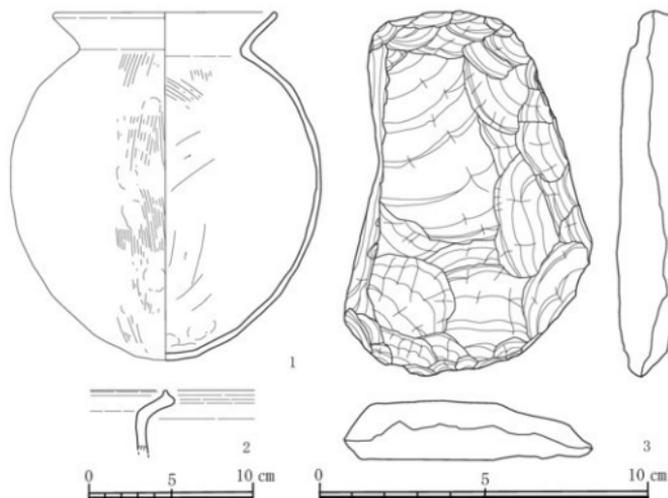
調査区中央よりやや北西よりの30グリッド西端に位置し、中央東端を第4号土坑に切られている。長径約5.2m、短径約1.45mの楕円形に近い平面プランを呈し、深さは、北側が浅く約16cm、南半は深く約0.35mを測り、南半の上辺から土器片や自然礫が出土した。出土遺物から古墳時代初頭の所産であろう。

・出土土器 (第64図)

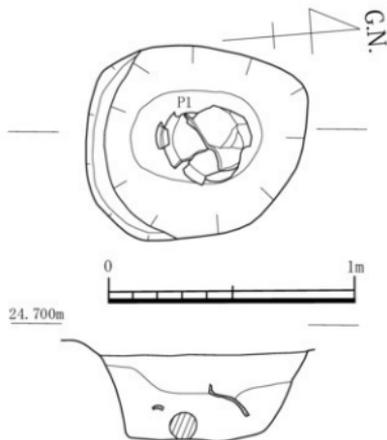
1は土師器甕のほぼ完形品である。底部は丸で、胴部は大きく内湾しながら口縁部とつづく。口縁部は、つよく外反し、口縁端部はやや肥厚しながら丸く取めている。胴部最大径はほぼ中央にあり、やや長胴の甕である。調整は内面が底部～頸部にかけて指おさえ後縦方向のヘラケズリ後ナデを行っている。口縁部内外面はヨコナデ、外面は、頸部～胴部下半まで指押さえ後ナデを行っている。外面の胴部中央付近から下半にかけてススが附着している。時期は底部の丸底化やヘラケズリ調整が頸部まで認められることからからみて、時期は、近畿地方の庄内式土器に続くに布留式土器で古墳時代初頭のものである。2は弥生土器の甕形土器小片である。胴部上半～口縁部にかけてのものである。胴部と口縁部は緩やかに「く」の字状に屈曲する。口唇部はつまみ上げ口縁をなす。調整は内面は指押さえ後ナデ、口縁部外面はヨコナデ、胴部は指押さえ後ナデを施している。時期は弥生時代中期末～後期初頭で、混入品であろう。

・出土石器 (第64図)

3は緑泥片岩製の扁平打製石斧。薄平な幅広剥片を素材として、表面に大柄で平坦な加工を入れて厚みを取り除き、表・裏面の周縁部にやや細かく急斜度な調整を施して、整形・刃部形成をしている。刃部には顕著な使用痕が認められ、左側縁は裏面からの折れによって欠損している。



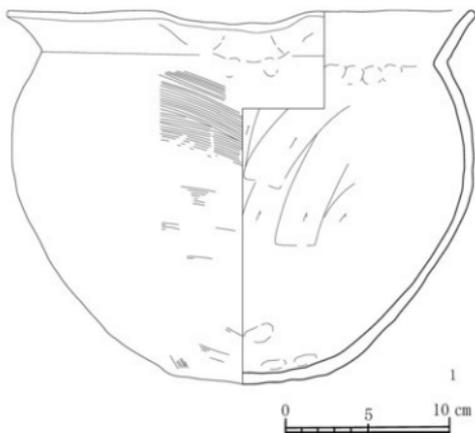
第64図 第5号土坑出土遺物 (1/3, 但し3は2/3)



24.700m

1. 暗褐色土 2. 褐色土

第65図 第6号土坑平・断面図 (1/20)



第66図 第6号土坑出土土器 (1/3)

第6号土坑 (第65図)

調査区中央よりやや北西よりの30グリッド東端に位置する。長辺約0.9m、短辺約0.8mの方形プランを呈し、深さ約15cmを測る。遺構中央部に完形に近い甕が埋納されている。出土遺物から弥生時代前期後半前後の所産だと考えられる。

・出土土器 (第66図)

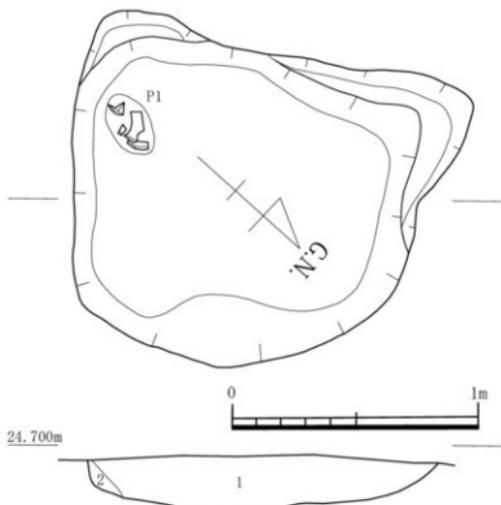
甕胴部上半部～口縁部片である。形態は胴部がやや内湾し口縁部は屈曲しない。端部は方形に取める。口縁直下外面に刻み目凸帯を巡らす。調整は内面指押さえ後ナデ、外面指押さえ後ハケ目を施して。時期は弥生時代前期後半前後である。

第31号土坑 (第67図)

調査区中央よりやや北よりの31グリッド中央部に位置する。長辺約1.55m、短辺約1.35mの方形に近い形状を呈し、深さ約0.25mを測る。出土遺物から古墳時代初頭の所産だと考えられる。

・出土土器 (第68図)

1・2は古墳時代初頭の土師器の甕である。1は、口縁部～胴部中央にかけて2/5が残存する。胴部は復元最

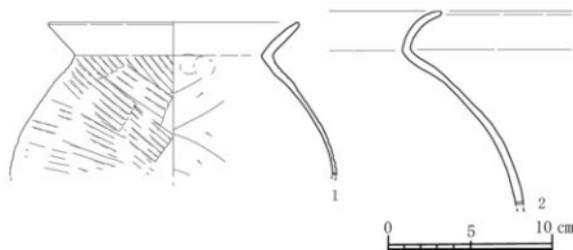


24.700m

1. 暗褐色土：黄褐色土ブロック・橙色バミスをやや多く含む。しまりよく、粘性余りなし。
2. 黄褐色土：暗褐色土ブロックをやや多く含む。しまりよく、粘性余りなし。

第67図 第31号土坑平・断面図 (1/20)

大径がほぼ中央にあり、あまり内湾せず口縁部に続く。口縁部はつづく外反し口縁端部は内面が若干屈曲しながら丸く収めている。調整は内面が、胴部中央から上半にかけては指押さえ後上方向のヘラケズリ、頸部付近は指押さえを行っている。口縁部内外面はヨコナデ、外面は、頸部～胴部上



第68図 第31号出土土器(1/3)

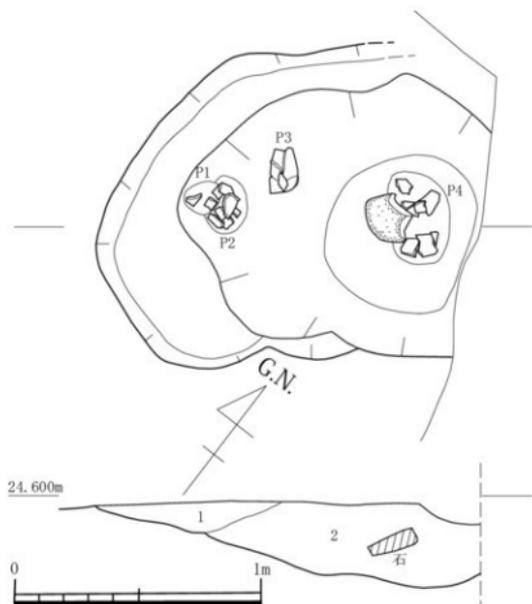
半は右回転の叩き目を施している。胴部の器壁厚が3mm前後と非常に薄いのが特徴である。時期は外面の叩き痕、内面のヘラケズリ痕、器壁の薄さなどから近畿地方の庄内式土器である。この土器は畿内あるいは福岡平野からの持ち込みの可能性もある。2は布留式系甕で、口縁～胴部中央付近の小片である。胴部下～頸部にかけてはやや内湾して口縁部とつづく。口縁部は、「く」字状に大きく外反し、口縁端部は丸く収める。調整は内面下半が横方向のヘラケズリ、上半がナデ後指オサエを口縁部内外面はヨコナデを行っている。外面胴部は風化しているため調整不明である。

第32号土坑(第69図)

調査区北東端の35グリッドに位置し、半ば以上が検出されている。長径は不明だが、短径約1.3mの長楕円形を呈すると考えられ、深さ約0.35mを測る。3か所に亘って土器片及びび打ち欠いた礫が出土した。出土遺物から古墳時代初頭の所産と考えられる。

・出土土器(第70図)

1・2は古墳時代初頭前後の土師器である。1は、高環口縁部片で、口縁部は、大きく湾曲しながら外反する。口縁端部は丸く収める。調整は内外面ともナデ調整と考えられる。2は、壺の底部～胴部下半片である。底部はややレンズ状の丸底である。胴部は、湾曲して外方へ延びている。調整は、内面底部が指押さえ後ナデ胴部がハケメである。



1. 暗褐色土：黒褐色土ブロックを多く含む。しまりよく、粘性殆どなし。
2. 暗褐色土：黒褐色土ブロック、橙色パミスを若干含む。しまり非常によく、粘性殆どなし。

第69図 第32号土坑平・断面図(1/20)

外面は風化が著しく調整不明瞭である。

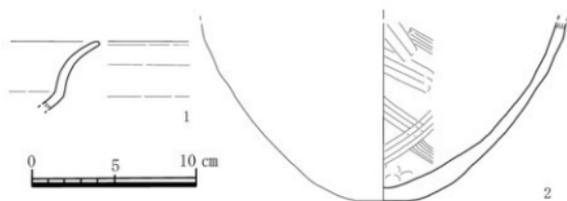
④ 竪穴状土坑

第2号土坑 (第71図)

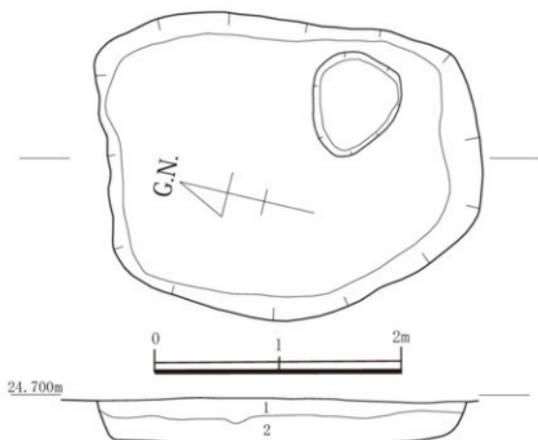
調査区中央より南よりの27・28グリッド境界部に位置する。長辺約3.05m、短辺約2.5mの長方形に近い形状を呈し、深さ約0.4mを測るが、南東部に一部柱状の深みを有する。

・出土土器 (第72図)

1～7は弥生土器である。1は、甕胴部上半部小片である。調整は内面ナデ、外面ハケ目後並行沈線を2条施す。時期は板付IIb系の弥生時代前期後半前後である。2は甕胴部上半部片である。形態は胴部が直線的に延びる。破片のほぼ中央の外面に刻み目凸帯を巡らす。調整は内面指押さえ後ナデ、外面はナデである。時期は弥生時代前期後半前後である。3は高環脚部片である。脚部の残存は1/3である。脚部下半はラッパ状に開



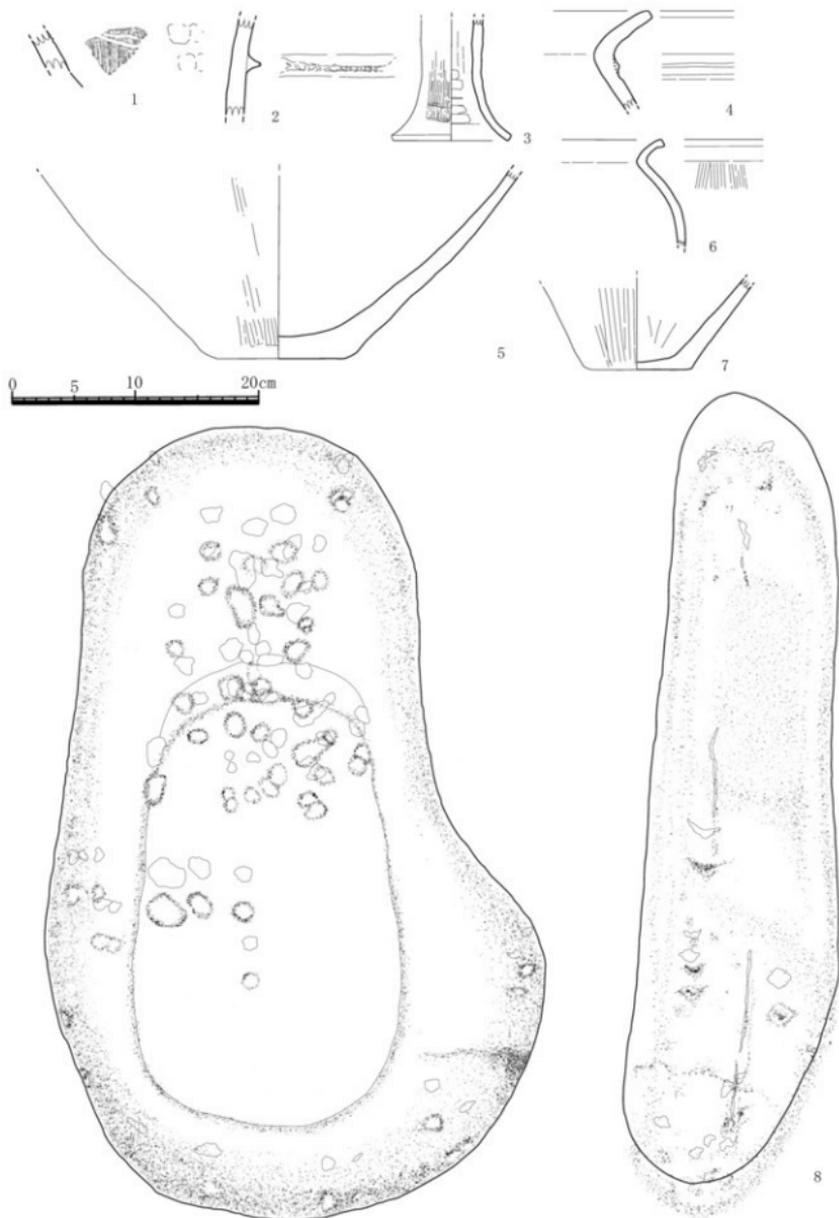
第70図 第32号土坑出土土器 (1/3)



1. 黒褐色土：黄褐色土・褐色土ブロックを若干含む。しまりよく、粘性ややあり。
2. 暗褐色土：黒褐色土ブロックを多く、褐色土・黄褐色土ブロックをやや多く、含む。しまりやや甘く、粘性割合あり。

第71図 第2号土坑平・断面図 (1/40)

き端部が方形を呈し、脚部上半は直線的に立ち上がる。調整は脚下半部内・外面がヨコナデ、内面下部上面にかけては工具によるナデ、上方はシボリ痕が認められる。外面下方上半からはハケ目を施している。時期は杯部が欠損しているので推定できないが、高環が多くなる弥生時代中期中頃～後期にかけてであろうか。4は、壺の胴部上半～口縁部にかけてである。胴部上半から口縁部にかけては緩やかに反し口縁端部は断面方形を呈す。頭部外面に断面三角の凸帯と沈線を巡らす。調整は口縁部内・外面ともにヨコナデ、胴部はナデ仕上げである。時期は弥生時代前期後半前後であるが、古い形態を持つ。5は、壺の可能性のある破片で底部～胴部下半の部分である。底部はやや薄い平底で、胴部は、直線的に外方へ延びている。調整は、内面がナデ、外面が底部がナデ、胴部がナデ後ハケメを施すが風化が著しく明瞭でない。時期は、胴部上半～口縁部がないので明確にはできないが、弥生時代中期中頃から後半にかけてのものであろうか。6は壺片である。胴部上半部～口縁部。胴部は内湾しながら口縁部と続き、口縁部は「く」の字状に屈曲する。口唇部は下側を肥厚させた口縁をなす。調整は内面が胴部下方はナデ、内面胴部上方～口縁部内外面ヨコナデ、外面胴部上方ハケ目、下方はハケ目後ミガキを施している。時期は底部が欠損しているので明瞭でないが弥生時代中期末～後期初頭であ



第72图 第2号土坑出土遗物 (1/3)

ろうか。7は、甕底部～胴部下半で、底部4/5が残存する。底部は薄い平底で、胴部は直線的に外方に延びる。調整は、内底部～胴部下部が工具によるナデ、上半がナデ、外面は粗いハケ目である。時期は弥生中期末～後期初頭前後である。

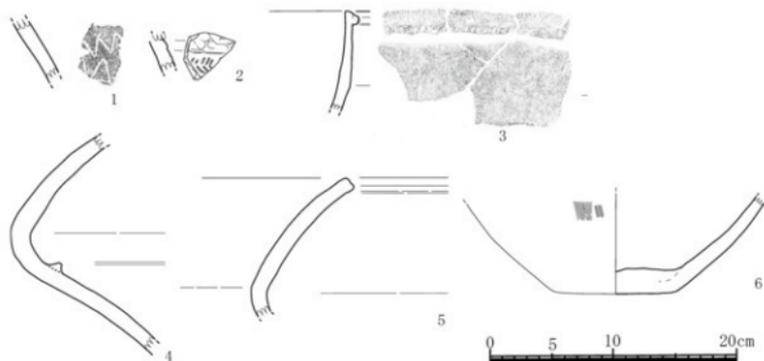
・出土石器 (第72図)

8は砂岩製の石皿である。表面下半中央部と裏面上半中央部に使用による磨耗痕が見られる。

⑤第5調査区出土の他の遺物

・出土土器 (第73図)

1～7は弥生土器で、1～5は弥生時代前期後半前後の所産で、3は甕だがそれ以外は壺である。1は、胴部上半部分かと思われる。調整は内外面ともナデ仕上げで、外面に二枚貝による鋸歯文圧痕が2条施文されている。2は胴部部分かと思われる。上部外面に凸帯状の膨らみが見られ、その下部に無軸羽状文が施文されている。調整は内外面ともナデ仕上げである。3は胴部上半部～口縁部片である。形態は胴部がやや内湾し口縁部は屈曲しない。端部は方形に取める。口縁直下外面に刻み目凸帯を巡らす。調整は内面指押さえ後ナデ、外面指押さえ後ハケ目を施している。4は頸部下半～胴部上半片である。頸部下半に断面三角の凸帯を巡らす、頸部～口縁部が広がるのが特徴である。調整は内外面とも器面風化が激しいがナデ仕上げと思われる。5は、頸部～口縁部にかけて大きく開く広口壺片で、口縁端部は方形である。調整は内・外面ナデ?仕上げである。時期は弥生時代中期である。6は底部～胴部下半である。底部はやや厚めで、平底を呈する。底部には粘土充填痕がある。調整は、内面底部～胴部下半にかけてはナデ、外面底部～胴部下半はナデで一部ハケメが認められる。時期は、胴部上半～口縁部が欠損しているので明確ではないが弥生時代中期後半前後であろう。

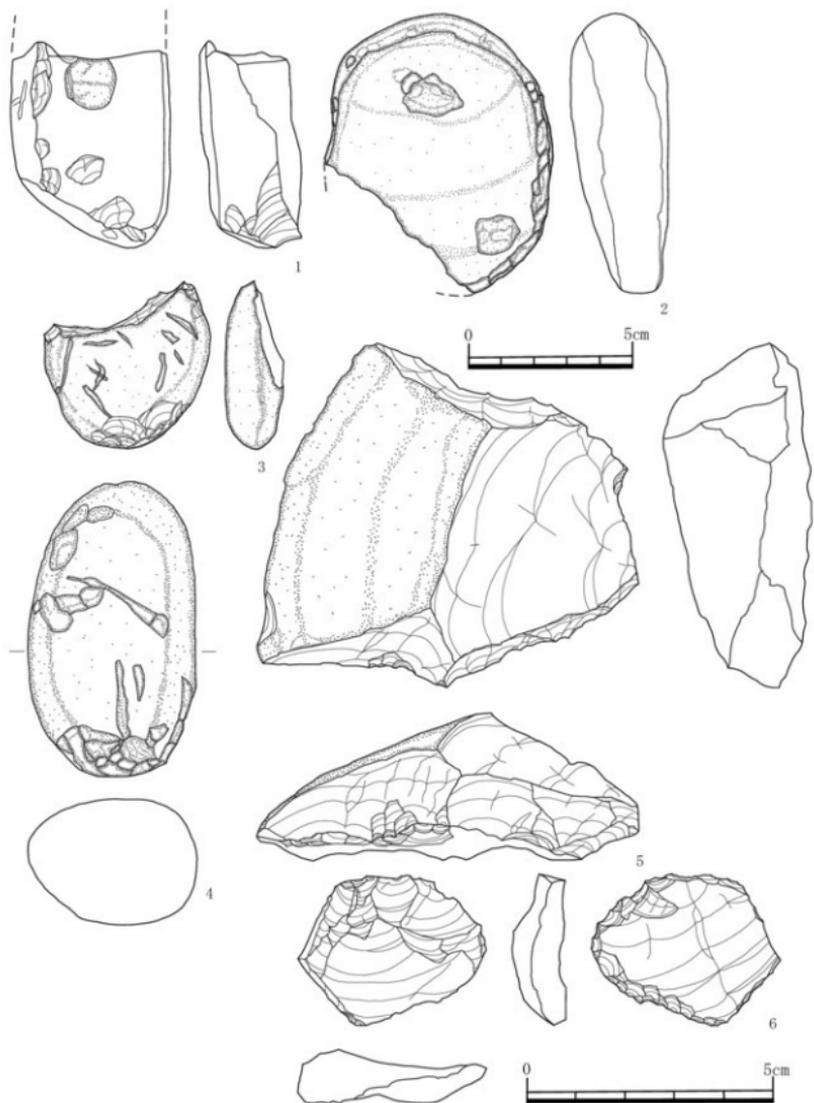


第73図 第5調査区出土の他の土器 (1/3)

・出土石器 (第74図)

1は安山岩製の砥石。表面、左右側面、下端面に研磨整形が認められ、表面を機能面としていたと考えられる、表面・下端面・右側面には磨き残しが存在する。裏面は欠損している。

2は砂岩製の磨石。円礫を素材としており、周縁部に圧擦と敲打による潰れ痕が顕著に認められ、左側縁下半を表面から裏面への衝撃で欠損している。



第74図 第5調査区出土の他の石器 (1/3, 但し1・4は1/1)

3・4は敲石。3は緑泥片岩製で、薄い楕円形の礫を用いている。裏面に大柄で平坦な加工を入れており、下端に敲打による剥落と潰れ痕が認められるが、上端は裏面からの折れによって欠損しており、上端部も機能していた可能性がある。4は角閃石安山岩製で、平面形が楕円形に近い円礫を用いている。主に下端面を機能部としており、敲打による潰れ痕が顕著に認められ、表面には擦痕も観察される。使用後に被熱して、赤化している。

5は角閃石安山岩製の礫器。表面の半ば以上に礫面を残す分割礫を素材とし、下端面に4回の加工を施して刃部を形成している。刃部表面には若干の使用痕が、裏面にも使用による剥落が認められる。

6. 第6調査区 (第75図)

第5調査区の北隣に位置し、楕円形の余り大きくない土坑群、長方形で大柄な土坑群、倒木痕群が検出されている。

①溝状遺構

第1号溝状遺構 (第76図)

調査区中央よりやや北東よりの43グリッドに位置し、北西-南東方向を示すが、第14号土坑に切られた西北西端で途切れている。調査区内で長さ約5.0m、最大幅約0.7m、最大深約0.25mを測る。底面の標高差が約15cmを測り、南東から北西方面への水流が生じていたと推測される。時期を判別できる遺物は出土していない。

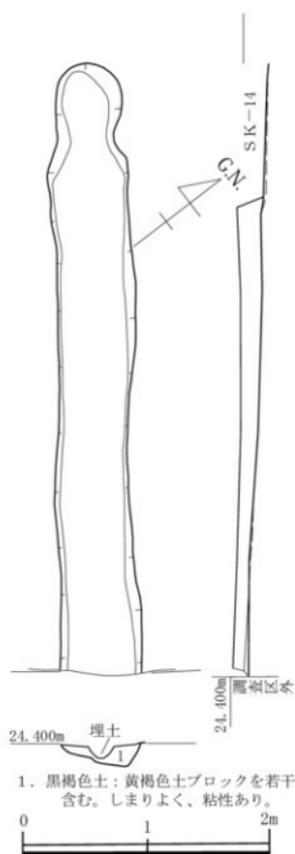
②墓壇ないしは祭祀遺構

第26号土坑 (第77図)

調査区中央より南よりの39・40グリッド境界部分に位置し、倒木痕4に切られている。一辺約1.55mで深さ約0.2mの方形を呈する部分と、中央に径約0.8m、深さ約0.3mの円形を示す部分に分かれる。円形部分の北辺には2個体の壺が検出されたほか、多くの土器片が出土した。出土土器から古墳時代初頭の所産と考えられる。

・出土土器 (第78図)

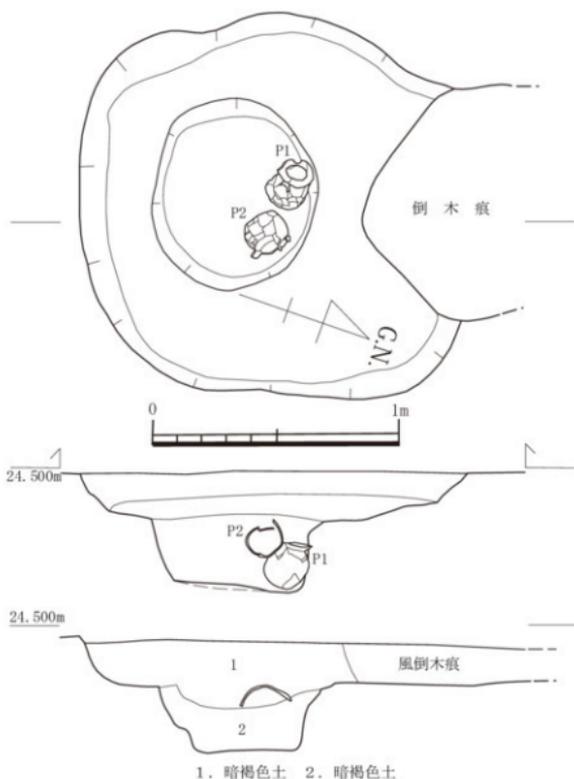
1～3は古墳時代初頭の土師器の甕である。1はほぼ完形品で、底部は丸で、胴部は大きく内湾しながら口縁部とつづく。口縁部は、つよく外反し、口縁端部は丸く収めている。胴部最大径中央よりやや下半にある。調整は内面が底部～頭部にかけて縦方向のヘラケズリを行っている。口縁部内外面



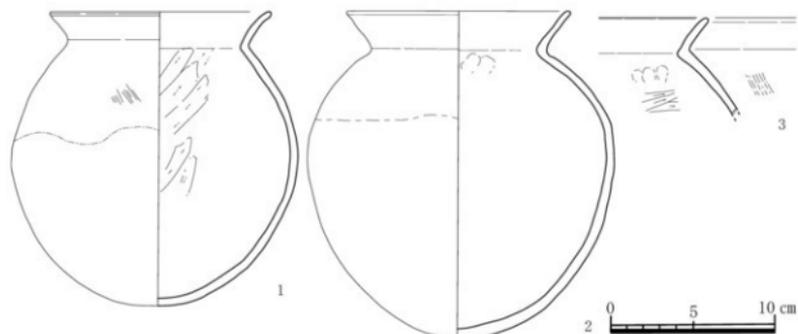
第76図 第1号溝状遺構横・断面図 (1/40)

はヨコナデ、外面は、頸部～胴部下半はハケ目後ナデを下半～底部にかけては調整不明であるがかすかにナデを施している。外面の胴部中央付近から下半にかけてスガが付着している。底部の丸底化やヘラケズリ調整が頸部まで認められることから、近畿地方の庄内式土器に続く古式土器である。

2はほぼ完形品で、底部は丸で、胴部は大きく内湾しながら口縁部とつづく。口縁部は、つよく外反し、口縁端部は丸く収めている。胴部最大径中央よりやや下半にある。調整は内面が底部～頸部にかけて縦方向のヘラケズリを行っている。口縁部内外面はヨコナデ、外面は、頸部～胴部下半はハケ目後ナデを下半～底部にかけては調整不明であるがかすかにナデを施している。外面の胴部中央付近から下半にかけてスガ



1. 暗褐色土 2. 暗褐色土
第77図 第26号土坑平・断面図 (1/20)



第78図 第26号土坑出土土器 (1/3)

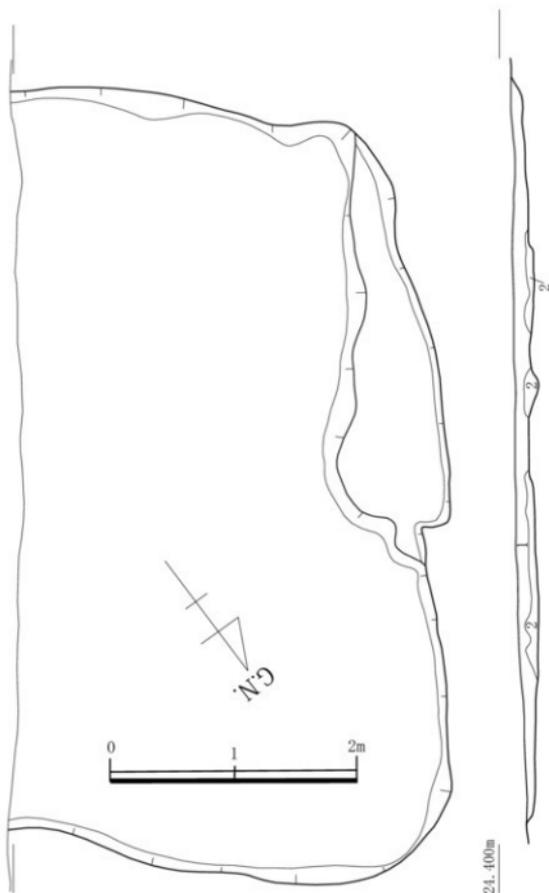
付着している。時期は底部の丸底化やヘラケズリ調整が頸部まで認められることから、近畿地方の庄内式土器に続く布留式甕である。

3は口縁～胴部上半の小片である。胴部下半～頸部にかけてはやや内湾し口縁部とつづく。口縁部は、「く」の字状に強く外反し、口縁端部は丸く取める。調整は内面が下半は横方向のヘラケズリ、上半はナデ後指オサエを口縁部内外面はヨコナデを行っている。胴部はハケメ調整である。内・外面調整から見て布留式系甕と考えられる。

③ 竪穴状土坑

第10号土坑 (第79図)

調査区北東端に近い46グリッド東端に位置し、半ばほどが検出されている。判然としている方の一辺は約6.2mの方形に近い形状を呈し、深さ約0.2mを測る。時期を判別できる遺物は出土していない。



1. 黒褐色土：黄褐色土ブロックを若干含む。しまりよく、粘性ややあり。
2. 黄褐色土：黒褐色土ブロックを多く含む。しまりよく、粘性余りなし。

第79図 第10号土坑平・断面図 (1/40)

第11号土坑 (第80図)

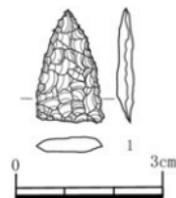
調査区北西端の46・47グリッド境界部分に位置し、第8号土坑に南端を若干切られている。長方形に近い形状を呈していたと推測され、深さ約0.25mを測る。時期を判別できる遺物は出土していない。

第12号土坑 (第81図)

調査区北端に近い43～46グリッドの境界部分に位置し、長辺約4.0m、短辺約3.5mの方形の平面プランを呈する。深さは約13cmを測る。

・出土石器 (第82図)

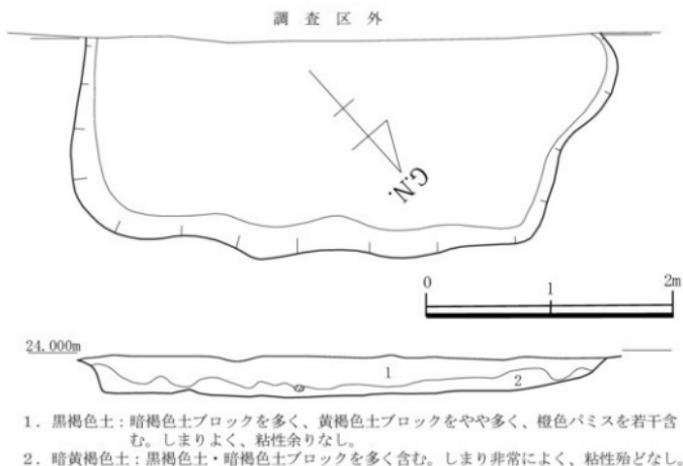
1は金山産と考えられるサスカイト製の石鏃。表・裏面の内奥部にま



第82図 第12号土坑
出土石器 (1/1)



第80図 第11号土坑平・断面図 (1/40)

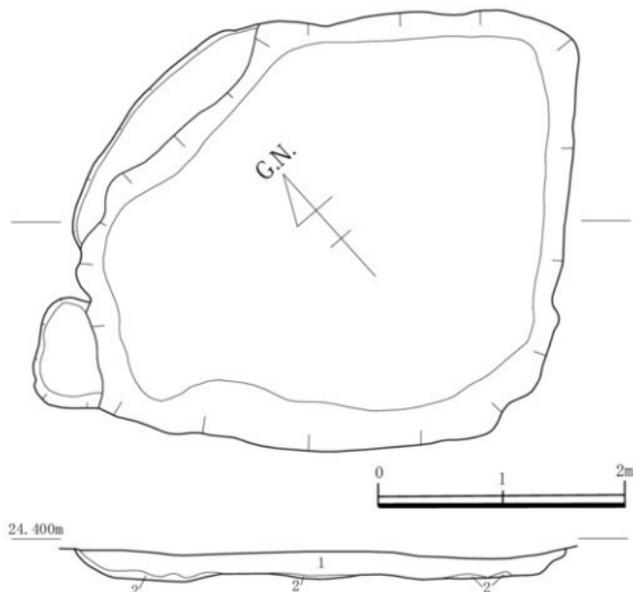


第83図 第14号土坑平・断面図 (1/40)

で押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状に仕上げられ、基部は平基である。

第14号土坑 (第83図)

調査区中央より北よりの43グリッド北西端に位置し、半ばほどが検出されており、第1号溝状遺構



1. 黒褐色土：黄褐色土ブロックを若干、左辺では多く含む。しまりよく、粘性殆どなし。
2. 暗黄褐色土：黒褐色土ブロックを多く含む。しまり非常によく、粘性余りなし。

第 81 図 第 12 号土坑平・断面図 (1/40)

の北西端を切っている。少なくとも一辺は約 4.3m の方形に近い形状を呈しており、深さ約 0.35m を測る。出土した遺物から弥生時代前期後半前後の所産と考えられる。

・出土土器 (第 84 図)

1・2 は弥生時代前期後半前後の弥生土器の甕である。1 は口縁部片である。口縁部は頸部から大きく「く」の字状に外反する。端部は方形の面をなし、中央は、やや抉れている。厚みがあるのが特徴である。調整は、内外面ともヨコナデで胴部外面の一部にミガキが認められる。2 は胴部上半部～口縁部片である。形態は胴部がやや内湾し口縁部は屈曲しない。端部は方形に収める。口縁直下外面に貝殻刻み目凸帯を巡らす。調整は内面ナデ、外面ヨコナデを施している。

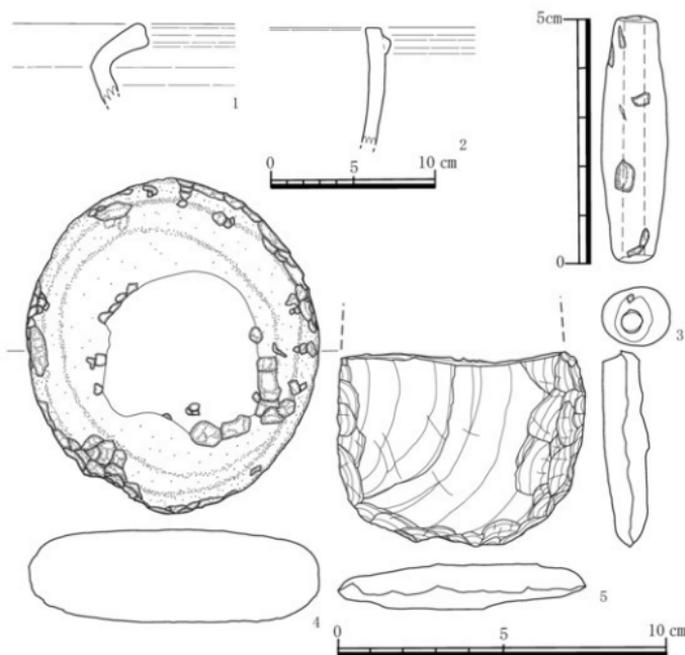
・出土土錘 (第 84 図)

3 は表面の上下の孔近くに紐擦れの痕が認められる。上下の孔の部分には焼成前の研磨が見られる。

・出土石器 (第 84 図)

4 は角閃石安山岩製の台石。楕円形の自然礫を利用し、表・裏面の中央は圧擦によりやや変色して摩滅しており、その周辺と周縁部に敲打による潰れ痕が顕著に認められる。

5 は角閃石安山岩製の扁平打製石斧。扁平な剥片を素材とし、主要剝離面の裏面に大柄で薄平な加工を施して厚みを取った後、周縁部に小柄な調整を施して整形・刃部形成を施している。刃部に若干の使用痕が認められ、基部側の半ば以上を表面から裏面への折れによって欠損している。



第84図 第14号土坑出土遺物 (1/3, 但し3は1/1, 4・5は2/3)

④一般的な土坑

第9号土坑 (第85図)

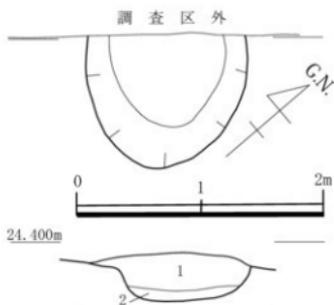
調査区北端に近い46グリッド北西端に位置し、半ばほどが検出され、短径約0.55mの楕円形を呈していたと考えられる。深さは約0.2mを測る。時期を判別できる遺物は出土していない。

第19号土坑 (第86図)

調査区南端に近い37グリッドに位置し、長辺約1.7m、短辺約1.45mの方形に近いプランを呈し、深さは約17cmを測る。縄文時代後期～弥生時代前期に特有の扁平打製石斧が出土しており、弥生時代前期の所産と推測される。

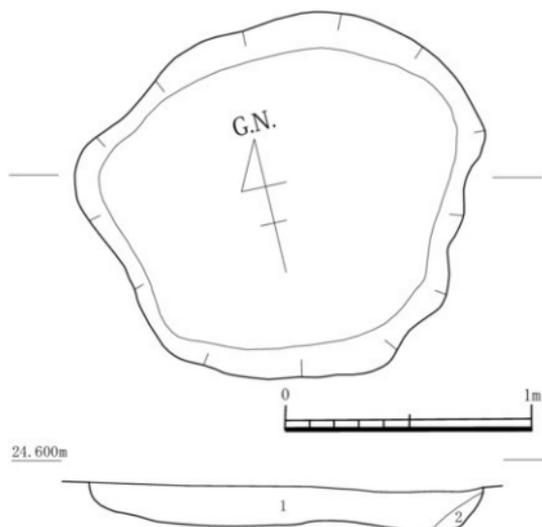
・出土石器 (第87図)

1は緑泥片岩製の扁平打製石斧。薄平な剥片を素材



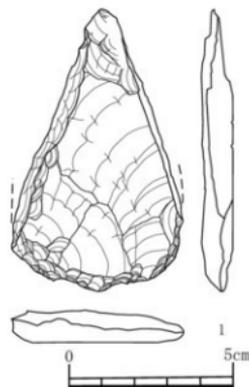
1. 黒褐色土：黄褐色土粒子を若干含む。しまりやや甘く、粘性割合あり。
2. 暗黄褐色土：黄褐色土ブロックをやや多く含む。しまりよく、粘性余りなし。

第85図 第9号土坑平・断面図 (1/20)



- 24.600m
1. 黒褐色土・黄褐色土・暗褐色土ブロックをやや多く含む。しまりよく、粘性余りなし。
 2. 暗黄褐色土：黒褐色土ブロックを多く含む。しまりやや甘く、粘性あり。

第86図 第19号土坑平・断面図 (1/20)



第87図 第19号土坑出土石器 (1/2)

とし、表面に大柄で平坦な加工を施した後、周縁部に急斜度な調整を入れて、整形・刃部調整をしている。刃部に使用痕が認められ、左右側縁を欠損している。

第20号土坑 (第88図)

調査区中央より南よりの38グリッド北東端に位置する。全体的には長径約1.55m、短径1.2mの楕円形を呈するが、約0.1～0.2m斜めに落ちてから径約0.95mのほぼ円形の形状を示す。深さは約0.55mを測る。時期判別できる遺物は出土していない。

⑤第6調査区出土の他の遺物 (第89図)

・出土土器

1・4は弥生前期後半前後の弥生土器である。1は甕形土器片で、底部～胴部下半が残っている。底部は若干上げ底で厚い。胴部下半は直線的斜め上に延びる。調整は底面がナデ、底部外面はナデ、底面と外面の境は指押さえが認められる。胴部はハケ目を施している。4は壺の肩部片である。調整は内外面ともナデ仕上げで、外面には二枚貝による鋸歯文様の圧痕文様が認められる。2は、須恵器脚付壺片である。脚部は、大きく「八」字に開き、端部は外側に跳ね上がり、畳付は内面である。壺底部はゆるく外側へ屈曲し、上面に沈線を巡らす。胴部は直線的に斜め上方にあがる。調整は内面が回転ヨコナデ、外面脚部、壺底部が回転ヨコナデ、壺胴部が回転ヨコナデである。時期は、脚部の形態から8世紀第4四半期前後のものであろう。3は小型鉢で、底部は丸底でくびれずに口縁部へと続く。

口縁端部は、やや外反し丸く取め全体に厚みがあるのが特徴である。調整は底部～胴部下半が工具によるナデ、胴部上半～外面は器面風化のため不明瞭であるがナデか？時期は古墳時代初頭の土師器である。

・出土石器

5は安山岩製の扁平打製石斧未成品。薄平な剥片を素材とし、表・裏面に大柄で平坦な加工を入れて厚みを取った後、周縁部に細かく急斜度な調整を施して整形し、基部付近には両側縁に挟りを入れて幅を狭めているが、刃部を想定した下半部が裏面から表面への折れによって欠損し、製作を放棄したと考えられる。

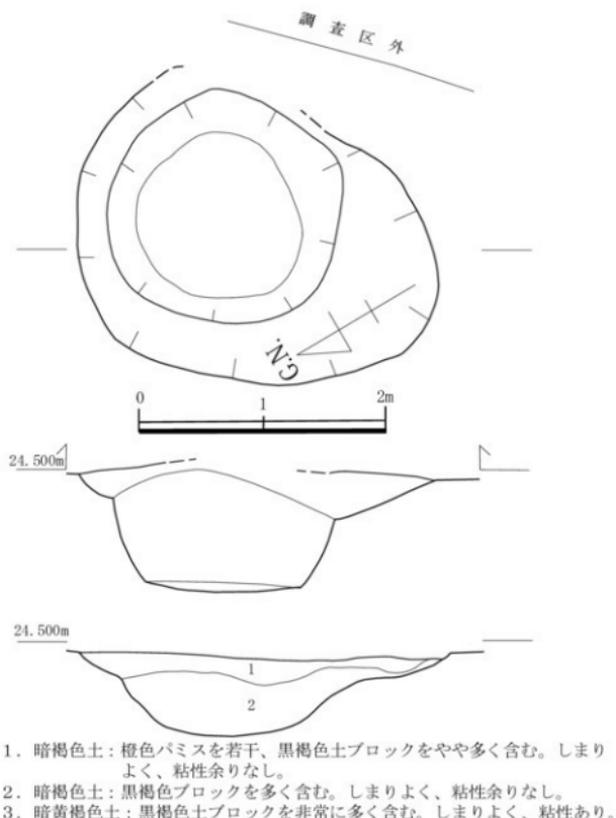
6はシルト岩製の打製石斧未成品。表・裏面にやや大柄で平坦な加工を入れて整形し、下端には細かい加工で刃部形成を行っており、左側面には

垂直な調整を施している。右側面の整形がうまく行かず、斜め方向に折れ、下端の打面の厚みが取りきれなかったためか、製作を断念している。

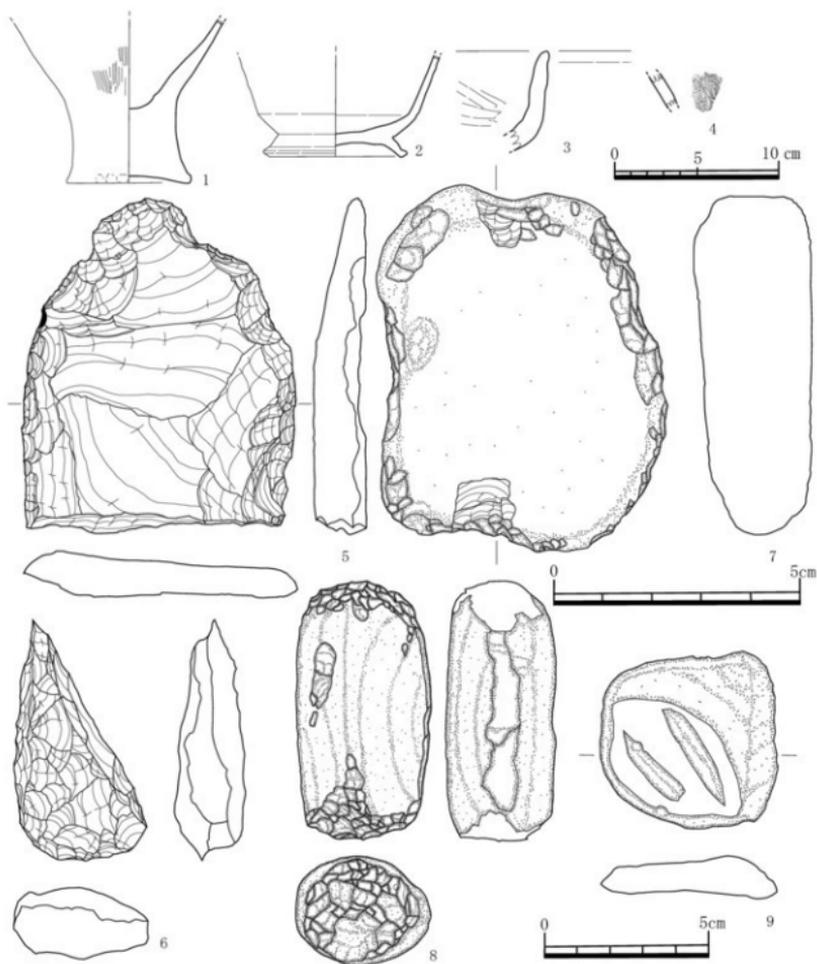
7は角閃石安山岩製の石錘。平面形が四角形に近い分厚い礫を素材とし、周縁部に敲打調整を施して整形し、上下端の中央部に、上端は表面のみ、下端は表・裏面に数回の打ち欠きにより挟りを入れている。

8は角閃石安山岩製の敲石。分厚く棒状の自然礫を用いており、上・下端に敲きによる潰れ痕が顕著に認められる。また、右側縁に圧擦による浅い窪みが見られ、磨石状に使った可能性もある。

9は安山岩製の砥石。方形に近い形状の自然礫を用い、表面の中央に研磨による滑らかな面が認められ、その中にやはり研磨による浅い窪みが見られる。



第 88 図 第 20 号土坑平・断面図 (1/40)



第 89 図 第 6 調査区出土の他の遺物 (1/3, 但し 5・6・8・9 は 2/3, 7 は 1/1)

第1a表 土器観察表①

図 番 号	出土地点	器 種	種別	法 量				胎 土	色 調		調 整		備 考
				口徑	器高	底徑	最大胴		内	外	内	外	
10 1	1区 SH2	甕	土師器	(21.8)	21.0+ α	-	(26.0)	石灰 長石 角閃石 雲母	灰黒色～ 褐色	灰黒色～ 赤褐色	ナデ 工具ナデ	ナデ ヨコナデ 工具ナデ ハク目 ハク目 (12～14E, 20)	
10 2	1区 SH2P3	甕	土師器	(20.3)	32.6	2.5	(24.0)	石灰 白色粒子 砂粒	淡白黄色	淡白黄色 ～淡白褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ ハク目	
10 3	1区 SH2 南東区	甕	土師器	-	16.1+ α	-	23.4	角閃石 長石 石灰 白色粒子	淡茶黄色	よう	ヨコナデ 指オサ工後 ナデ 指オサ工後 ナデハク目	ヨコナデ ハク目 平行タタキ クスリ	
10 4	1区 SH2P3 西脇	甕	土師器	(19.0)	38.6	-	28.8	石灰 砂粒 角閃石 雲母	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ 工具ナデ後 ハクナデ クスリ後ナ デ	ヨコナデ ハクナデ ナデ	
10 5	1区 SH2P7	甕	土師器	19.6	17.2	-	-	角閃石 石灰 白色粒子	褐色～ 黒褐色	褐色～ 黒褐色	クスリ タタキ後ナ デ	ナデ タタキ クスリ後ナ デ	
10 6	1区 SH2 北区下層	甕	弥生 土器	-	10.0+ α	-	-	角閃石 長石 石灰	茶灰色	茶褐色～ 茶灰色	指オサ工後 ナデ ナデ後ミガ キ	指オサ工後 ヨコナデ ハク目	
10 7	1区 SH2 南東区上層	甕	弥生 土器	-	7.1+ α	-	-	角閃石 長石 石灰 白色粒子	淡褐色	淡褐色	ナデ後ミガ キ	ナデ 刻目 沈線 刺突文 ハク目	
10 8	1区 SH2 北区	甕	弥生 土器	-	3.95+ α	-	-	長石 角閃石 石灰 白色粒子	暗茶色	茶褐色	ミガキ後施 文	ミガキ ミガキ後赤 色塗彩	
12 1	1区 SH3P4	甕	土師器	18.8	26.4+ α	-	23.4	石灰 長石 角閃石 白色粒子	淡白黄色 ～黒褐色	淡黄褐色～ 黒灰色	ヨコナデ クスリ	ヨコナデ クスリ後ミ ガキ	
12 2	1区 SH3P3	甕	弥生 土器	-	23.0+ α	2.0+ α	-	石灰 長石 角閃石 雲母	淡白黄色	黒色～淡 白黄色	ナデ 工具ナデ (ハクナデ)	ナデ 工具ナデ (ハ クナデ)	
12 3	1区 SH3P6	甕	弥生 土器	(21.6)	25.2	7.0	(21.1)	石灰 長石 角閃石 白色粒子 砂粒	茶灰色～ 暗茶灰色	茶褐色～ 暗茶色	指オサ工後 ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ハク目 ナデ	
12 4	1区 SH3P5	甕	弥生 土器	-	12.7+ α	7.2～ 7.4	-	角閃石 長石 石灰	黄白色	淡灰黒色 ～淡赤褐色	ナデ	ナデ ハク目	
12 5	1区 SH3P2	甕	弥生 土器	(18.3)	18.2	(6.4)	-	角閃石 長石 石灰 白色粒子	淡白黄色	淡茶黄色 ～暗灰色	ヨコナデ 指オサ工後 ナデ 指ナデ	ヨコナデ 指オサ工後 ハク目	
12 6	1区 SH3P7+ SP133	甕	弥生 土器	14.0	14.0+ α	-	-	角閃石 長石 石灰	淡茶黄色 ～茶灰色	淡茶黄色 ～暗茶灰 色	ハク目 指オサ工後 ナデ	ヨコナデ 指オサ工後 ハク目	
12 7	1区 SH3 南東区	甕	弥生 土器	-	7.8+ α	-	-	角閃石 長石 石灰	淡黄白色 ～淡黄褐色	淡茶色～ 淡褐色	ナデ後ミガ キ	ナデ ハク目	
12 8	1区 SH3 北東区	甕	弥生 土器	-	6.2+ α	-	-	角閃石 長石 石灰 白色粒子	淡茶褐色 ～淡茶灰 色	暗灰色～ 淡茶灰色	ナデ後ミガ キ	ヨコナデ ハク目 刻目	
12 9	1区 SH3 北東区	甕	弥生 土器	-	4.6+ α	-	-	角閃石 長石 石灰 白色粒子	茶褐色	茶灰色～ 茶褐色	ナデ後ミガ キ	ヨコナデ ハク目	
12 10	1区 SH3 南東区	甕	弥生 土器	-	10.2+ α	-	-	角閃石 長石 石灰	淡白黄色 ～赤色	赤色	ハク目後施 文 ナデ	沈線後施文 鬚文	
12 12	1区 SH3 北東区	甕	土師器	-	8.4+ α	-	-	角閃石 長石 石灰	淡白黄色	淡黄白色	ヨコナデ クスリ後ナ デ	ヨコナデ ハク目 (単 位不明)	

第1b表 土器観察表②

図 番 号	出土地点	器 種	種別	法 量				胎 土	色 調		調 整		備 考
				口徑	器高	底徑	最大胴		内	外	内	外	
12	1区 SH3 南東区	鉢	弥生 土器	(12.0)	9.6	5.4	-	角閃石 長石 石英	淡黄白色	淡黄白色	ナデ 指オサ工後 ナデ	ナデ ナデ後ハク 目	
16	1区 SH4 南区	甕	弥生 土器	-	3.6+ α	(5.6)	-	角閃石 長石 砂粒	淡黄褐色	淡黄褐色 ～淡黄褐色	ナデ	ナデ ハク目	
22	1区 SK3P2	甕	弥生 土器	(21.2)	48.3	11.2	(41.0)	石英 長石 角閃石 白色粒子	橙茶色～ 黒灰色	褐色～淡 茶褐色	指オサ工後 ナデ	ヨコナデ ナデ後ミガ キ ミガキ 指オサ工後 ナデ	
24	1区 SK4P1	甕	弥生 土器	37.4	37.2+ α	-	(53.4)	石英 長石 角閃石 白色粒子	橙茶色～ 茶褐色	黄褐色～ 橙茶色～ 赭灰色	指オサ工後 ナデ	ヨコナデ ハク目	
26	1区 SK6	甕	弥生 土器	-	4.8+ α	-	-	角閃石 長石 石英 白色粒子	淡黄茶色	淡茶褐色	ナデ	ナデ後施文	
28	1区 SK8	甕	弥生 土器	-	3.5+ α	-	-	長石 角閃石 石英	淡茶色	茶褐色	ナデ	ナデ後施文	
32	1区 SK1P3	広口 甕	弥生 土器	-	16.7+ α	9.0	(24.9)	角閃石 長石 石英	淡黄褐色	淡褐色～ 淡黄褐色	ミガキ	ミガキ ナデ	
32	2区 SK1P1+ P3	甕	土師器	-	13.8+ α	-	-	長石 角閃石 石英	淡茶白色	赭灰色～ 淡茶白色	ミガキ	ナデ ハク目	
36	1区 8トレン 子	浅鉢	縄文 土器	-	9.3+ α	-	-	角閃石 長石 石英 白色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	洗滌文 風化の為調 整不明瞭	
40	2区 SH6P1	坏蓋	須恵器	-	2.2+ α	-	-	長石 角閃石 石英	淡赤褐色	淡赤褐色	回転ナデ	回転ヘラウ スリ後手持 ちヘラウス リ	
43	2区 SP155	浅鉢	縄文 土器	-	*	-	-	石英 長石 角閃石 白色粒子	茶褐色	茶褐色	クスリ	筆痕 洗滌文	
46	3区 SK17	甕	弥生 土器	-	10.0+ α	-	-	長石 角閃石 石英	淡黄白色 ～淡黒灰 色	淡黄白色 ～黒灰色	ナデ ミガキ	ハク目 ナデ	
46	2区 SP191	甕	弥生 土器	-	9.9+ α	-	-	角閃石 長石 石英	赤褐色	赭灰色～ 赤褐色	ナデ	ハク目 菊目	
46	3区 SP173	ミニ チュア	土師器	2.7	2.0～ 2.4	-	-	石英 角閃石	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサ工後 ナデ	指オサ工後 ナデ	
51	4区 SK14P2	甕	弥生 土器	(34.6)	23.0	10.2	-	石英 長石 角閃石 白色粒子	黒色～褐 灰色	赤褐色～ 褐灰色	ナデ ナデ後ハク 目	ナデ ハク目後ミ ガキ ハク目 指オサ工後 ナデ	
53	1区 4区 SP7	罎	土師器	-	5.2+ α	-	-	石英 長石 角閃石 白色粒子	淡黄褐色 ～淡灰色	淡黄褐色 ～淡灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ クスリ	
53	2区 SD7	坏身	須恵器	-	3.0+ α	-	-	長石 角閃石	淡灰白色	淡灰白色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラウ スリ	
54	4区 SX1	小皿	土師器	7.1	1.1	-	-	長石 角閃石 褐色粒子	淡茶白色	淡茶白色	回転ナデ	回転ナデ 回転糸切盤	
57	1区 5区畑	甕	弥生 土器	-	3.0+ α	-	-	長石 角閃石 褐色粒子	淡茶白色	淡茶褐色	ミガキ	ミガキ後工 具による施 文	
57	2区 5区畑	甕	弥生 土器	-	2.7+ α	-	-	長石 角閃石 石英 褐色粒子 白色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ後施文	ナデ	

第1c表 土器観察表③

図 番 版	出土地点	器 種	種別	法 量				胎 土	色 調		調 整		備 考
				口徑	器高	底径	最大胴		内	外	内	外	
57	3 5区 堀	甕	弥生 土器	-	3.5+ α	-	-	長石 角閃石 石英	淡茶白色	淡茶白色	ナデ	ナデ後焼文	
61	1 5区 SK4・5	大形 甕	土師器	(20.8)	10.9	-	-	石英 長石 角閃石	淡白灰色 ～淡灰褐色	淡白褐色 ～黒灰色	ナデ ハケ目痕跡 あり	ナデ ハケ目	
61	2 5区 SK4・5	甕	土師器	-	4.9+ α	-	-	角閃石 長石 褐色粒子	淡白灰色 ～淡茶白色	淡白褐色 ～淡茶白色	指オサ工後 ナデ	風化の為調 整不明瞭	
61	3 5区 SK4・5 + SK6	甕	土師器	(17.1)	21.7+ α	-	(20.1)	角閃石 長石 石英	淡白黄色 ～淡黄褐色	淡白黄色 ～灰褐色	ヨコナデ クスリ 指オサ工後 ナデ	ヨコナデ ナデ ハケ目	
61	4 6区 3トレ+ SK4・5	レナ	弥生 土器	(27.2)	21.6+ α	-	-	石英 長石 角閃石 白色粒子	淡茶白色 ～灰色	淡茶白色 ～暗灰色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ハケ目後ナ デ クスリ	
61	5 5区 SK1.4.5	小型 甕台	土師器	-	7.2+ α	(14.0)	-	角閃石 長石 石英	淡茶褐色	淡暗灰色 ～黒灰色	工具ナデ ナデ	ナデ 調整不明瞭	
61	6 5区 SK4・5	甕	土師器	-	27.2+ α	-	-	角閃石 長石 石英	淡茶白色	淡白黄色	ナデ	ナデ?	
61	7 5区 SK4・5	甕	弥生 土器	-	7.0+ α	-	-	長石 角閃石 石英	淡黄白色	淡茶白色	ナデ	ナデ	
64	1 5区 SK5P3	甕	土師器	(13.1)	21.2	-	(18.8)	石英 角閃石 長石 砂粒	淡茶白色 ～淡灰褐色	淡茶白色 ～褐色	ヨコナデ ハケ目 指オサ工後 クスリ 指ナ デ	ヨコナデ 指オサ工後 ナデ ヨコナデ	
64	2 5区 SK5	甕	弥生 土器	-	3.9+ α	-	-	角閃石 長石 石英 白色粒子	淡茶白色 ～暗茶色	暗茶色	指オサ工後 ナデ ヨコナデ	指オサ工後 ナデ ヨコナデ	
67	1 5区 SK31P1	甕	土師器	15.0	9.4	-	(19.4)	角閃石 長石 褐色粒子	淡茶白色	淡茶白色	ヨコナデ 指オサ工後 クスリ	ヨコナデ ハケ目	
67	2 5区 SK31	甕	土師器	17.8	12.9+ α	-	-	角閃石 長石 石英 褐色粒子	淡茶白色	淡茶白色			
69	1 5区 SK32	高 環	土師器	-	5.2+ α	-	-	角閃石 砂粒 石英	淡白褐色 ～淡褐色	淡白褐色 ～淡褐色	ナデ?	ナデ?	
69	2 5区 SK3 P1～3	甕	土師器	-	10.9+ α	-	-	石英 長石 角閃石 褐色粒子	淡茶白色	暗灰色～ 淡茶白色	指オサ工後 ナデ ハケ目	風化の為調 整不明瞭	
71	1 5区 SK2	甕	弥生 土器	-	2.9+ α	-	-	角閃石 長石 石英 白色粒子	暗茶色	赤褐色	ナデ	ハケ目後沈 着 ハケ目	
71	2 5区 SK2	甕	弥生 土器	-	5.6+ α	-	-	角閃石 長石 石英	淡茶黄色	淡茶褐色	指オサ工後 ナデ	ナデ ヨコナデ	
71	3 5区 SK2	高 環	弥生 土器	-	9.9+ α	(9.6)	-	角閃石 長石 白色粒子	淡白黄色	淡白黄色	ヨコナデ 工具ナデ しぼり痕跡	ハケ目 ヨコナデ	
71	4 5区 SK2	甕	弥生 土器	-	5.9+ α	-	-	石英 長石 角閃石 砂粒	淡白黄色	淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	
71	5 5区 SK2	甕	弥生 土器	-	11.5+ α	8.0	-	石英 長石 角閃石 砂粒	淡白黄色	淡白黄色 ～黒灰色	ナデ	ナデ ナデ後ハケ 目	
71	6 5区 SK2	甕	弥生 土器	-	6.6+ α	-	-	角閃石 長石 石英	淡黄白色	淡黄白色 ～黒灰色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケ目 ハケ目後ミ ガキ	
71	7 5区 SK2	甕	弥生 土器	-	5.6+ α	6.4	-	角閃石 長石 石英 白色粒子	灰褐色	暗褐色	ナデ 工具ナデ	ナデ ハケ目	

第1d表 土器観察表④

図 番 号	出土地点	器 種	種別	法 量				胎 土	色 調		調 整		備 考
				口徑	器高	底徑	最大胴		内	外	内	外	
72 1	5 区 27 グリッド	壺	弥生 土器	-	4.3+ α	-	-	長石 角閃石 石英	淡茶白色	淡茶白色	ナデ	ナデ後脛文	
72 2	5 区 27 グリッド	壺	弥生 土器	-	2.75+ α	-	-	長石 角閃石 石英 褐色粒子	淡茶白色	淡茶白色	ナデ	ナデ後脛文	
72 3	5 区 25 グリッド	甕	弥生 土器	-	8.3+ α	-	-	角閃石 長石 石英 白色粒子	淡茶白色	黯灰色～ 淡茶褐色	指オサ工後 ナデ	指オサ工後 ナデ	
72 4	5 区 25・ 26グリッド	壺	弥生 土器	-	13.1+ α	-	-	石英 砂粒 長石 雲母	淡白黄色	淡黄白色	ナデ?	ナデ?	
72 5	5 区 SK6P1	大形鉢	土師器	28.4	22.9	9.7	28.0	角閃石 長石 石英	淡槽白色 ～淡茶灰 色	淡槽白色 ～黯灰色	ヨコナデ 指オサ工後 ナデ クズリ	ヨコナデ ハク目 指オサ工後 ナデ	
72 6	5 区 25・26 グリッド	広口 壺	弥生 土器	-	8.5+ α	-	-	石英 長石 角閃石 砂粒	淡白黄色 ～黒灰色	淡槽黄色 ～淡白 黄色	ナデ?	ナデ?	
72 7	5 区 25・26 グリッド	壺	弥生 土器	-	7.9+ α	9.5	-	角閃石 長石 石英	淡黄白色	淡黄白色	ナデ	ナデ 一部ハク目	
77 1	6 区 SK26P2	甕	土師器	13.5	18.0	-	17.4	石英 長石 角閃石 雲母	淡灰黒色 ～淡槽黄 色	黒灰色～ 淡白黄色	ヨコナデ ナデ クズリ後ナ デ	ヨコナデ ハク目 ナデ	
77 2	6 区 SK26P1	甕	土師器	(13.8)	20.0	-	18.6	石英 細砂粒	淡白灰色 ～淡白褐 色	淡白槽色 ～淡灰黒 色	指オサ工後 ナデ 調整不明瞭	ヨコナデ 調整不明瞭	
77 3	6 区 SK26	甕	土師器	-	6.0+ α	-	-	長石 角閃石 金雲母	淡茶白色	淡茶白色 ～淡茶灰 色	クズリ ナデ 指オサ工 ヨコナデ	ヨコナデ ハク目	
83 1	6 区 SK14	甕	弥生 土器	-	4.9+ α	-	-	角閃石 長石 石英	淡槽白色	淡槽白色	ヨコナデ	ヨコナデ ミ刀キ (単 位不明瞭)	
83 2	6 区 SK14	甕	弥生 土器	-	7.15+ α	-	-	角閃石 長石 石英 褐色粒子	淡茶白色	淡茶白色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	
88 1	6 区 SP1	甕	弥生 土器	-	10.0+ α	7.4	-	角閃石 長石 石英	淡灰褐色 ～淡槽黄 色	淡白黄色 ～淡槽黄 色	ナデ	ハク目 ナデ 指オサ工後 ナデ	
88 2	6 区 御木眼1	御付 壺	須恵器	-	6.2+ α	8.0	-	長石 角閃石 白色粒子	淡灰色	淡灰色～ 淡灰赤色	回転ナデ	回転ナデ クズリ後ナ デ	
88 3	6 区 御木眼6	小型 鉢	土師器	-	6.1+ α	-	-	角閃石 長石 石英 白色粒子	淡白黄色 ～黒灰色	淡白黄色 ～黒灰色	工具ナデ ナデ	ナデ?	
88 4	遺跡 一話	壺	弥生 土器	-	3.1+ α	-	-	角閃石 長石 石英 白色粒子	淡茶白色	淡茶白色	ナデ	ナデ後脛文	

第2表 土鐘観察表

図版	番号	出土位置	層位	胎土	長さcm	外径cm	口径上cm	口径下cm	重さg	備考
53	4	4区SD-7		土師調	(4.00)	1.00	0.30	0.35	4.8	上頸欠損
53	5	4区SD-7		土師調	5.05	1.25	0.50	0.50	8.2	
53	6	4区SD-7		土師調	4.90	1.15	0.45	0.45	5.8	
54	3	4区SX-1		土師調	4.50	0.95	0.35	0.40	5.2	
54	4	4区SX-1		土師調	4.35	1.15	0.50	0.55	4.7	
		5区27グリッド		土師調	3.35	0.90	0.45		3.2	半ば欠損
83	3	6区SK-14		土師調	5.00	1.35	0.40	0.40	9.0	
		通跡一括		土師調	5.35	1.20	0.35	0.30	7.5	

第3表 出土石器観察表

図版	番号	出土区	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
13	1	1区SH-3南東区	砥石	軽石	8.95	6.00	3.80	130.5	下頸欠損
13	2	1区SH-3北西部	台石	角閃石安山岩	11.95	9.10	4.90	765.6	
13	3	1区SH-3北西部	台石	凝灰岩	5.45	5.80	2.05	75.6	左上欠損
14	4	1区SH-3北西区	石皿	角閃石安山岩	18.00	15.40	4.40		
14	5	1区SH-3北西区	石皿	角閃石安山岩	24.90	20.40	7.90		
36	2	1区SP-81	敲石	角閃石安山岩	8.75	3.35	2.20	74.6	
36	3	1区SP-20	敲石	角閃石安山岩	6.60	4.60	2.90	122.8	
36	4	1区SK-2	凹石	角閃石安山岩	11.65	11.50	4.80	1017.4	
37	5	1区SK-5	推器	安山岩	9.70	13.10	4.50	532.5	
46	4	3区SP-191	石錘	始鹿屋黒曜石	2.15	(1.80)	0.50	1.2	右側欠損
46	5	3区SP-164P3	磨石	砂岩	(7.85)	9.40	3.25	330.1	上頸欠損
53	3	4区SD-7	磨製石斧未成品	安山岩	7.30	2.70	2.70	76.1	
54	2	4区SP-240	石錘未成品	始鹿屋黒曜石	1.75	1.50	0.55	1.1	
54	5	4区SX-1	扁平打製石斧	角閃石安山岩	14.10	7.40	1.60	228.4	
54	6	4区SP-226	凹石/磨石	砂岩	10.70	10.60	3.65	548.3	
57	4	5区第1号燧跡	推器	腰岳系黒曜石	(2.40)	2.20	0.55	2.8	下頸欠損
57	5	5区第1号燧跡	推器	始鹿屋黒曜石	4.95	3.20	1.55	18.9	右側左頸欠損
57	6	5区第1号燧跡	石核	始鹿屋黒曜石	3.80	3.05	1.85	21.8	
57	7	5区第1号燧跡	磨製石斧	砂岩	(11.80)	5.20	2.90	217.3	右側欠損
57	8	5区第1号燧跡	扁平打製石斧	緑泥片岩	(3.20)	4.40	0.90	19.3	基部側欠損
57	9	5区第1号燧跡	緑泥片岩	扁平打製石斧	(4.00)	4.60	0.90	20.5	基部欠損
62	1	5区SK-4・5	推器	安山岩	9.75	10.25	3.00	312.0	
62	2	5区SK-4・5上層	台石	角閃石安山岩	(6.40)	8.55	1.30	96.0	上半欠損
62	3	5区SK-4P1	石皿	安山岩	29.40	16.10	5.50		
64	3	5区SK-5	扁平打製石斧	緑泥片岩	7.45	5.05	1.20	67.9	左側縁欠損
71	8	5区SK-2P2	石皿	砂岩	36.20	22.70	9.40		
73	1	5区25・26グリッド	砥石	安山岩	(4.20)	3.25	2.05	37.1	裏面欠損
73	2	5区34グリッド	磨石	砂岩	8.50	6.95	2.35	226.4	左側縁下半欠
73	3	5区34グリッド	敲石	緑泥片岩	(5.10)	5.05	1.75	53.9	上頸欠損
73	4	5区27グリッド	敲石	角閃石安山岩	6.05	3.40	3.55	82.0	
73	5	5区28グリッド	推器	角閃石安山岩	7.00	7.75	3.00	158.9	
73	6	5区南部一括	推器	始鹿屋黒曜石	3.60	3.85	1.10	10.6	
81	1	6区SK-12南半	石錘	金山産サカイト	2.30	1.40	0.30	1.1	
83	5	6区SK-14	扁平打製石斧	角閃石安山岩	(5.95)	7.50	1.40	91.2	基部側欠損
86	1	6区SK-19	扁平打製石斧	緑泥片岩	(8.65)	5.25	0.95	49.5	左右側縁欠損
83	4	6区SK-14	台石	角閃石安山岩	10.30	8.90	2.85	401.2	
88	5	6区試掘4トレンチ	扁平打製石斧	角閃石安山岩	10.30	8.40	1.60	178.5	右側分欠損
88	6	通跡一括	打製石斧	安山岩	(4.90)	3.70	1.45	18.4	上半欠損
88	7	6区SK-16	石錘	角閃石安山岩	7.50	5.90	2.40	167.2	
88	8	6区樹木敷7	敲石	角閃石安山岩	7.90	4.10	3.35	173.5	
88	9	通跡一括	砥石	安山岩	3.65	3.15	0.85	7.8	

第5表 器種別石材組成表

器種 石材	器種														合計		
	石鏝	削器	播器	磨製 石斧	扁平打 製石斧	打製 石斧	割・ 砕片	石板	石鏃	鎌器	敲石	磨石	凹石	台石		砥石	石皿
埴輪産 黒曜石	2		1				34	5									42
	2.3		18.9				68.8	45.9									135.9
鎌倉系 黒曜石			1														1
			2.8														2.8
姫野産 黒曜石				1													
				10.6													
金山産 サヌカイト	1						1										
	1.1						7.2										
							3										
							8.0										
							1										
							3.4										
玉 髓																	
角閃石 安山岩					3		1		1	1	9	2	2	8			4
					498.1		30.5		167.2	158.9	1713.5	554.2	1637.1	4210.6		6546.4	15516.5
安山岩		1		1	1	1	4			2	1	3		5	3		5
		36.0		76.1	34.4	18.4	167.4			844.5	56.9	1578.9		2122.7	90.3	9169.8	14195.4
凝灰岩														1			1
														75.6			75.6
緑泥片岩					4		1				1			1			7
					157.5		10.0				53.9			87.7			309.1
蛇紋岩					1												1
					217.3												217.3
砂 岩				1							1	2	1				5
				226.4							1145.7	1338.3	548.3				383.3
靫 石																1	1
															130.5		130.5

第4章 まとめ

1. 出土土器の様相について

佐知遺跡は、山国川が中津平野に広がる起点に位置する自然堤防状の遺跡で山国川流域の拠点集落の一つである。高原地区は調査区が狭いため確定的なことは言えないが遺跡の緑辺部に当たると推定される。しかしながら縄文時代後期、弥生時代前期、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世と広い幅に渡って土器が出土していることから拠点集落の特徴である長期間にわたり、人々が生活空間（墓地・畑・水田などを含む）として利用したことが明らかになった。以下各時代の土器の特徴を示す。縄文時代の土器は、後期前半（約3,500年前）のいわゆる鐘ヶ崎式土器と呼ばれるもので山国川流域では、昭和62年に現在の上毛町新吉富垂水貝塚で発掘調査がなされ、この種の土器が出土している。中津市内では、棒垣貝塚・法垣遺跡とこの時期に遺跡が広がることが分かってきた。特に、法垣遺跡は拠点集落として注目されるものである。

ついで出土する土器は、弥生時代前期後半前後（約2,200年前）のものである。この間1,300年は、佐知集落の緑辺部に居住した縄文人や土地空間はどのようになったのであろうか。縄文人は昭和63年の発掘調査では、佐知遺跡の中心部で縄文時代後期中頃～後半の土器などが大量に出土しており、そこに移動したと思われるが、土地空間はどのように利用されたのか今後の課題であろう。

話がややそれたが、この時期の土器の特徴をみてみよう。

弥生時代前期後半前後の壺は、図示できるものが胴部上半片8点、口縁部片1点、胴部上半～口縁部片1点である。基本的な特徴としては、胴部上半に文様がほどこされていることである。種類としては、ヘラによる有軸羽状文1点、無軸羽状文2点、山形文1点である。これらは、北部九州（福岡平野を中心とした地域）の板付ⅡB式と呼ばれる壺の特徴をもつ。特に第3号住居址出土（10）の壺は、内面頸部に赤色顔料を施しており「祭り」に使ったものであろうか。ヘラ書きの壺に対して胴部上半を二枚貝の瓦痕より文様をつけるものがある。模様形態としては、無軸羽状文1点、四重連続山形文1点、山形文2点、木葉文1点、五重垂下楕円形文、五重凹圧文がある。これらの壺は、警灘から周防灘にかけて多く分布することから北部九州及び警灘沿岸部の情報が入っていたのであろう。

壺の出現は、稲作と密接に関係することから佐知の弥生集落では、弥生時代前期後半前後に北部九州周辺や警灘沿岸部から稲作が移入されて開始されたと考えられる。これを証明する石器としては木製鎌などを制作する時に使う柱状片刃石斧の出土がある。なお、約1km北側の上ノ原平原遺跡では、ほぼ同時期の壺や石包丁（總つみ具）が出土しており、佐知集落の緑辺部に弥生時代前期後半前後の水田があった可能性は高い。

甕は、図示できるもので17点出土している。口縁部～胴部上半が11点、胴部上半が1点、口縁部を欠くものが1点、完形のが1点、底部が2点である。その特徴として、「下城式土器」とよばれる別府湾を中心として分布する甕7点と板付Ⅱ式Bと下城式の折衷した土器が1点、計8点が出土しており、壺と甕の交流要素が違うのが大きな特徴であり、下城式土器で言えば別府湾岸からの最後の起点であろうか。

昭和52年に調査された現上毛町中桑野遺跡では、下城式土器の出土は少ない。とはいえ、板付Ⅱ式B系の土器もユレギラーのものも含めて4点出土している。特に、第1号土坑NO1の甕は、内・外面に細かなヘラミガキを板付Ⅰ式壺の技法が残ったものであろうか？ いずれにせよ特異なものである。底部は、2点出土している。両者ともに上げ底で、一方は厚手の底である。もう一方は、断面か

ら底部の製作技法が観察できる。厚手のものはやや新しいものであろう。

次に、高原地区に遺構が出現するのは、弥生時代後期前半前後（約1800年前）である。この間300年間は、また空白地帯になる。

第1調査区南半の方形住居である3号住居出土土器がそれにあたる。瀬戸内系の凹線文甕1個体とともに、在地産の大・中・小の甕各1個体、小鉢、胴部が球形に膨らむ壺片などが出土した。また、1区4号土抗では、別府湾岸に分布の中心を持つ口縁部平坦部に浮文をもつ壺を倒立させて小児用甕棺に使用している。同じく3区土抗内には、凹線文の壺を倒立させて小児用甕棺に使用している。両者どもの外来形の土器であり、この調査区内では、その他に墳墓は出土しておらず特殊な小児に対する埋葬儀礼であったのであろうか。この他に弥生時代前期後半前後の土器は1区SK-1甕片、5区SK-2壺底部～胴部片2片、甕のつまみ上げ口縁片、頸部凸体もち口縁部が朝顔状に開く胴部片などがある。

弥生時代終末期～古墳時代初頭（約1750年前）には、前時期と比べて50年と短い空白期間がある。この時期の特徴的な土器として庄内式・布留式土器と呼ばれる近畿地方特有の土器が出土する。この時期、倭政権は、蝦夷、薩摩、大隅地域を除きほぼ全国の領域を統治することになる。このような状況下で、庄内式土器を持ち込んだと思われる土器が、5区SK-31出土の甕である。外面に右下方向タタキ、内面ヘラケズリ、頸部指押さえ、口縁端部を若干つまみ上げ、器壁は非常に薄いのが特徴である。畿内、あるいは福岡平野からの持ち込みであろう。また、平行叩きのある壺、底部がレンズ状をなし、球形部が丸い壺片、口縁部が長く、胴部も寸胴の甕がSH-2より出土している。5区SK-3の壺、5区SK-4・5の胴部に刻目凸帯をもつ壺、緩く延びる長頸の甕片などが、弥生終末～古墳時代初頭のものである。

布留式土器も多く出土している。5区SK-5から1個体、SK-4・5・6が接合し、1個体になる。SK-26では、スガが付着していることから日常用の布留式甕を土抗底部に2個並べている。何らかの祭祀行為であろうか。5区1・4・5は、小型器台の脚部である。庄内式期～布留式期の典型的なものでやはり祭祀に使うものである。しかしながら、ミニチュア土器は出土しているものの高坏は小片しかなく大規模な「祭り」を行った痕跡はない。

なお、小片であるが、6世紀後半の杯蓋・身、奈良～平安時代初頭の須恵器脚付長頸壺片、中世の小皿、土鍋などが出土している。佐知遺跡高原地区は、この時期まで生活空間として活用している。特に、土鍋は、第7号遺構より出土しており、中世の館の北を画する溝の可能性が高い。

以上、佐知高原地区の土器の様相を見てきたが、弥生時代前期後半前後には福岡平野・響灘沿岸部・周防灘沿岸・別府湾岸の影響を受け稲作りが成立する。

弥生時代後期前半前後には、東瀬戸内・別府湾沿岸の影響を受け、特殊な小児用甕棺を採用する。

弥生時代終末～古墳時代初頭前後にかけては、庄内式・布留式の土器をいち早く取り入れている。

このように、佐知高原地区は、他地域の土器文化を先進的に取り入れる文化のクロスロード地域であり、このことが山国川流域の拠点集落の一つであることの証明となろう。

凹線文土器については、福岡大学教授 武末純一氏、総社市教育委員会 平井典子氏の御教示を得た。

2. 出土石器について（第3～5表）

本遺跡で出土した石器について若干の見当を加えてゆく。

石鏃が3点、削器が2点、搔器が2点、磨製石斧が3点、打製石斧が1点、扁平打製石斧が8点、

石鐘が1点、礫器が3点、敲石が12点、磨石が7点、凹石が3点、台石が15点、砥石が4点、石皿が10点の他、石核が5点、剥・破片が45点で、総計124点の出土を見る。

そのうち、狩猟に関わる石器である石鏃は、縄文～弥生時代が想定されるが、本遺跡では弥生土器及びその遺構が検出され、縄文土器も若干検出されており、いずれの時代か厳密には判別できない。石鏃3点のうち、2点は姫島産黒曜石製で、1点は香川県金山産と考えられるサスカイト製である。姫島産黒曜石は5点の石核と34点の剥・破片が出土していることから、石核が本遺跡内に搬入され製作されたかと推測される。金山産サスカイト製は他に1点の剥片が検出されており、剥片が搬入されたか、製品搬入だと考えられる。

削器は、安山岩製・腰岳系黒曜石製各1点で、腰岳系黒曜石は削器1点のみで製品搬入と考えられ、安山岩は剥片も検出されており、素材・剥片が遺跡内に搬入され、製作された可能性がある。

搔器は、姫島産黒曜石製・婿野産黒曜石製各1点で、前者は搬入された石核から製作されたと考えられ、後者は搔器1点のみで製品搬入と推測される。

磨製石斧は安山岩製・蛇紋岩製・砂岩製各1点で、安山岩製のみが剥片・素材で搬入され製作されたか、再生などの可能性があるが、蛇紋岩・砂岩は製品搬入である。

打製石斧は安山岩製1点のみで、剥片で搬入されたか、再生された可能性がある。

扁平打製石斧は、角閃石安山岩製3点、安山岩製1点、緑泥片岩製4点である。角閃石安山岩・緑泥片岩は製品搬入だと考えられ、若干の再生を行なった可能性があり、安山岩は剥片で搬入され製作されたか、再生された可能性がある。いずれにしろ、石斧自体の製作は盛んではない。

石鐘は角閃石安山岩製1点のみで、製品搬入だと考えられる。

礫器は、角閃石安山岩製1点・安山岩製2点で、前者は製品搬入で、後者は素材・剥片を搬入し、製作したが、再生を行なった可能性がある

砥石は安山岩製3点・軽石1点で、全て製品搬入であろう。

敲石・磨石・凹石・台石・石皿は、自然礫利用の近在からの持込であろう。

即ち、石核搬入による姫島産黒曜石での石鏃・削器・剥片搬入による金山産サスカイトでの石鏃のという剥片石器の製作と、剥片搬入による安山岩での削器・石斧類・礫器の若干の製作のみが行なわれ、他は殆ど製品搬入という実態が読み取れる。

また、第3号住居址から出土した砥石・台石・石皿が弥生時代の所産であるのがほぼ確実であることを除くと、大半がグリッド出土か他時代遺構への混入と考えられる。石器の大半の所産は、縄文時代の土器が少なすぎることに、割合点数の多い扁平打製石斧から、その下限の時期である弥生時代前期ではないかと考えられる。

3. 遺構について

本遺跡で検出された遺構・遺物は、縄文時代～中世にまでの永きに亘るが、縄文時代は後期の土器片が数点出土したのみで、古墳時代中期以降の遺構・遺物についても大した量は検出されておらず、主なものは、弥生時代前期後半前後・弥生時代中期末～後期初頭・弥生時代終末～古墳時代初頭の3期に限定されるようである。また、第2調査区には古墳時代後期の住居址が1軒検出されている以外、時期が明確になった遺構は検出されていない。

まず、最も古い弥生時代前期後半前後だが、第2調査区を除く全ての調査区から遺構が検出されており、遺構の種類は第6表の通りである。第1調査区で竪穴住居址が1軒検出されているが、住居址

かどうか厳密には不明で、調査区南半の第1・第2調査区に貯蔵穴が集中し、調査区北側の第5調査区南端に扁平打製石斧が検出された畑跡が存在し、その周辺である第4・第5調査区に墓壇ないしは祭祀遺構が展開する状況が見え、北端の第6調査区は判然としない。居住区域である竪穴住居址は別位置に求められるか。

次いで、弥生時代中期末～後期初頭であるが、第1調査区と第5調査区にしか明確な遺構は認められない(第7表)。しかも、第5調査区は性格が判然としない竪穴状遺構1基のみで、生活スペースは第1調査区に限られるようである。第1調査区には竪穴住居址1軒・墓壇ないしは祭祀遺構3基が認められ、居住区と墓域が近接する。水田耕作を始め、水田を別地域に有するからか、第1～第6調査区に拡がる弥生前期に比べると生活スペースが狭まったようである。

次に、弥生時代終末期～古墳時代初頭であるが、調査区南端の第1調査区に竪穴住居址1軒、北端の第5・第6調査区に墓壇ないしは祭祀遺構5基が検出されている。即ち、遺跡南端の居住区と、第1・第4調査区北西端に認められる、圃場整備前に存在した窪地を挟んで、遺跡北端に墓域がかなり隔たって存在したと推測される。また、弥生中期遺構の水田域は、第4調査区と第5調査区にかつて存在した窪地に存在したと推察される。

第6表 弥生時代前期後半前後の遺構の種類

遺構 調査区	住居址	墓壇 or 祭祀遺構	貯蔵穴	一般的な土坑	竪穴状土坑	畑跡
第1調査区	1		4	1		
第3調査区			2			
第4調査区		1				
第5調査区		1				1
第6調査区				1	1	

第7表 弥生時代中期末～後期初頭の遺構の種類

遺構 調査区	住居址	墓壇 or 祭祀遺構	貯蔵穴	一般的な土坑	竪穴状土坑	畑跡
第1調査区	1		4	1		
第3調査区			2			
第4調査区		1				
第5調査区		1				1
第6調査区				1	1	

第8表 弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構の種類

遺構 調査区	住居址	墓壇 or 祭祀遺構	貯蔵穴	一般的な土坑	竪穴状土坑	畑跡
第1調査区	1		4	1		
第3調査区			2			
第4調査区		1				
第5調査区		1				1
第6調査区				1	1	

寫 真 圖 版 編



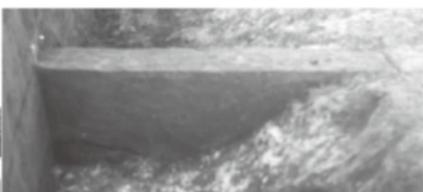
1. 第1号住居址完掘状況東から



2. 第1号住居址西壁東から



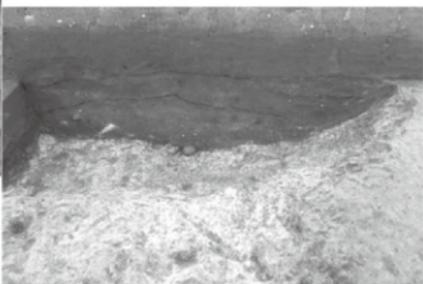
3. 第4号住居址生活面南から



4. 第4号住居址東西ベルト南から



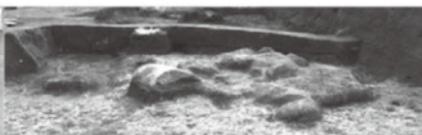
5. 第4号住居址南北ベルト南半東から



6. 第4号住居址南北ベルト北半東から



1. 検出状況南から



2. 東西ベルト北から



3. 南北ベルト南半東から



4. 南北ベルト北半東から



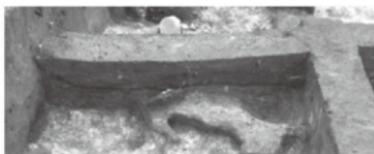
5. 生活面南から



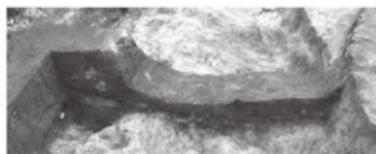
6. 遺物出土状況南から



1. 生活面東から



2. 東西ベルト東半北から



3. 東西ベルト西半北から



4. 南北ベルト南半西から



5. 南北ベルト北半西から



6. 遺物出土状況西から



1. 第3号土坑検出状況西から



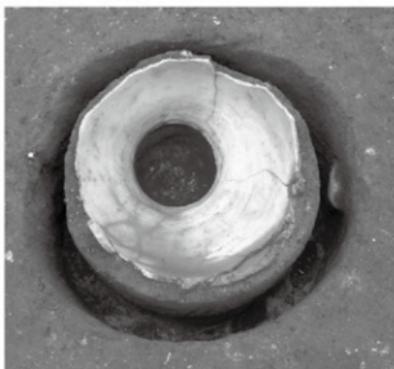
2. 第3号土坑東西ベルト北から



3. 第3号土坑南北ベルト西から



4. 第3号土坑遺物出土状況西から



5. 第4号土坑遺物出土状況東から



6. 第4号土坑検出状況東から



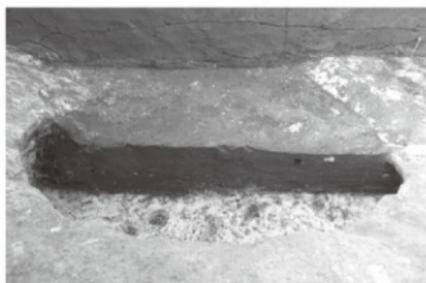
7. 第4号土坑完掘状況西から



8. 第4号土坑半截状況北から



1. 第6号土坑完掘状況・東壁西から



2. 第8号土坑半截東から



3. 第8号土坑完掘状況西から



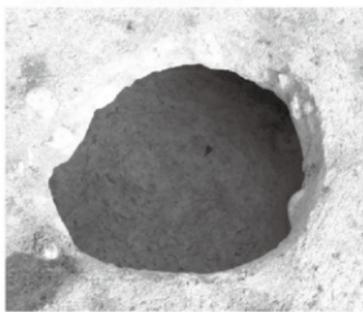
4. 第9号土坑半截東から



5. 第9号土坑完掘状況東から



6. 第17号土坑半截西から



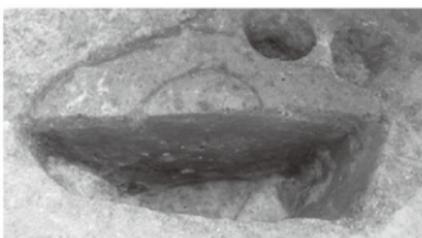
7. 第17号土坑完掘状況西から



1. 第1号土坑完掘状況西から



2. 第2号土坑半截状況



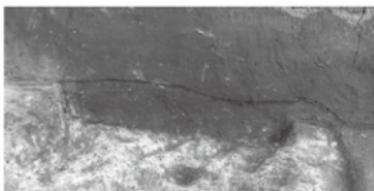
3. 第5号土坑半截西から



4. 第5号土坑完掘状況西から



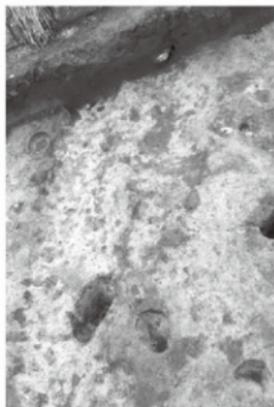
5. 第76号柱穴窿出土状況東から



6. 第1号溝状遺構東壁西から



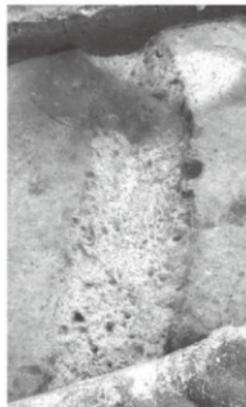
7. 第1号溝状遺構完掘状況西から



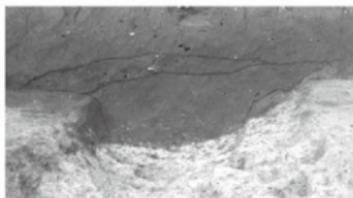
1. 第1b号溝状遺構完掘状況西から



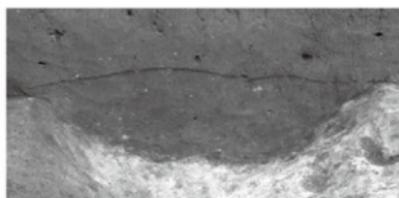
2. 第2号溝状遺構完掘状況南西から



3. 第3号溝状遺構完掘状況西から



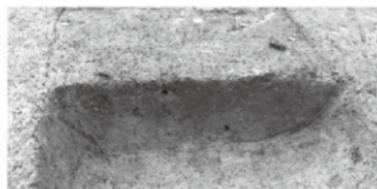
4. 第2号溝状遺構西壁東から



5. 第3号溝状遺構東壁西から



6. 第4号溝状遺構a・b境土層南西から



7. 第4号溝状遺構b・c境土層北東から



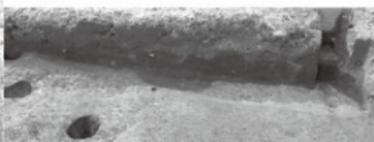
8. 第4号溝状遺構完掘状況南西から



1. 第5号住居址生活面東から



2. 第6号住居址生活面東から



3. 第6号住居址西壁東から



4. 第5・6号溝状遺構完掘状況西から



5. 第151号柱穴遺物出土状況東から



6. 第15号土坑完掘状況・西壁東から(第3調査区)



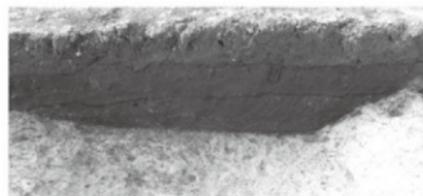
1. 第7号住居址生活面南から



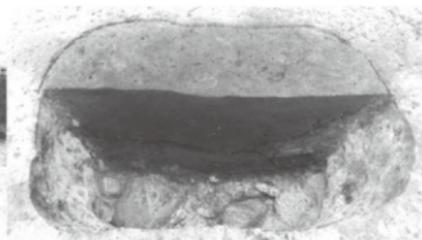
2. 第7号溝状遺構完掘状況西から



3. 第13号土坑完掘状況北から



4. 第7号溝状遺構西壁東から



5. 第13号土坑半截西から



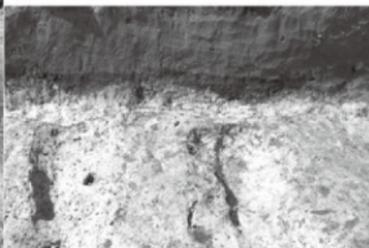
1. 半截東から



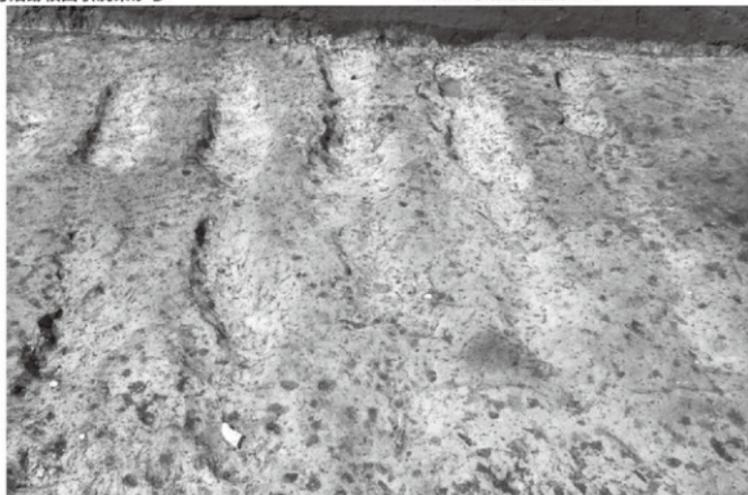
2. 完掘状況西から



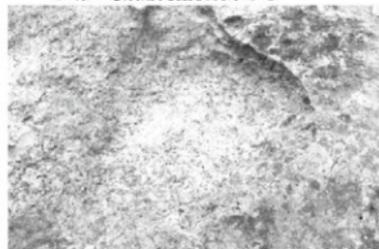
1. 第1号畑跡検出状況東から



2. 第1号畑跡西壁東から



3. 第1号畑跡完掘状況東から



4. 第30号土坑完掘状況北から



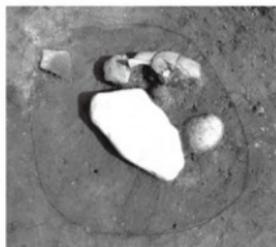
5. 第30号土坑半截北から



6. 第33号土坑半截西から



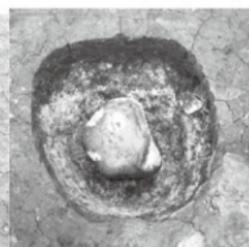
7. 第33号土坑完掘状況北東から



1. 第4号土坑検出状況西から



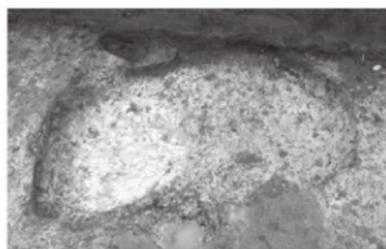
2. 第4号土坑半截北から



3. 第4号土坑完掘状況東から



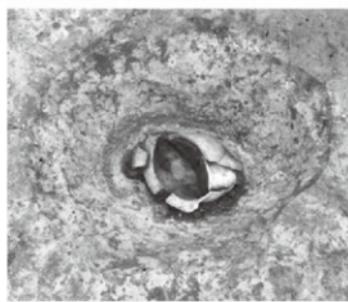
4. 第5号土坑半截西から



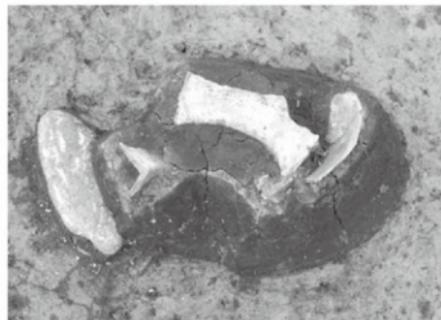
5. 第5号土坑完掘状況東から



6. 第6号土坑半截東から



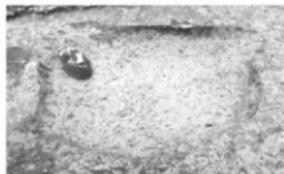
7. 第6号土坑完掘状況東から



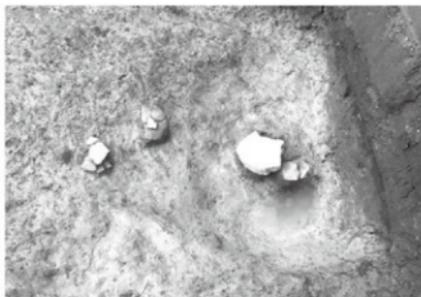
8. 第31号土坑遺物出土状況北から



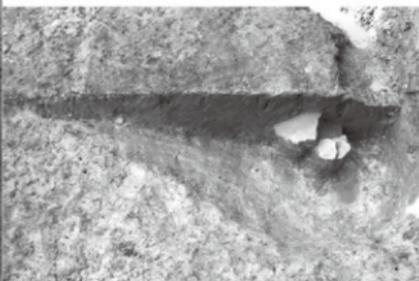
9. 第31号土坑中央ベルト南から



10. 第31号土坑完掘状況北から



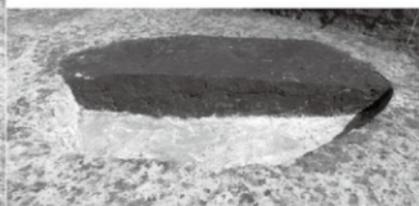
1. 第32号土坑完掘状況東から



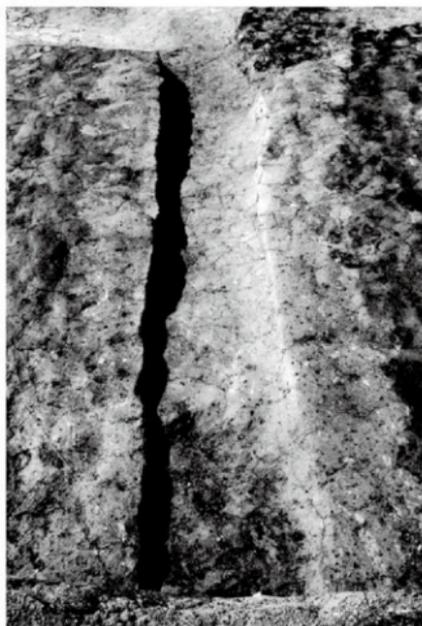
2. 第32号土坑半截東から



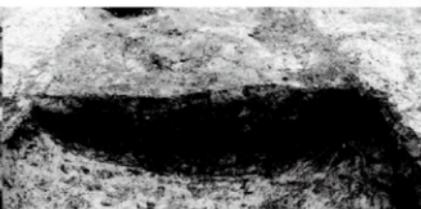
3. 第2号土坑完掘状況東から



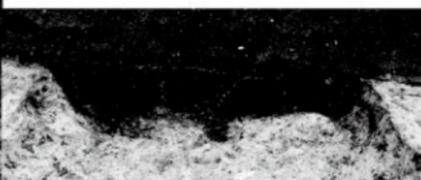
4. 第2号土坑半截西から



1. 第1号溝状遺構完掘状況東から



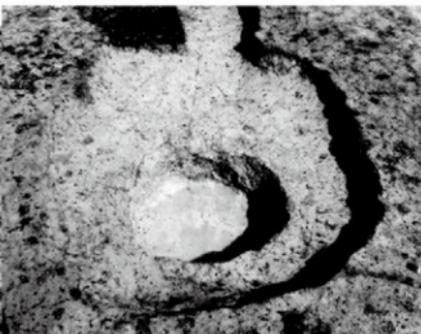
2. 第1号溝状遺構a・b填土層西から



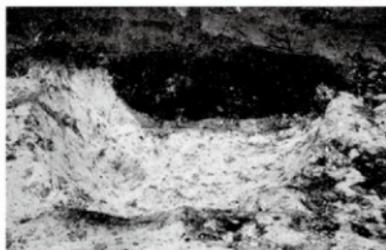
3. 第1号溝状遺構東壁西から



4. 第26号土坑遺物出土状況南から



5. 第26号土坑完掘状況南から



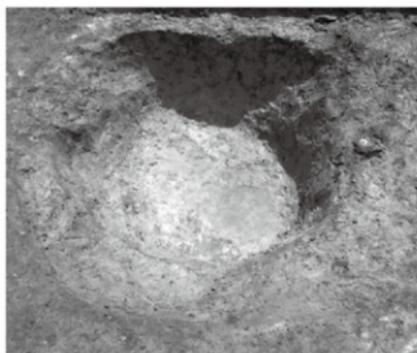
6. 第9号土坑完掘状況・西壁東から



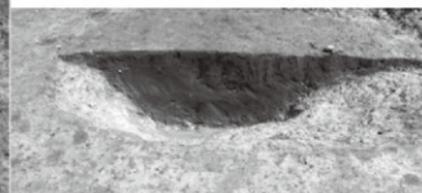
1. 第19号土坑完掘状況東から



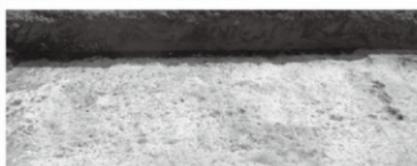
2. 第19号土坑半截南から



3. 第20号土坑完掘状況西から



4. 第20号土坑半截西から



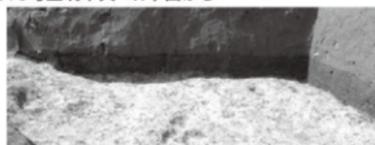
5. 第10号土坑完掘状況西から



6. 第10号土坑中央ベルト西から



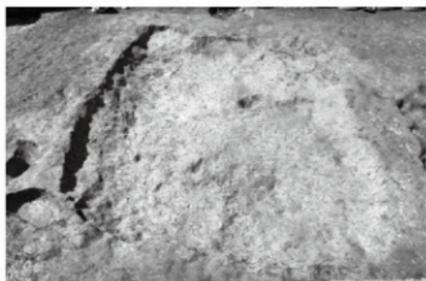
7. 第11号土坑完掘状況東から



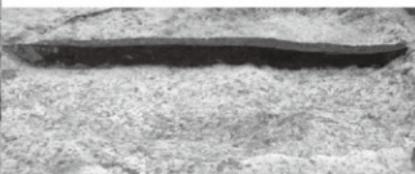
8. 第11号土坑西壁東から



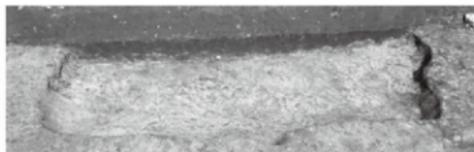
9. 第11号土坑北壁南から



1. 第12号土坑完掘状況北から



2. 第12号土坑中央ベルト南から



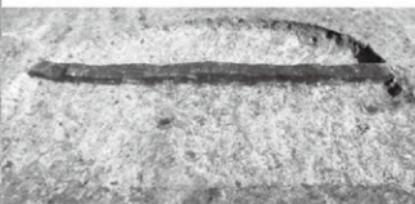
3. 第14号土坑完掘状況東から



4. 第14号土坑西壁東から



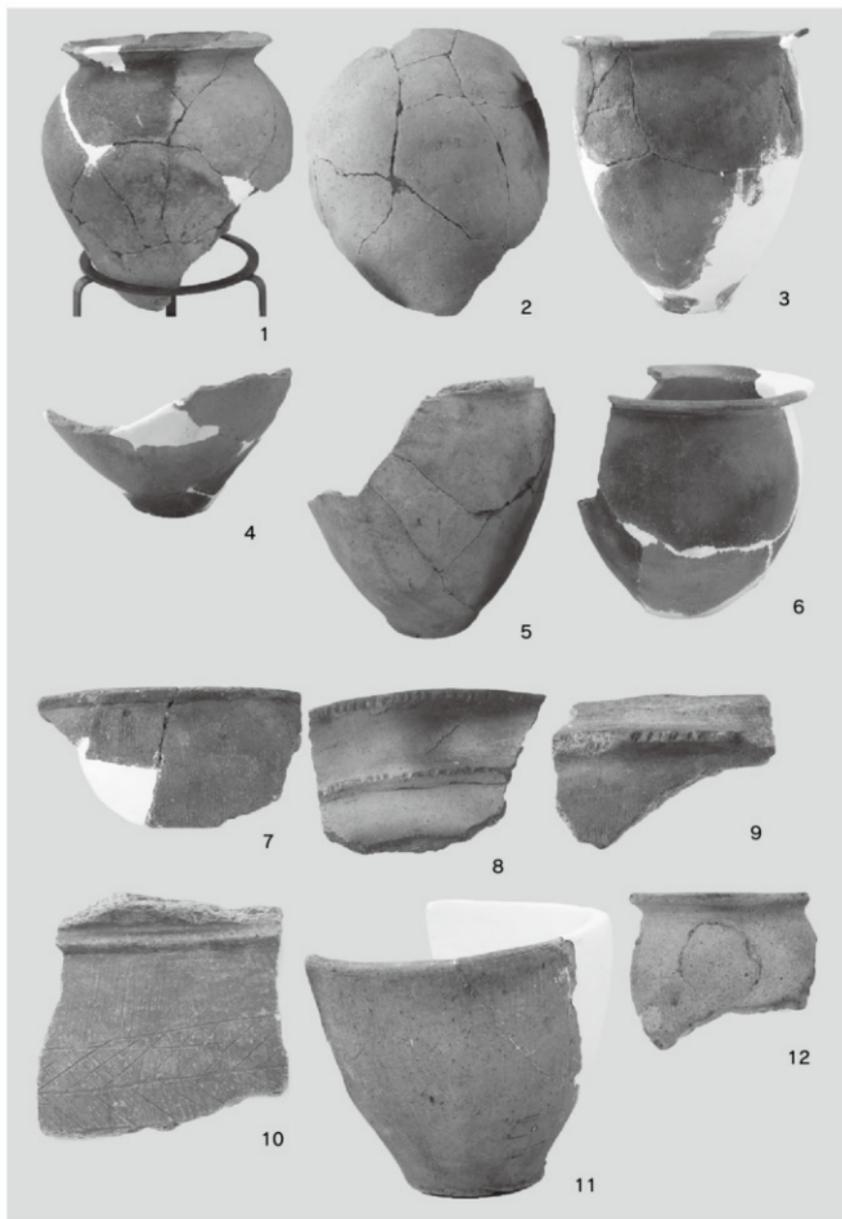
5. 第15号土坑完掘状況西から



6. 第15号土坑中央ベルト西から



第10図 第2号住居址出土土器



第 12 図 第 3 号住居址出土土器



第 13 図 第 3 号住居址出土石器①



第 14 図 第 3 号住居址出土石器②



第 28 図
第 8 号土坑出土石器

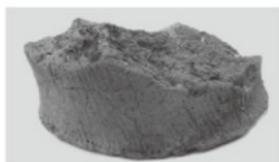


第 22 図 第 3 号土坑出土土器

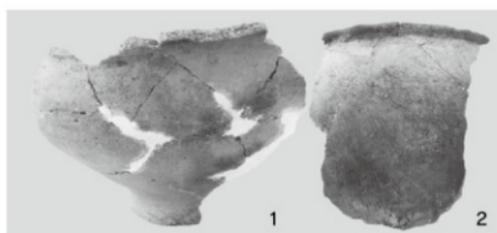
第 24 図 第 4 号土坑出土土器



第 26 図
第 6 号土坑
出土土器



第 16 図 第 4 号住居址出土土器



第 32 図 第 1 号土坑出土土器



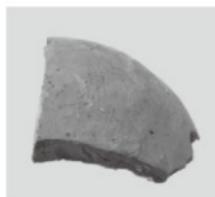
第36図 第1調査区出土の他の遺物①



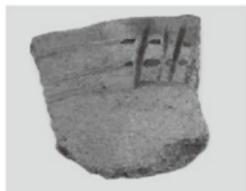
本遺跡出土の土錘



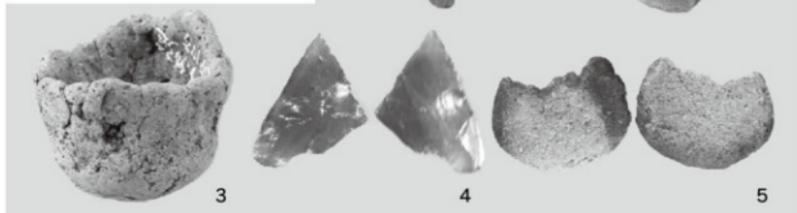
第37図 第1調査区出土の他の遺物



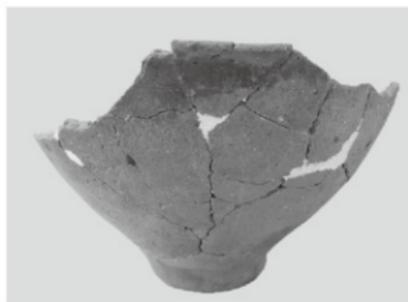
第2調査区
第40図 第6号
住居址出土土器



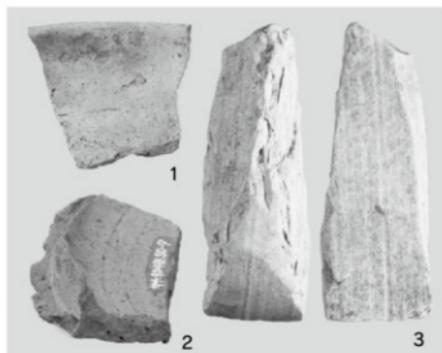
第43図 第2調査区出土の他の遺物



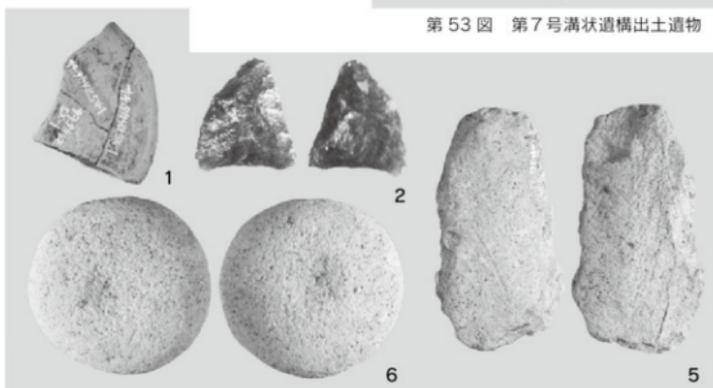
第3調査区 第46図 第3調査区出土の他の遺物



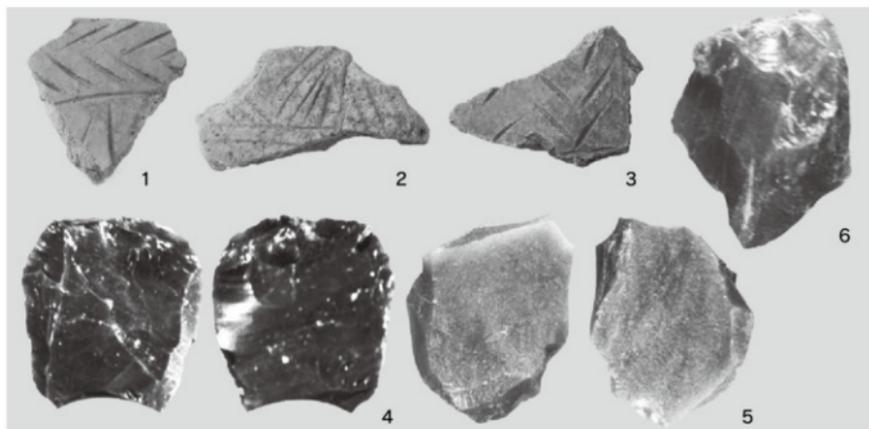
第51図 第14号土坑出土土器



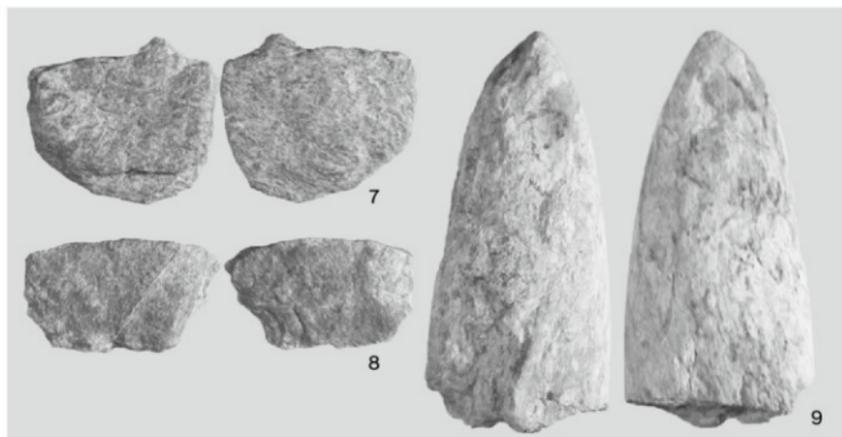
第53図 第7号溝状遺構出土遺物



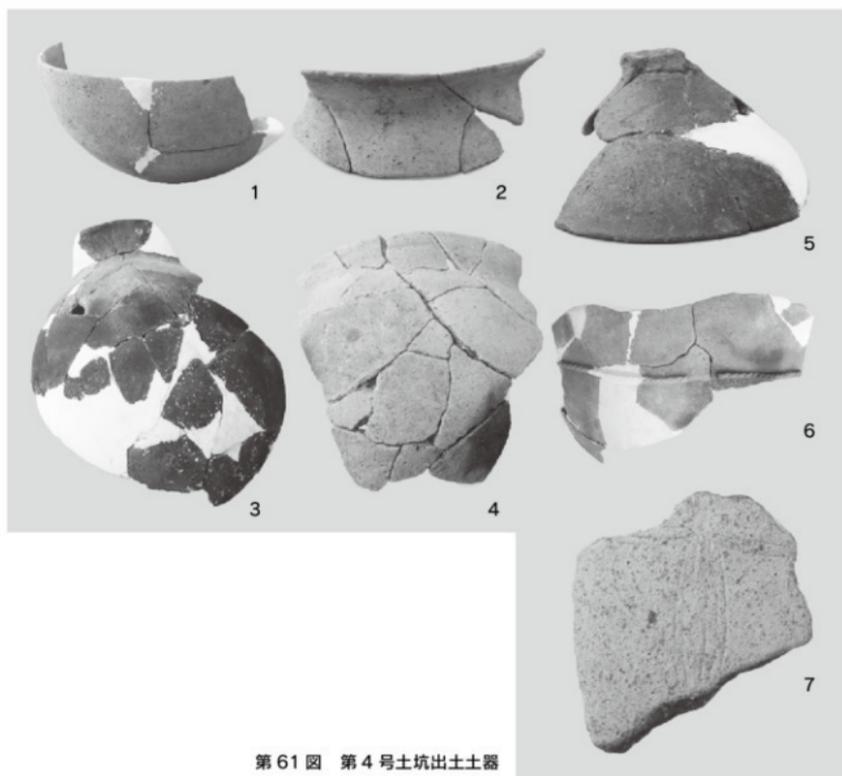
第54図 第4調査区出土の他の遺物



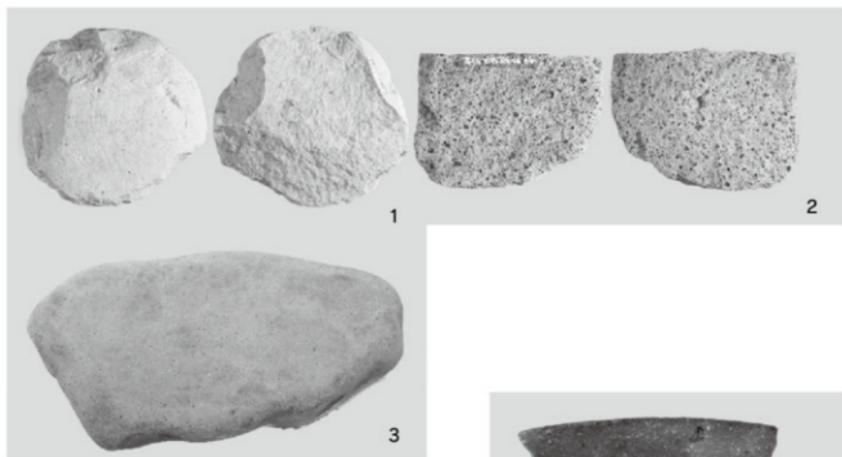
第57図 第1号畑跡出土遺物



第 57 図 第 1 号畑跡出土遺物



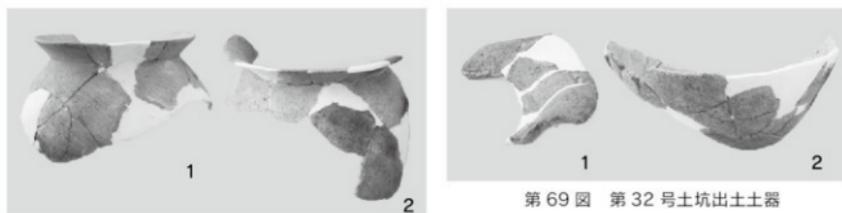
第 61 図 第 4 号土坑出土土器



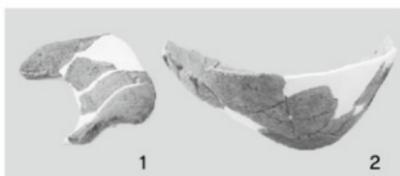
第 62 図 第 4 号土坑出土石器



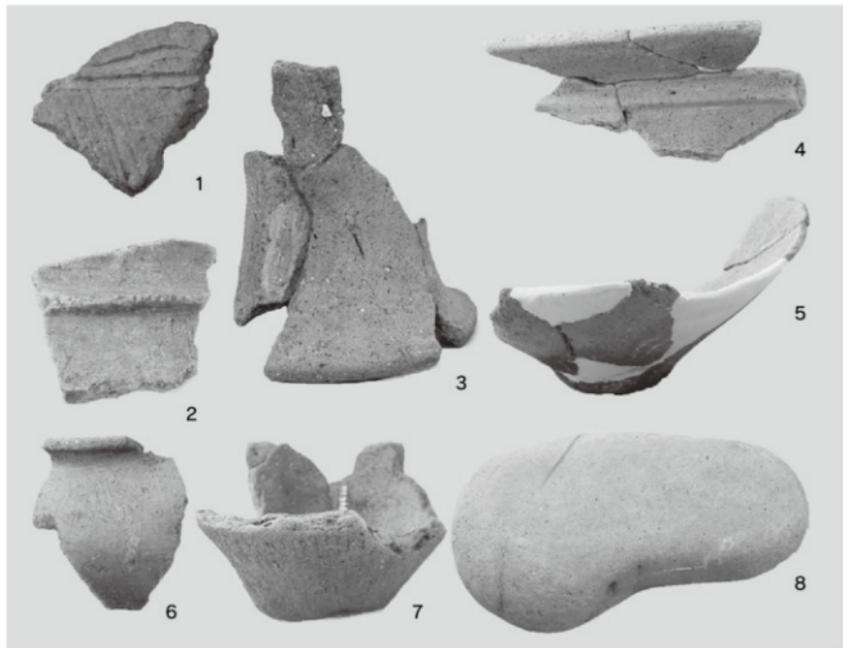
第 64 図 第 5 号土坑出土遺物



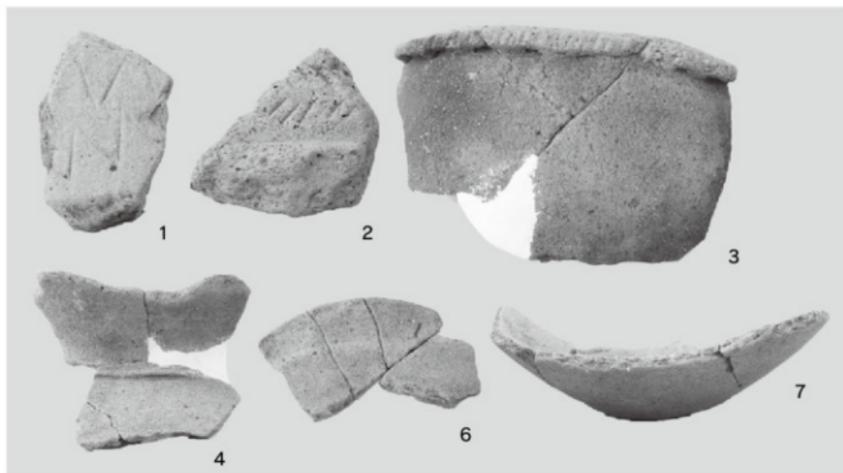
第 67 図 第 31 号土坑出土石器



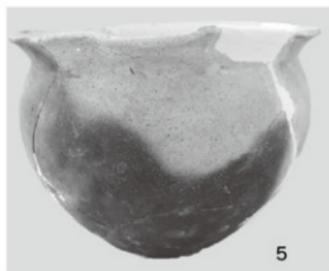
第 69 図 第 32 号土坑出土石器



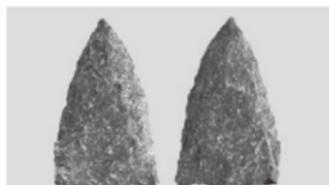
第71図 第2号土坑出土遺物



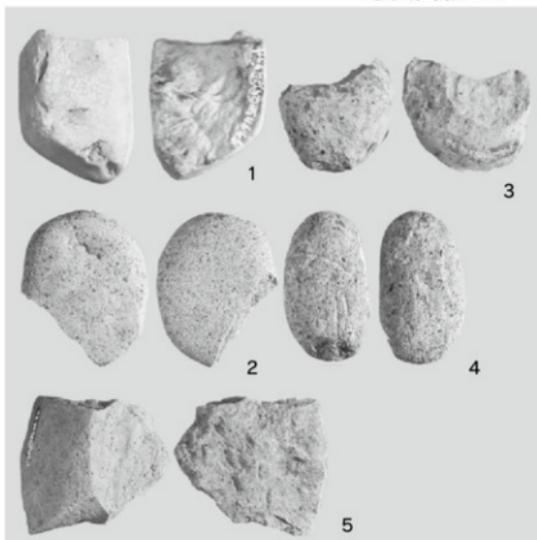
第72図 第5調査区出土の他の土器



第 72 図 第 5 調査区出土の他の土器



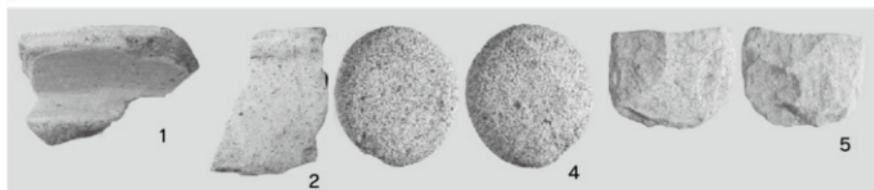
第 81 図 第 12 号土坑出土石器



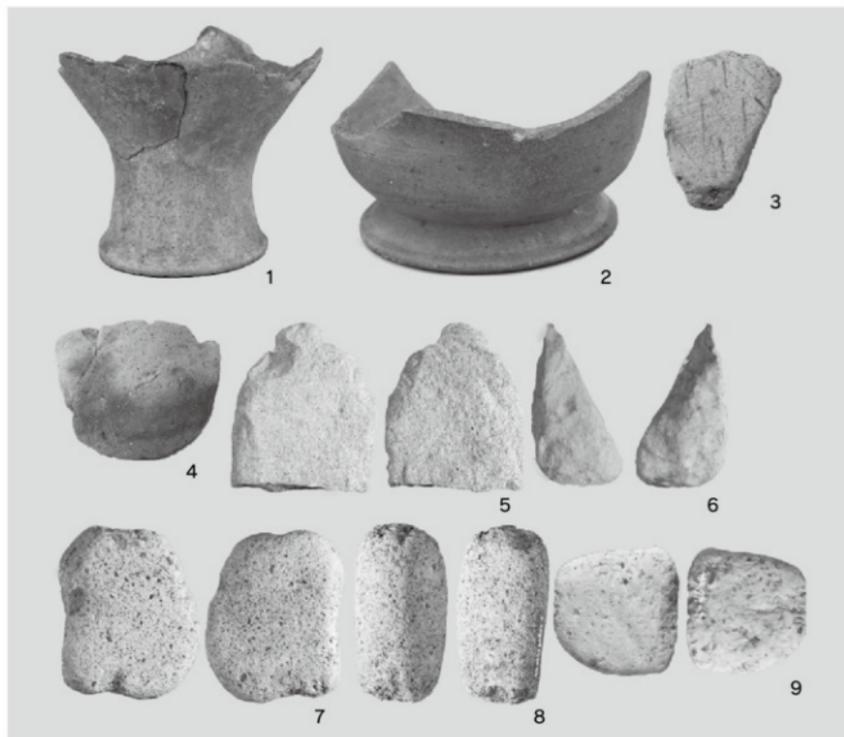
第 73 図 第 5 調査区出土の他の石器



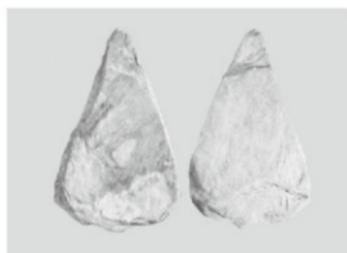
第 77 図 第 26 号土坑出土土器



第 83 図 第 14 号土坑出土遺物



第 88 図 第 6 調査区出土の他の遺物



第 86 図 第 19 号土坑出土石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	さちいせきたかはらちくはつくつちょうさほうこくしょ								
書名	佐知遺跡高原地区発掘調査報告書								
副書名	佐知白木線拡幅・新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名	中津市文化財調査報告								
シリーズ番号	第67集								
編集者	萩 幸二								
編集機関	中津市教育委員会								
所在地	〒871-8501 中津市豊田町14番地3								
発行年月日	平成26年3月31日								
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
佐知遺跡高原地区	大分県中津市 大字佐知 47～59番	44203	203152	33° 09' 31"	131° 39' 07"	20111215 ～ 21120414	3825㎡	市道拡幅 ・新築工 事	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物				
佐知遺跡高原地区	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代	竪穴住居址 溝状遺構 土坑 柱穴 土壘墓		縄文土器 石鐮 石皿 台石 扁平打製石斧 弥生土器 土師器 須恵器 石錘 礫器				

中津市文化財調査報告第67集
佐知遺跡高原地区発掘調査報告書

佐知白木線拡幅・新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年3月31日

発行 中津市教育委員会

印刷 高橋印刷所